

上越新幹線関係
埋蔵文化財発掘調査報告書

第 8 集

三ツ寺 I 遺跡

古墳時代居館の調査

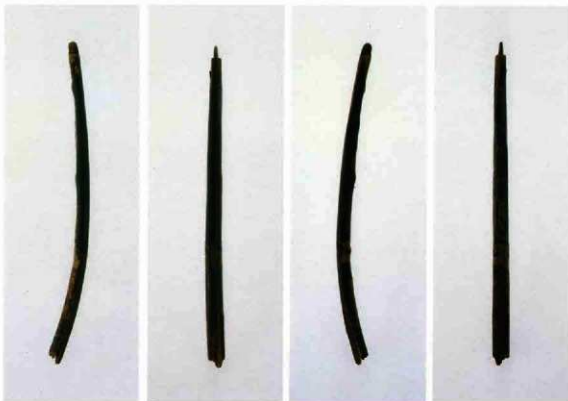
(木器編)

1988

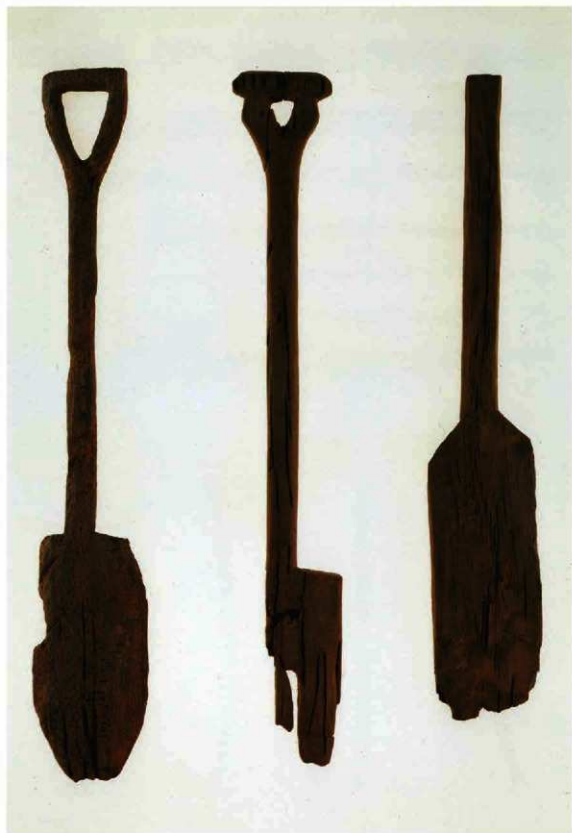
群馬県教育委員会
助群馬県埋蔵文化財調査事業団
東日本旅客鉄道株式会社



1 漆出土の木製の刀類



2 南濠出土の漆弓



出土した鋤類

凡 例

1. 本書は、上越新幹線関係三ツ寺1遺跡の発掘調査報告書の第2分冊である。本遺跡は、古墳時代後期の豪族居館跡であるが、館を取り囲む濠、2基の井戸から出土した木製品を一括掲載し、報告をする。
2. 遺物は、木製品だけで1～547までの通番を付し、基本台帳に登録をした。図版、観察表等で使用した番号は、これを指している。
3. 遺物出土状態図の中で使用したスクリーントーン表現は、次のことをさす。
第2、6、8図 網代、蕨状編物
遺物図の中で使用したスクリーントーンは次のことをさす。
第22図 No23 (丸木弓)、第29図 No273 (椀の底板)、黒漆の塗布
4. 遺構図の縮尺は、 $1/6$ を基本とし、付図に1～3区を分けて $1/60$ で示した。
遺物の縮尺は、 $1/6$ を基本とし、第72図は $1/6$ 、第74～76図を $1/6$ とした。
5. 年輪は、樹芯との関係を示すために1cm厚の中で本数を数えて、模写に近い状態で表現した。また、焼け焦げ痕を持つ例が多いが、文章表現にとどめた。
6. 観察表に示した法量は、現存値を示した。
7. 樹種鑑定は、国立科学博物館 山内 文氏に依頼をし、535点について観察表に付した。

目 次

1	資料について	1
2	調査区別の出土状態	4
	1 南 濠 2 西 濠 3 北 濠	4
3	器種別の分布	15
4	器種別の特徴	17
5	木取りと加工	27
6	ま と め	33
7	自然遺物について	123
8	三ツ寺 I 遺跡出土水浸埋没木材のポリエチレン(PEG)の 含浸処置について	126

図版目次

巻頭図版

- 1-1 木刀形
2 ウルシ弓 (No24)
2 一木長柄鋸 (No.27、1、317)

図版

- 1-1 南濠 (1区東) 木器出土状態
2 南濠 (1区西)
2-1 南濠 (1区西) 外縁部木器出土状態
2 南濠 (1区西) 中央より出土した鋸
3-1 南辺推定第3張出部付近の南濠 (1区東) から出土した鋸
2 南濠 (1区東) 中央より出土した鉄
3 南辺石垣基部より出土した鉄
4-1 南辺推定第2張出部東辺基部より出土した弓
2 南辺推定第2張出部東辺基部より出土した銅代
3 南濠 (1区西) 外縁部付近より出土した槌
5-1 西辺第2張出部北辺基部付近の木器出土状態
2 西辺第1張出部南辺基部付近の木器出土状態
6-1 西濠 (2区西) 木器出土状態
2 西辺橋梁遺構付近より出土した槌と柱材
7-1 西濠 (2区西) 外縁部付近の木器出土状態
2 西辺第2張出部南辺基部付近の木器出土状態
8-1 西辺橋梁遺構付近の木器出土状態
2 西辺橋梁遺構付近より出土した槌と柱材はFAに直接埋められていた
3 槌と柱材の出土状態
9-1 西濠 (2区西) 外縁部付近の木器出土状態
2 西濠 (2区西) 外縁部付近の木器出土状態
3 西辺第1張出部先端の西濠より出土した槌
10-1 南濠 (1区西) 外縁部付近より出土した鉄
2 西濠 (2区西) 外縁部付近より出土した鉄
3 西辺第1張出部先端付近より出土した銅代、下部は槌
11-1 北濠 (3区東) と北辺堤状遺構
2 北辺橋梁遺構
12-1 北辺橋梁遺構木器出土状態
2 北辺橋梁遺構木器出土状態
13-1 北辺橋梁遺構木器出土状態
2 北辺橋梁遺構木器出土状態
14-1 北濠取水部 (3区西) 木器出土状態
2 北濠取水部より出土した葦状編物
15・16 ナスビ形着柄鋸
17 又鋸、長柄鋸、着柄鋸、把手、紡織具
18 紡織具

- 19 横 槌
20 容 器
21 用途不明
22~26 丸木弓、平弓
27~32 木刀形
33 有眼クサビ形
34 用途不明、刀子の柄
35 厚 板
36・37 有孔板材
38 槌、鏝
39 槌、厚板
40~42 厚 板
43 太 杭
44 丸 杭
45 厚板、角材
46 板 材
47 板材、角材、クサビ形
48~52 角 材
53 把手、加工板
54 木片、曲物、盆
55 角 材
56 角材、クサビ形
57~59 丸 杭
60 丸杭、杖杭
61~66 杖 杭
67 羽杭、杖杭
68~72 太 杭
73 太杭、角杭
74~77 丸 杭
78 丸 杭
79 丸杭、角材
80 太 杭
81 太杭、角材
82・83 太 杭
84・85 建築材
86 槌
87 建築材
88 厚 板
89 把手付板、井戸枠
90・91 井戸枠
92~94 機 脚
95 濠出土のモモ
96-1 濠出土のオニグルミ
2 濠出土のヒヨウタン

挿 図 目 次

- | | | | | | |
|-----|-------------|------|-------|-------------------|-------|
| 1~2 | 南濠出土状態 | 5 | 14・15 | 長柄鋸、ナスビ形着柄鋸 | 35、36 |
| 3~7 | 西濠出土状態 | 6~12 | 16 | 又鋸、長柄鋸、着柄鋸、把手、紡織具 | 37 |
| 8 | 北濠出土状態 | 14 | 17・18 | 横 槌 | 38、39 |
| 9 | 器種別分布 | 16 | 19 | 容 器 | 40 |
| 10 | 弓の形態分類 | 21 | 20 | 用途不明 | 41 |
| 11 | 刀形の形態分類 | 23 | 21 | 用途不明、棒状加工品 | 42 |
| 12 | 杖材、板材、角材の計測 | 24 | 22・23 | 丸木弓 | 43、44 |
| 13 | 木取り模式図 | 29 | 24・25 | 丸木弓、木刀形 | 45、46 |

26	木刀形	47	47	角材	68
27・28	有頭クサビ形	48、49	48～51	クサビ形	69～72
29	用途不明	50	52・53	丸杭	73、74
30	有孔板材	51	54	丸杭、枝杭	75
31	厚板、種	52	55	丸杭	76
32	膠、種	53	56～61	枝杭	77～82
33～35	厚板	54～56	62	角材、角杭	83
36	太杭、半截杭	57	63	角材、木片	84
37	太杭、半截杭、割材	58	64～68	太杭	85～89
38	厚板、板材	59	69	丸杭	90
39	板材、角材、クサビ形	60	70	角杭、枝杭、丸杭	91
40・41	角材	61、62	71	太杭、角材	91～92
42	把手、加工品	63	72	木槌、建築部材	91～92
43	加工板、加工材	64	73	厚板	92
44	加工板、木片	65	74	井戸枠、把手付板	93
45	下駄、曲物、木片	66	75	井戸枠	94
46	角材、木片	67	76	槌 膠	95

表 目 次

1	木製品調査区別集計……………	2	5	木刀形集計……………	23
2	木製品器種別集計……………	3	6	三ツ寺1遺跡樹種別集計……………	30
3	農具集計……………	18	7	三ツ寺1遺跡木製品観察表……………	96
4	丸木弓、平弓集計……………	21			

付 図

- 5 南塚（1区）木器出土状態図（ㄆ）
- 6 西塚（2区）木器出土状態図（ㄆ）
- 7 北塚（3区）木器出土状態図（ㄆ）

三ッ寺 I 遺跡出土木製品について

1 資料について

県内に於ける木製品は、弥生時代、古墳時代のものとしては、高崎市日高遺跡、新保遺跡、渋川市中村遺跡、前橋市元総社明神遺跡が報告され、未報告でも高崎市新保田中村前遺跡、前橋市二之宮千足遺跡、佐波郡東村三室A遺跡があるだけで、該期の集落遺跡の報告例が相次ぐ中で、その数は多いものではない。

これらの遺跡は、集落に伴う溝、水田跡やそれに係わる低湿地からの出土例で、時期は、日高、新保、新保田中村前の三遺跡が弥生時代中期後半から古墳時代初頭にかけて、残りが6世紀初頭頃に噴出したとされる二ツ岳FA前後で、古墳時代後期前半に比定される。出土した木製品の性格は、日高、新保に代表される様に農耕集落内での生産用具及び生活用具が主で、鋤、耨に代表される農具類に共通性と時代相を見ることができ、集落内外での生活復元について、土器や石器、あるいは金属器等の遺物とは異った視点を示してくれるものである。

本遺跡からは、館を囲む北、西、南の各濠と館の内部にある2号井戸、外縁にかかる3号井戸から多量の木製品が出土した。その内訳は、板の一部に削りを施した杭材に主体があるものの、一木長柄鋤やナスビ形着柄鎌等の農具、丸木弓や木刀形の武具、容器や槌等の生活用具、などの時代相を反映した加工材に分類されるものも多く、板材、角材、あるいは建築部材といったものも多い。これらは、当時の生活や木工技術、植生的一端を知るといだけでなく、古墳時代の館という遺跡の性格を知るために肉付けをする資料であり、出土状態や道具としての組成は館内部の構造とも関係し、平面的にとらえられた遺跡の内容を立体的に考えていく上での重要な手掛りである。

出土状態は、館の内部施設である2号井戸と、時期が古墳時代後期後半と下る3号井戸を別にして、各濠は、二ツ岳FA下で底面までを厚さ30~60cmで一様に覆う、有機物に富む黒色泥土を遺物包含層とし、広範囲にわたって同一の状況下で埋没したものと推定される。この中には、西辺や北辺にかかる橋梁遺構の様に、濠の遺構として使用されたものもあるが、その殆どは館の内部施設で使用済みとなったものが廃棄されたか、自然流入したかによると考えられ、廃棄された中には共存する土器や滑石製模造品の例からして祭祀に係わる木刀形や丸木弓の供献具が含まれる。

時期は、先の黒色泥土を厚さ30cm前後で覆っていた二ツ岳FAの存在と、木製品に供伴する土師器の年代観から、館の存続期間に対応する5世紀後半から6世紀前半に限定される。これらは、その後の擾乱を受けず、年代的に混濁のない一括資料とすることができる。

数量は、未整理のものを残すが、加工痕を持つものを基準にして、基本台帳に2163点を登録したが、全体では3千点を越すものと推定される(第1表)。出土量比としては、西濠が調査面積が多いためか1336点と全体の半数以上を占め、代表的・特徴的な器種を揃える。しかし、木製品以外の遺物との出土量比を見ると、西濠は少ない反比例の関係にあって、木製品の出土分布は各濠独自のものと推定される。

器種は、先端に削りを施した杭材を主体とするが、木取りに従って原材に近いものから、原材の状態を残す杭材系、分割を経て単独に使用されるか、加工品の素材ともなり得る板材、角材系、用途が明らかなもの、何らかのかたちを持つものを加工材系と三大別とし、器種毎の細別を第2表に示した。

三大別分類

- | | | | |
|---|-------|------|------------------------------|
| 1 | 杭材系 | 197点 | 太杭、割杭、半截杭、角杭、丸杭、枝杭、橋脚 |
| 2 | 板・角材系 | 212点 | 厚板、割材、角材、板材、有孔板材、うす板、木片、クサビ形 |
| 3 | 加工材系 | 137点 | 農具、武具、生活用具、建築部材、用途不明 |

器種は32に細分をしたが、用途が明らかなのは農具や武具、生活用具等に限られ、一器種一点というものも多い。これらの中には大型部材も多いが、未製品と思われるものは殆どなく、いずれも用途を達したか、使用が可能なものである。

本報告では、基本台帳に登録をした2163点の中から、遺存状態が良好で、形状に特徴を示すこと、調査区の出土量と内容を反映させることを基準に、加工品を主体にして546点を選別し、文末に観察表を付して掲載をする。

第1表 木製品調査区別集計

	出土遺構	台帳登録数	報告数	報告書番号	備 考、共存する特殊遺物	土器破片数
南 溝	1区西側道	37	25	No 1～25	栗道北で網代出土(第2図)、張出部の縁辺からは削り屑が多く出土 ヒョウタン	1区合計 3185点 灘出土 2203点 (69%)
	1区東側道	38	29	26～54		
西 溝	橋 脚	6	6	207～212	張出部の基部からの出土量多い、第1張出部際からは、高坏、滑石製模造品が出土、製刷用の羽口、増嶋も出土	2区合計 19539点 灘出土 605点 (3%)
	2区第1次調査		102	213～314		
	2区第2次調査	1330	232	315～547		
北 溝	3区西側道(1)	296	28	55～82	西からはヨシ科の茎を束ねたものが出土、東からは堤と北辺とを隔ぶ構梁があり、No150～204は、その橋脚等である。	3区合計 7197点 灘出土 5988点 (83%)
	3区西側道(2)	64	34	83～116		
	3区東側道(1)	222	33	117～149	クルミ、ヒョウタン、クリ 獣骨(牛・馬)、人骨	1～3区合計 29921点
	3区東側道(2)	168	55	150～204		
館内	2区2号井戸	2	2	205、206	滑石製模造品	
外縁	3区3号井戸		3		多量の坏、甕の土器に共存	
合 計		2163	546			

註 1. 3区東西側道に付く(1)、(2)は次のことを示す。

(1)は、主に重機掘削及び遺構確認中に出土したものを一括した。出土層位は、溝底面を覆う黒色粘土から上層の二ツ曲FP砂礫層を含む褐色土までに相当する。

(2)は、最下層の黒色粘土からの出土を示す。

2. 合計には、3区3号井戸の出土品を含んでいない。

第2表 木製品器種別集計

分類	器種	南澤・西	南澤・東	西 瀬	北澤・西	北澤・東	合計点数	備 考	
農 具	長柄鋤	1	1	2			4	農具合計 19点	
	着柄鋤		1				1		
	ナスビ形着柄鍬	3	1	4	1	2	11		
	又鍬の一部		1	1		1	2		
							1		
武 具	丸木弓	4	1	6	1	1	13	武具合計 33点	
	平弓(割弓)			1			1		
	木刀形 鞘の底板	1		15	1	1	18		
				1			1		
生 活 用 具	容器		1	3	1	2	7	生活用具合計 31点	
	櫛・榎 棒	2	1	6	2		12		
	刀子の 柄			1			1		
	下駄物 曲				1		1		
	紡織具・棒状品	1	1	4	2	1	2	8	
板 材 ・ 角 材 ・ 杭 材	建築部材				1	3	4	建築部材・板材・角材 合計 229点 橋脚・杭合計 198点	
	扉材			1			1		
	把手材			3			3		
	厚板材	1		20		4	25		
	割板材			2	2	1	5		
	角材	1		25	3	2	32		
	クサビ形材	1	6	47	6	3	72		
	有頭クサビ形材		1	57	1		59		
	有孔板材			15			16		
	榎 柱			11		1	12		
	橋脚 太			6		1	7		
	割杭・平截杭			4	2		32		
	角杭		1	15			2		
	丸杭	1	1	3	1	1	7		
枝杭	8	10	21	1	4	5	7	40	
			38	4	10	16	3	89	
用 途 不 明	用途不明 加工木板片			9	1		10	用途不明ほか合計 36点	
	加工木板片		2	14			14		
	木樹皮加工品	1	1	3	1	1	3		
	井戸 棒			1			1		
	把手付板			1			1		
				1			1		
合 計		25	29	342	28	34	33	55	546

※北澤西・東は、右の欄が最下層の黒色泥土出土をさし、左が黒色泥土から二ツ岳F P砂礫層を含む褐色土までの出土遺物を一括している。

2 調査区別の出土状態

木製品は、館を囲む北、西、南の各濠と2号井戸から出土した。各濠の出土状態は、調査した範囲と面積にもよるが、出土量と共伴遺物によって三者三様のあり方を示している。本項では、南、西、北濠の順序で付図と個別出土状態図をつけて、その出土状態の相違と特徴をのべる。

1 南濠（第1、2図、図版1～4）

南濠は、東西両側道に分かれる1区として調査をした。南濠の中での1区的位置は、東南寄りを南北方向に縦断し、推定を含む2基の張出部の中間に相当する。木製品の出土量は、同じ2基の張出部を持つ西濠と比較すると、枝杭を入れても100点前後と極端に少なく、濠の持つ機能差、館の内部施設との関係などを暗示している。

全体の出土状態は次の4点に要約される。

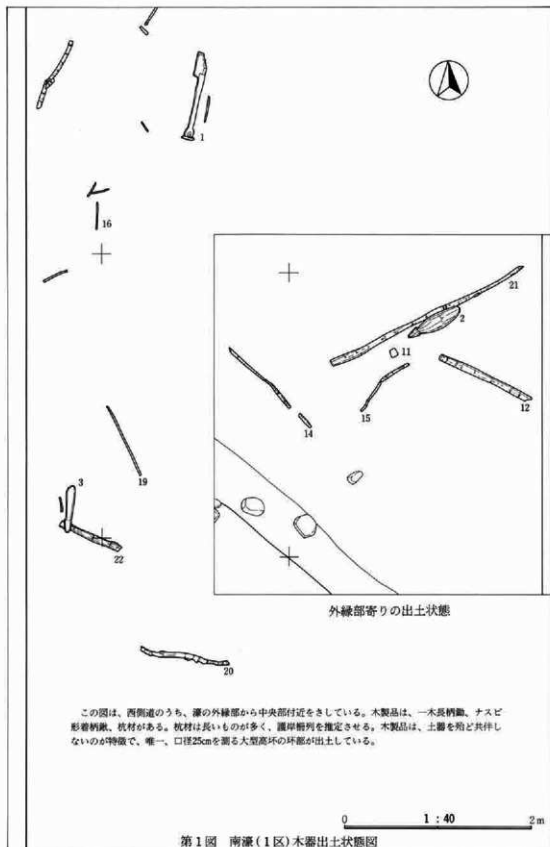
- 1 木製品は、農具、武具、生活用具、杭材の組成で、約100点があり、各濠の中でも最も少なく大型部材を含んでいない。
- 2 出土位置は、石垣縁辺部と外縁部寄りに集中する傾向があり、濠中央部付近を稀薄にしている。外縁部寄りには、杭が多いことから護岸柵列も考えられるが、主に館内部からの投棄、流入が分布背景にある。
- 3 南辺第1張出部周囲では、木の葉や土器等に混じって多量の削り屑が出土し、加工の場が近いことも推定されるが、加工対象の未製品や大型部材がなく断定できない。
- 4 共伴遺物には、高坏、坏、甕、甕の土師器、高坏、坏、甕の須恵器、勾玉、剣形、管玉等の滑石製模造品があり、土師器の高坏と坏が最も多い。これら遺物は、南辺第1張出部縁辺と列石周囲に集中するが、木製品の出土傾向とも重複し、西側道の稀薄さと好対称である。

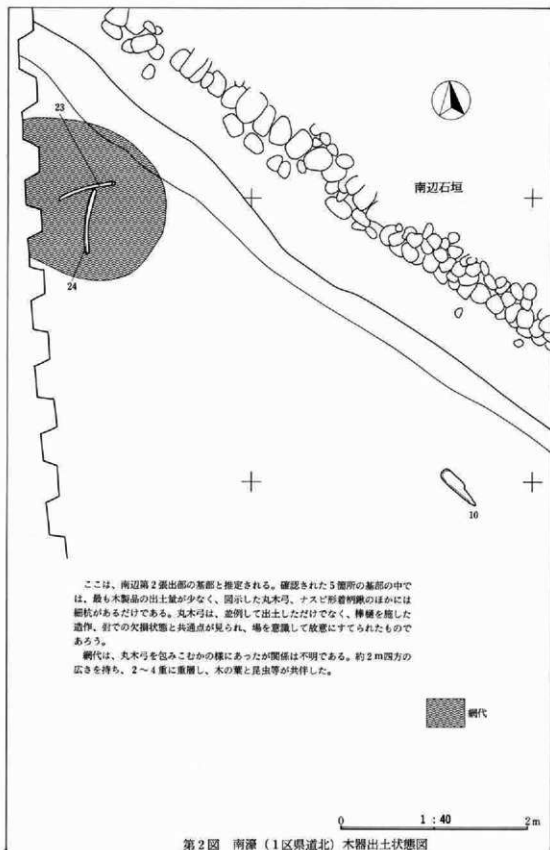
西側道は25点を報告する。内訳は、一木長柄鋤1、ナスビ形着柄鍬3、丸木弓4、木刀形1、横槌2、紡織具、角材、厚板、木片が各1、丸杭と枝杭が9である。

分布は、外縁部に寄って集中し、さらに広がりを持つと推定されるが南辺石垣際から濠中央にかけては極めて少ない。外縁部沿いには、鋤や鍬のほかに丸杭等の長いものが多く、外縁部上をめぐる3条の溝に伴う護岸柵列を推定させるが断定できない。石垣際では、No23、24の丸木弓が網代畳1枚程を伴って出土し、推定される張出部際での特異な遺物とすることができる。

東側道は29点を報告する。内訳は、一木長柄鋤、ナスビ形着柄鍬、又鍬、丸木弓、容器(盆)、横槌、棒状加工品、有頭クサビ形、角杭、うす板が各1、角材6、丸杭と枝杭11である。主体は、西側道と同じ杭材にあり、大型の部材がない。

分布は、第1張出部周辺に多く見られ、東への広がりが推定される。ここでは、手斧によるらしい削り屑が木の葉と共に多く出土し、溜り場か一時的な加工の場であったことが考えられる。また、長胴甕、甕、坏、高坏が共伴し、張出部の上面からは羽口複数と鉄滓約13kgが出土し、張出部が木製品を含めた遺物分布の中心にあり、西側道の製品を主とした遺物との対称を見せている。





ここは、南辺第2張出部の基部と推定される。確認された5箇所の基部の中では、最も木製品の出土量が少なく、図示した丸木弓、ナスビ形着剣のほかに細杭があるだけである。丸木弓は、並列して出土しただけでなく、棒槌を施した造作、釘での欠損状態と共通点が見られ、場を意図して故意にすてられたものであろう。

網代は、丸木弓を包みこむかのようにあったが関係は不明である。約2m四方の広さを持ち、2～4重に重層し、木の葉と昆虫等が共伴した。

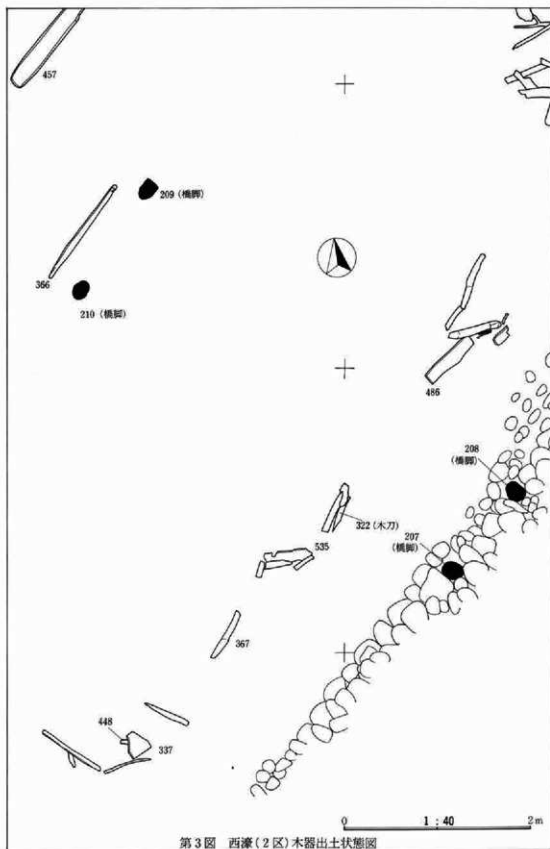
2 西濠（第3～7図、図版5～10）

西濠は、2基の張出部を含む、館の主要施設の背後に位置し、調査面積も多いためか、出土した木製品の数量、器種ともに多く、本遺跡出土木製品の基本的な組成を網羅している。また、第2張出部の南には、橋脚だけを残し、上部には木樋を架したと推定される橋梁施設があり、太杭の使用例の実際を見せている。

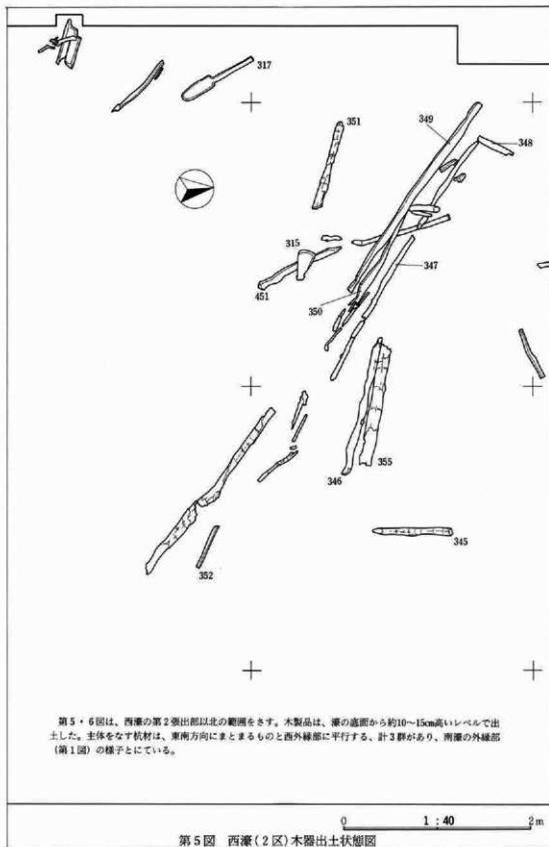
全体の出土状態は次の5点に要約される。

- 1 木製品は、杭材に圧倒的主体を持つが、農具、武具、生活用具、建築部材等の豊富な器種からなる組成を持ち、板材、角材を含めると加工材の比率は高い。特に、木樋、扉材、把手、橋脚厚板といった構造物を窺わせる大型部材が多く、館内部の施設との結びつきが示唆される。
- 2 分布上は、南濠の傾向を顕著にした石垣縁辺部沿いの集中する帯が見られ、中でも張出部の基部には密集する状態といえるものがあり、第2張出部南は場を設定して一括廃棄した可能性が高い。
- 3 出土レベルは、底面密着から20～30cm高い位置まで幅があり、木製品の廃棄、流入が石垣が崩落する以前に始まっていることからすると、分布背景には館内部の改築に対応するものがあろう。
- 4 共存遺物には、甕、坏、高坏、須恵器の土器類、滑石製模造品20点があり、これ自身いくつかの群を有する傾向を持ち、中でも第1張出部南石垣斜面からは高坏の一群、滑石製模造品が多く、場により器種と組成を異にする可能性が高い。
- 5 張出部は、いずれも木製品の出土量と器種が多く、特徴的な遺物を共存し、祭祀遺物を含む廃棄に当たって主要な場となった可能性が高い。しかし、木製品の共通点も、共存する遺物の違いからすると、内部施設との保わりだけでなく、張出部個々に独自の機能があったことを示している。また、木刀形や丸木弓が共通することは、祭祀の側面に限定すれば、祭祀具は複数の器種からなるセットがあり、木製品のもが主体であったことを示すものか。

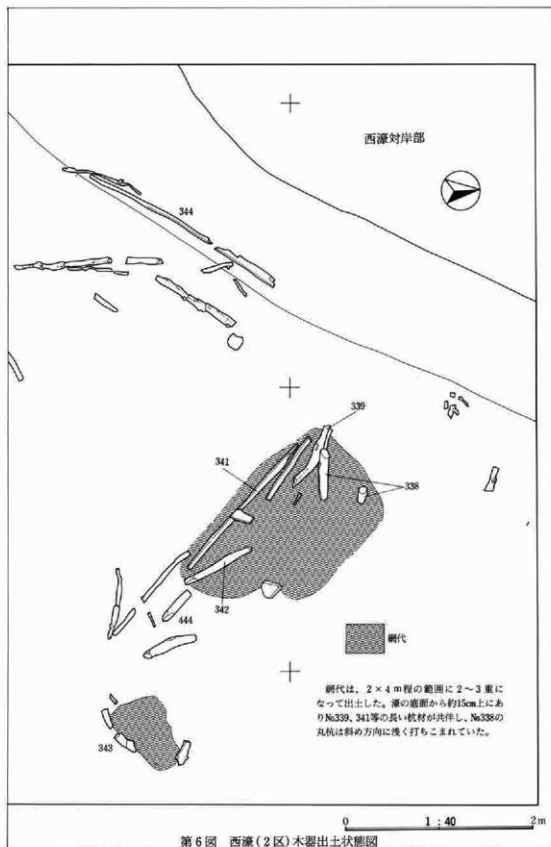
出土した木製品は、杭材を主体にして1330点を基本登録しているが、この中から344点を報告する。その内訳は、一木長柄鋤2、着柄鋤2、ナスビ形着柄鋸4、丸木弓6、平弓1、木刀形15、容器3、横樋8、紡織具2、刀子の柄1、把手3、建築部材9、角材69、板材40、有孔板材10、厚板11、角杭6、割杭19、太杭2、丸杭と枝杭51、有頭クサビ形15、クサビ形26、うす板2、棒状加工品3、木片3、樹皮加工品1、用途不明品15、橋梁に係わる樋状部材2、等々に分類される。全体の傾向では、他の濠と同様に枝杭、丸杭が圧倒的多数を占めるが、実用可能な農具、生活用具から木刀形や丸木弓といった祭祀具までの幅広い内容は、この遺跡での木製品の組成を示すものであり、橋脚や樋状部材等の大型部材が特徴的な存在となっている。また、第1張出部の前面では、石垣縁辺部より20～30cm高い位置で、同一方向にまとまる長い杭材の一群がある（第5図）。これは、南濠の外縁部の様相に似るが、網代を共存し、方向を同じくすること、一部の杭に打ちこまれた形跡があることからすると、外縁に対する護岸施設、あるいは北濠との接続部での止水様の施設の可能性がある。



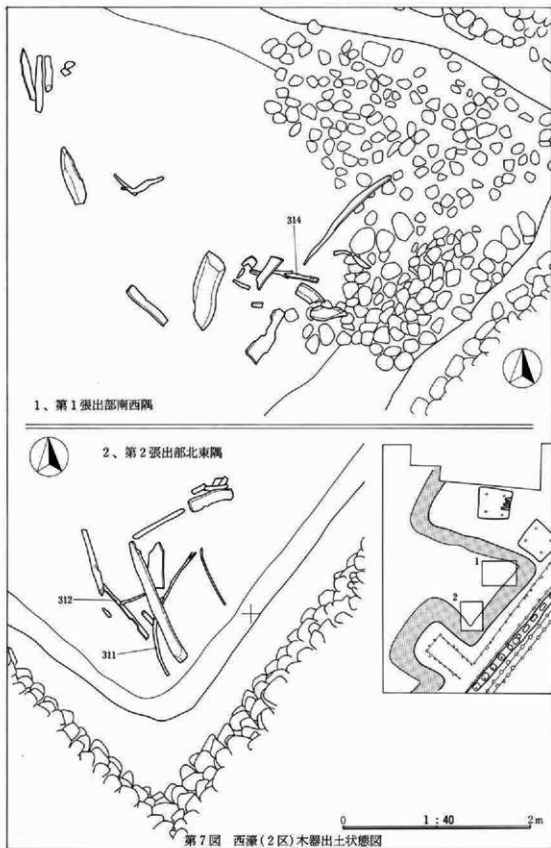
第3図 西壕(2区)木器出土状態図



第5図 西濠（2区）木器出土状態図



第6図 西濠(2区)木器出土状態図



3 北 濠 (第8図、図版11~14)

北濠は、前記、南濠、西濠が台地を掘削した人工の濠であるのに対して、調査の結果、現在の猿渡川の河床下に確認された、旧河道を導水路の役割として利用し、拡張を加えて作られた濠である点に前二者との相違と特徴を見出すことができる。外縁部は、北側に人工掘削で大きく湾曲し、東側道では第1張出部まで迫る中堤状のものが作られ、その南面には下部を井堰とする橋梁が設けられ、館北辺の主要出入口を持っている。

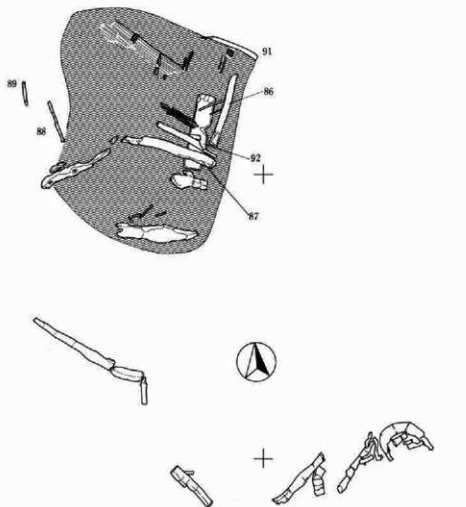
濠は、堤以西の湾曲部に貯水し、西濠以南へと配する水利上の調整機能を負っていたと考えられる。河道に面し、井堰が設けられたことは、土層堆積にも反映し、①、西濠、南濠に厚く堆積した二ツ岳FAが部分的にしか見られず、②、代って、二ツ岳FPが混入する土石流が河道に沿って東西方向に貫流し、橋梁を破壊し、濠の機能を停止させるに至っている。

全体の出土状態は、次の4点に要約される。

- 1 木製品は、杖杭に主体があり、農具、武器、生活用具、建築部材等が少数例で特定器種への集中はない。全体量は多いが、加工材の占める比率は低く、強いて角材、板材の分割した程度のものである。
- 2 分布は、全体に散在する傾向があり、井堰以西、湾曲部での杭材を主とする集中状態が復元される。
- 3 共存遺物には、第1張出部側と3号井戸側からの流入方向を持つ多量の土師器と須恵器がある。特に、西側道の張出部前面には、古い様相を持つ一群の土器があり、意図的に投棄された可能性が高い。また、牛、馬の獣骨、人骨、クルミ、モモ、ヒョウタン等の自然遺物が共存し、獣骨は西濠が鹿、猪であるのと対称的であり、モモ、クルミの量は特に多い。
- 4 西濠、南濠と比較すると、木刀形、丸木弓といった特徴的な器種が少なく、石垣縁辺部といった集中箇所も定かでない。木製品の特徴、共存する遺物のあり方からすると、生活残滓の含まれている可能性が高い。

西側道は、基本登録479点の中から62点を報告する。内訳は、ナスビ形着柄鉄3、木刀形2、丸木弓1、容器3、横樋2、紡織具、下駄、建築部材、有孔板材、厚板、角杭、割杭、太杭、割材、木片、棒状加工品、曲物、用途不明品が各1、角材11、板材5、丸杭と枝杭19で、生活用具に属するものが多い。遺構と結びつくものに、葦状編物(第8図)がある。これは、植物茎を束ねたもので厚さ約10cm、畳一枚程の大きさで遺存していた。周囲には、編み方向に直交、平行する丸杭(86、87)があり、91の有孔板材、92の厚板が上下にあった。用途は、86に残る紐圧痕や有孔板材の孔間隔と編み紐の間隔とが近似すること等から、周縁を丸杭等で縁取りし表面を板で葺いた壁状のものと推定される。

東側道は、271点の中から88点を報告し、55点は橋梁に関する太杭等の一群、33点は堤以西である。内訳は、又鋤、丸木弓、横樋、板材、角杭、樋、曲物、木片、うす板が各1で、角材3、丸杭と枝杭21、ほか太杭である。橋梁使用の太杭は、土石流で上半部を欠損しているが、丸と角の二形態があり、長さは3mを越すと推定され、No190、195等の部材は転用材の可能性があり、橋梁自身にも改築に相当するものがある。



この図は、北濠の西側中央部付近をさしている。堤状遺構の西側湾曲部に相当するもので、滯水と浚水が入り混じる所と推定される。葦状編物は、その境界付近から出土したもので、杭材、厚板、有孔板材の共存状態から遺構の可能性もある。

 葦状編物

0 1 : 40 2m

第8図 北濠（3区西）木器出土状態図

3 器種別の分布

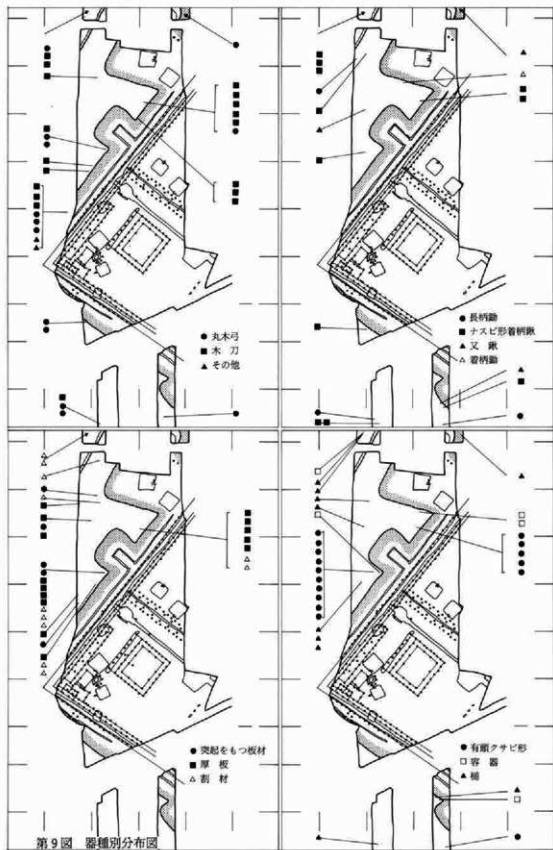
木製品は、これまで見てきた様に5分類32以上の器種が出土している(第2表)。その出土状態は、水利調整を兼ねた北濠を除いて、西濠や南濠では石垣の縁辺部や外縁部寄りに帯状に集中する様子が見られ、西濠が数量、器種とも卓越する中、木製品の分布は濠全体に及ぶものと推定される。

また、木製品の殆どは、館の外部から流入や投棄されたものでなく、内部で使用されたものが存続期間内でも比較的と早い時期から、隣接する濠内へ意図的なものを含めて投棄、流入したものであることがわかる。その反面で、出土数量の差異は、木製品の分布が濠毎に独特の背景を持つこと、隣接する館の内部の様子や構造物の一端を示しているといえる。

第9図は、上記の器種の中から、丸木弓、木刀形、鋤と鍬、生活用具等、13の特徴的な器種を選び出し、個別に分布図を作成し、器種毎の分布傾向、特定の遺構との結びつきがあるか否かを意図したものである。その結果は、次のことがあげられる。

- 1 特徴的な器種の分布は、出土数量を反映して西濠に集中するが、各濠に等しく出土し、濠を単位とする差はない。西濠では、館の南北に二分された構造に対応する、生産・生活用具、非日常的な祭祀具といった違いもなく、混然としている。その中でも、推定を含む4基の張出部の基部には、木製品の出土量は多く、木刀形や丸木弓の出土頻度が高いという共通点がある。
- 2 張出部は、西辺にある2基を例にすると、木刀形や丸木弓に数量差があるだけでなく、共伴する土師器、須恵器、滑石製模造品等の遺物との組成にも差があり、張出部毎の独特な機能を窺わせるものがある。第1張出部では、北濠側に館築造期頃の土器溜り、南側石垣面では高坏、滑石製模造品、獣骨、製銅に関係した羽口と埴塼といった特徴的な遺物が出土し、祭祀遺物と考えられる、木刀形8点がこれに符号するかの様に出土している。第2張出部では、土器の伴出例は殆どなく、滑石製模造品も直径7.5cmの鈕を表現した鏡1点があるだけで、丸木弓も同数近く出土し、共伴遺物の組成と量に対称的なちがいを見せている。

以上の様に、木製品を共伴遺物との組成という観点でみると、木製品の分布だけでは指摘し得ないちがいが、張出部毎に見られる。共伴する遺物を、滑石製模造品に代表される様に祭祀具とし、館内部の石数での出土例から高坏、須恵器もその例に加えると、張出部毎に祭祀具の組成が異なることが考えられる。第1張出部に於いては、木刀形には高坏、滑石製模造品、鹿、猪の獣骨が組み合わされ、第2張出部では木刀形、丸木弓、滑石製の具象性の高い鏡である可能性がある。同様に南辺の推定第2張出部では、丸木弓の中でも飾り弓があてられ、滑石製模造品が共伴すると考えられる。この組成は、祭祀の型が異なることも意味しようが、第1張出部の散在する出土傾向からすれば、単純な組成ではなく、複数のものが集積された結果ともいえ、直ちに断言はできない。しかし、張出部については、直接に祭祀に係わる場合、祭祀への供献具を廃棄する場の、いずれかに見ることができよう。その中にあって、土器量、並らびに生活残滓と思われる自然遺物の多い北濠は、主要出入口を控えた館の構造に由来するためか、西濠や南濠とは性格を異にするものであろう。



4 器種別の特徴

546点の木製品は、原木に近い状態、割材、製品の基準で、杭材系197点、板材系212点、加工材系137点に大別をした。本項では、加工材を主体にして用途、形態により農具、生活用具、武具、建築部材・杭材・板材、用途不明に分類をし、各細別を下記とした。細別に従い、各源毎に集約をしたのが第2表である。

- | | |
|--------|------------------------------|
| 1 農具 | 一木長柄鋤、着柄鋤、ナスビ形着柄鋤、又鋤 |
| 2 生活用具 | 容器、横槌、紡織具、棒状加工品、刀子の柄、下駄、曲物 |
| 3 武具 | 丸木弓、平弓、木刀形、鞆の底板 |
| 4 建築部材 | 扉材、把手、井戸枠 |
| 杭材 | 太杭、割杭、半截杭、角杭、丸杭、枝杭、橋脚 |
| 板材 | 厚板、割材、角材、板材、有孔板材、クサビ形、うす板、木片 |
| 5 用途不明 | 有頭クサビ形、加工材 |

以上、用途不明を含め32以上の器種を数えることができる。しかし、1器種1点の例も多く、用途不明の中で加工材としたものを加えると、この傾向はさらに強まる。全体量の中では杭材が圧倒的に多く、板材、角材等の分割材がこれに次ぐが、加工材への素材として生産されていたことも考えられる。以下、分類に従い、各器種の特徴をあげていく。

1 農具 (第14～16図、図版15～17)

農具は、一木長柄鋤4点、着柄鋤1点、ナスビ形着柄鋤11点、又鋤とその一部3点の計19点がある。遺存状態は、完存に近いものから小破片までと一様ではなく、鋤では着柄部に欠損例が多い。身の形状や先端部及び周縁に残された磨耗の様子からすると、全て実用で未製品を含まず、用途を達したものが濠内に廃棄されたと考えられる。農具としての組成でみると、耕起具に分類される鋤と鋤だけで、用途としての片寄りが感じられるとともに、出土箇所からして農具としての分類よりも、単に耕起具、あるいは土掘具とした方が適切かとも考えられる。

一木長柄鋤は、No 1、27、317の三例に把手の有無と鋤身の形状の点で、三様の特徴が示されている。上記の3点は、いずれも把手から鋤身の前縁にかけて、反りを持たず、直線的に削り出され、96cmを測る317を最長にして、凡そ90cm前後に平均的な長さが求められる。把手は、1、27が逆三角形の削り抜き穴を持つのに対して、317は載頭、平滑である。鋤身の形状は、1は先端が二股に分かれ、長さや幅とが近似する短身であるのに、27、317は舌状をなし、長さ：幅の比率でも2：1、3：1とやや細身である。肩部はいずれも厚みを残し、水平に張るものと「八」の字をなすものがあり、把手の有無と合すると317には、土を掘るよりも[※]ならず。といった用途があるか。刃先には、舌状形状の2点を除く、1にだけ鉄製の方形刃先が着装されたと推定される。

着柄鋤は、267の1例のみで、鋤身の幅が狭く、着柄部から刃先に向けて殆ど反りを持っていない。着柄部は身に対してやや傾き、鋤身にかけての正面側は細かな削りを連続させ平滑に仕上げている。全体は、小ぶりで着柄部の様子からすると鋤とも考えられる。

ナスピ形着柄鉞は、遺存状態の良好な6例からすると、全長、身の先端形状に差が認められるものの、共通項の多い全体形状からは型式的に安定した一群とすることができる。

形状は、着柄部と身部の境に削り出しによる三角状の突起を持ち、刃縁は楕形の315を除き、いずれも長い舌状を呈する。裏面にはやや丸みを残すが、正面側は着柄部から身部中央部付近まで平滑に削り出し、殆ど反りを持っていない。現存長は、42~57cmと幅があり、50cm前後に復元値が求められる。身幅は、最大で9~13cmあり、最大幅が先端にある315と、その他で分類も可能であるが、むしろ、刃縁の断面形状に見られる① 両刃乃至片刃、② 端部が截断状の二分類の方が妥当であろう。鉄製刃先は装着されたが、この先端形状との係わりが強く、明瞭な痕跡も認められなかったが、断面が①のものには一様に「スレ」があり、その状態からすると「U」字形のものであろう。尚、館築造前段階の黒色砂質土中からは、和泉期後半の土器群とともに「方形の鋤刃先」が出土しており、本遺跡では、農具への鉄器の装着は、一段階古くから始まっている。

又鉞は、№33に全体形状を窺せるものがあるが、141、265は歯の一部である。この3点は、歯の形状や挟りの深さで型式を異にする。33は、やや不明瞭な肩部を持つ、不整形の身部と、身とほぼ同長の二体歯を持ち、全体に縦長の復元形状が得られる。これに対して、残る2点は身の先端形状が「U」字状の挟りこみを持ち、歯も二本、幅広ろである。

木取りは、全体では板目に主体があるものの柾目も併用され、一様ではない。樹種は、カンバ10点、クスギ5点で大勢が占められ、同じ広葉樹のカシ、クリ、ケヤキ、ヤブデマリと続き、唯一、317に針葉樹のモミが例外的に用いられている。

第3表 農具集計

単位 cm

番号	出土位置	器種	樹種	木取り	遺存(長・幅・厚)	特徴・備考
1	南 濠	一木長柄鉞	カンバ	板目	92.1×4.3×3.4	身の半分を欠損、身の先端二股
27	〃	〃	クスギ	柾目	95.5×4.2, 15.5×1.5	略完、身の長さ36cm、先端舌状、両刃
317	西 濠	〃	モミ	板目	85.6×14.0×0.8	完存、柄の長さ45cm、把手ない
398	〃	〃	カンバ	〃	21.6×8.6×2.0	身の一部のみ、先端二股
2	南 濠	ナスピ形着柄鉞	カンバ	板目	56.3×12.5×1.8	略完、着柄部上端を欠損、刃縁舌状両刃
3	〃	〃	〃	柾目	49.1×9.0×2.5	略完、刃縁舌状、断面截断状
10	〃	〃	〃	板目	44.5×10.5×1.7	略完、刃縁舌状、両刃
28	〃	〃	〃	〃	41.8×12.2×1.9	略完、刃縁U字、両刃
60	北 濠	〃	カンバ属	柾目	6.7×6.0×1.7	着柄部の一部のみ
104	〃	〃	〃	板目	12.3×3.8×1.5	身の一部
113	〃	〃	カンバ	〃	45.4×10.7×1.5	着柄部と刃縁を欠損
213	西 濠	〃	クスギ	〃	24.0×8.8×1.9	略完、刃縁舌状、断面截断状
214	〃	〃	ヤブデマリ	〃	10.5×4.8×2.1	着柄部の一部
315	〃	〃	カンバ	柾目	33.2×13.0×1.7	基部と刃先を欠損
504	〃	〃	〃	板目	21.0×4.5×1.0	身の右側縁のみ
33	南 濠	又	限	クスギ	23.0×15.1×2.7	着柄部と歯の一本を欠損、歯の長さ9.5cm
141	北 濠	〃	ケヤキ	〃	19.4×10.2×3.1	身の半分のみ、先端二股
265	西 濠	〃	カシ	板目	8.3×7.3×1.5	歯の一部か
267	西 濠	着柄鉞	カンバ	柾目	30.0×9.0×1.0	着柄軸長8cm、軸幅4cm、身幅9cm

2 生活用具 (第16~19図、図版18~20)

生活用具には、紡織具・棒状加工品8点、横槌12点、容器6点、刀子の柄1点、下駄1点の計28点がある。全体の組成では、日常雑器に相当するものがなく、生活感にやや乏しい。出土状態の点でも各地区に分散する傾向があり、必ずしも館の構造と対応するものではない。

紡織具は、№7、78、414が中筒に相当し、棒状加工品とした№11、57、226、227等が、その破損品といえる。遺存状態が良好な2例をもとに下記の分類をした。

1 有芯材を丸棒状に削り出し、両端部に浅い刻みが全周する。 №7、11、57

2 割材を使用、断面紡錘状で、両端部に「V」字の刻みが入る。 №78、414

遺存例からすると、全長は34~39cm、両端の刻みの間は、完存の414で30cm、盆の破損品から転用した78で28cmを測り、織布の幅としては30cm前後を示すものであろうか。

№314、367の2例は、用途不明ながら、この項に分類しておく。314は、有芯材の角材を使用し、中央に約2cm角の柄孔、両端に径0.8cmの円孔2個があげられている。断面は、緩い「く」の字を呈し、柄孔と円孔は直交方向にあげられている。柄孔は、別の軸に嵌めこむためのものか、一方が広がっており、円孔は芯々で約2cmを測り、ともに丁寧な仕上げられている。形状からすれば、柄孔で縫いで使用する組み合わせ部材であろうが、用途不明である。367は、厚さ6mmに面取りされた板目材を使用し、両端に1cm強の突起と、その基部に紐孔2個があげられている。孔の周囲には、突起部分の肩にかかる、半円・帯状の擦痕が見られ、両端の突起の様子からすると、一方からの強い引きを伴う箱状のものに復元される。

以上の樹種は、モミ、ケヤキ、モミジ、サワラが混用され、特定の樹種への集中が見られず、直幹か太材であるかを選材の基準としている。

横槌は、比較的、遺存状態が良好なものが多く、使用による敲打痕も残す例が多い。握りの先端部と槌身の形状とで下記の5分類をした。堅柱に相当する資料はない。

1 有芯材を使用、握り部と槌身との境に明瞭な段を持つ №506

2 # 、握り部の先端にグリップを持つ №5、54、119

3 割材を使用、握り部の先端にグリップを持つが全体に細身 №58、386

4 有芯材と割材を混用、握り部先端にグリップのない、棍棒状 №525、530

5 有芯材か、4の太身のもの №71、508

現存長は31~39cmを測り、握り部長は8cm前後と一定し、槌身の長さや直径に差があり、機能差を示している。槌身に残る敲打痕は、先端から内側10cm付近に約5cmの帯状に見られ、表裏二方向から始まり、側面、そして全周するという順序が5、119、506の資料から判断される。槌身の先端は、丸みを持つもの、平滑なもの、その中間の三形態があるが、機能を示す様な使用痕はなく、槌身としては重量が基準となろう。樹種は、カシ3、ケヤキ2、コナラ、ツバキ、ケンボナシ、ヤブデマリ、ヤマボウシ、クリ各1と広葉樹の硬材が多い。

容器は6点ある。長円形を基調とした長さ40cmを越す大型品と20cm前後の小型品とがあり、脚の有無、周縁端部の形状に各々の特徴を示している。加工は、34を除き、分割材の芯側からの削り物で、内面は平滑に仕上げる一方で、外面は削り痕を残している。周縁端部は、270の幅広把手、331の角状

突起物を持つ、34の二条の太い刻線を持つ例もあるが、概して作りは粗略である。脚は、65がボタン状のもので器の水平を保つ程度なのに対して、34「X」状の削り出で高さを意識させる。用途は、器の大きさと内面の削り抜きの深さが決定するが、盆、鉢、浅鉢が相当する。樹種は、クリ3、トチノキ、ケヤキ、シダ類が各1と広葉樹が用いられている。

3 武具(第22~26図、図版22~32)

武具は、丸木弓13、平弓1、木刀形19、鞆の底板1の計34点がある。これら4器種は、丸木弓の例からすれば実用可能なものも含んでいようが、祭祀具の性格が強い木刀形と同列に評価し、むしろ、弓と刀といった祭祀具のセットの意味を持たせて、武具に分類をする。

丸木弓は13点ある(第4表)。遺存状態は、完存する例はなく、唯一、弦の一部を欠損するだけの120を除き、いずれも両端部、もしくは射付近から折損している。折損面は、やや丸く截断状になるのが5例、一方からの力でへし折れた。様な状態にあるのが6例と同数に近いが、後者の一群は祭祀具にありがちな故意の破損の可能性がある。23、24は、弓幹も2cmを越して太く、棒槌を持つ例外的な存在で、形状からすれば実用も十分に可能であるが、棒槌のある弓腹側が斜め方向にへし折れており、故意の破損の典型例ともいえる。262は、刀子で切りこんだ後に故意に折損している。

樹種は、イヌガヤ8、カヤ、メギ、エノキ、ムラサキシキブ各1点と分れるが、用材としては伝統的ともいえるイヌガヤに主体がある。用材は、直径が2cmを越す太いものと1cm前後の細身のものとが混用されている。

弓幹の形状は、太さと調整上の削りの特徴で下記の3分類をした。

- 1 主に直幹を素材に使用、全体に刀子状のもので細い削りを施す例が多く、断面を円形、楕円形に仕上げている。
- 2 主に直幹を使用、樹芯を残し半身側から削りこみ、断面を半円形、楕円形に仕上げている。射付近は丸く削り出す。
- 3 太枝を使用か、半身側全体、弦の部分まで削りを施して成形し、断面を楕円形、半円形に仕上げている。

以上の中で、1類には、棒槌等の二次的な加工を施した精巧なものが見られる。24を例にとると、弓幹全体に及ぶ、幅約1cm、深さ5mmの棒槌が弦のつけ根まで明瞭な段をもって彫りこまれている。さらに装飾として、全面に黒漆を厚く塗った上に、棒と思われる細皮を射を含めた3箇所巻きつけている。棒槌を持つのは、23と合せて2例しかないが、概して大振りのもので、所謂「飾り弓」に相当するものであろう。

弓の長さは、上記の3に分類され、弦の一部を欠損するだけの120で74cm、1に分類される326で83cm、3の325は一方の弦を欠損するだけで83cmと、弓幹の分類と対応する様な長短関係はなく、凡そ、80~120cm前後に復元され、短弓に属す。

弦の形状は、第10図に代表例をあげ、7つに分類をした。本弦と末弦との識別は、殆どが破損例のためにむづかしいが、56、120の2例からすれば、両方で形状を異にしていると考えられる。従って、下記の7分類は、本弦と末弦とが混同し、重複していることもある。

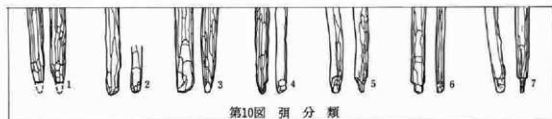
弓の分類 (第10図)

- | | | |
|---|----------------------------------|-----------|
| 1 | 弓幹全体に及ぶ削りの上に、先端部のみ更に全周して山形に削り出す | No.329 |
| 2 | 〃、片側一面だけ、段を持った平坦面に削る | No.6 |
| 3 | 〃、表裏二面を舌状に削り、段を持たない | No.328 |
| 4 | 弓幹の両側面から、短く半円状に削り、端部を調整、肩部はやや不明瞭 | No.56 |
| 5 | 〃、半円状に削り、段を持たない | No.262 |
| 6 | 〃、短く「ハ」の字状に削り、明瞭な肩部を表現する | No.35 |
| 7 | 弓幹の両側面から削りこみ、面取り調整された、明瞭な肩部を持つ | No.23, 24 |

以上、7分類のうち、肩部の有無により1～3までが末刃に、4～7が本弓に相当するものか。

平弓は、ムサラキシキブの割材を使用した327が1点だけある。太杭を半截し、断面がレンズ状になるまで削りこみ、全体に均整感のあるものに仕上げている。弦は、明瞭な肩部が表現されているが、弦かけ部分は突起物程度の長さであろう。弓幹全体には、斑点模様に残る痕跡から赤乃至黒に彩色されていた可能性がある。丸木弓とは厳密に区別されるものではなく、弓幹の扁平な状態からすれば丸木弓の120、325に類似している。

以上の弓には、弓幹の表面を飾った例として24があげられるが、23、330等にも赤乃至黒の漆を塗布したと思われる痕跡があり、白木の状態のものの方が少ないと考えられる。



第10図 弓分類

第4表 丸木弓・平弓集計

単位cm

番号	出土位置	樹種	弓幹形状	弓形状	運存量(長×径)	特徴・備考	
6	南 瀬	メ	ギ	1	2	60.3×2.2×2.1	引付近で折損
8	〃	イヌ	ガヤ	2	—	44.0×2.0×1.5	両端部を欠損し、弓幹中央のみ残存
23	〃	〃	〃	1	7	60.0×2.5×2.1	棒槌を持つ、黒漆を塗布か
24	〃	〃	〃	1	7	53.6×2.6×2.4	〃、全体に黒漆を塗布、引に橡皮巻き
35	〃	〃	〃	2	5	54.8×φ2.0	
56	北 瀬	〃	〃	3	4	38.1、11.6φ2.0	
120	〃	〃	〃	3	6	23.8×1.6×1.1	略欠存
262	西 瀬	〃	〃	3	6	18.6×2.1×1.3	刀子で4方向からきざみを入れ、故意に切る
325	〃	カ	ヤ	3	6	83.2×1.1×1.9	略欠存、一方の引付近のみ欠損
326	〃	イヌ	ガヤ	1	—	83.0×2.8×2.4	両端部を欠損し、弓幹中央のみ残存
327	〃	ムラサキシキブ	割弓	7	7	39.7×2.0×0.9	唯一の割弓、赤色塗彩か
328	〃	チドリノキ	〃	1	3	29.8×2.3×2.4	
329	〃	エノ	キ	1	1	45.9×2.8×2.3	
330	〃	ムラサキシキブ	〃	1	—	36.7×2.3×1.8	両端部を欠損し、弓幹中央のみ残存

木刀形は19点がある。遺存状態は、破損した例が多く、完存か全長が計測可能なものは3例だけで、全形はつかみにくいが柄部と刀身部に表現された形状により分類をし、第11図に示した。

素材は、全て割材を使用し、基本的には分割時の形状を活かしながら、部分的に削りを施すことで表現上の強調された効果を出している。木取りは、板目12、柾目7で、後者に厚いものが多い。樹種は、未鑑定のNo311～313を除き、12点が針葉樹のモミで占められ、カヤ、ヒノキ、カンバ、クリが各1と針葉樹が主体である。モミが多用されるのは、本遺跡の傾向（537点中88点）でもあり、88点中に板材と角材が55点あることから、豊富かつ適性な素材として利用したものともいえるが、丸木弓に見るイヌガヤの様に特定器種に対する適性樹種、あるいは卓越種ともいえ、木刀形に対する規制をも示すものであろうか。

形状は、刀身部から柄部まで一木、鞘の表現はない。全体は、削りで直線的に成形されるが、刀身部は柄部と削りの方向や単位を異にする例が多い。刀身部の断面形状は、長方形と楕円形の二形態があるが、鑄は削りで意識させている。柄部は、柄頭と関の表現有無に特徴があり、下記6分類をした。

柄部の分類（第11図）

- A 柄頭と関は切りこみにより表現、柄頭は斜め方向に削り下す。
 B // // 、柄頭はやや丸みを持って削る。
 C // // 、柄部は細身で端部は丸い。
 D // // 、柄頭は内側にむかって丸く削る。
 E 柄部全体が「ハ」の字状に細く削り出され、関の表現がない、端部はやや丸い。
 F 柄部全体が刀身部より細く削り出され、関の表現がない、端部は截断状。

一方、刃先の表現は6分類をした（第11図）。

- 1 刃先は、棟と同様に直線的、斜めに削り出される。
 2 刃先は、表裏とも幅広に削られ、切先は丸みを持つ。
 3 刃先は、全体に丸い。
 4 刃先は、切先にむかって細身となり、刃側に丸みを持つ。
 5 刃先を「ハ」の字状に削り出し、剣形に作る、断面は楕円形で厚い。
 6 // // // 、断面は扁平。

この分類相互の関係は、完存例が少ないことから不明で身の大小とも対応するあり方ではない。また、刃先は分割面を利用したものもあり、分類上、素材と加工の点で再検討の余地を残し、集約される可能性を持つが、柄部は明らかに形態差を意識した表現をとっている。

長さは、現存最長例がNo324が88.4cm、完存の312が72.4cmを計測し、その他の遺存状態からすると100cmと70cmの各前後に二分される。この長さに見る2つの数値は、上記分類との関係で、関表現の有無による二大別、削り加工の精粗とも対応しないことからすると、模倣上、形状を似せる以上に優先された規則性と考えられる。

この木刀形は、丸木弓とともに祭祀具としての用途をもとに製作されているが、樹種や長さの点で規制の存在を窺うことができ、柄部に示される鹿角装大刀を思わせる特徴、刀身に見る内反り気味な表現等からは、模倣に対する意図を汲み取ることができる。



第11図 木刀形の柄部と縫の分類

第29図のNo273は、靱の底板としたものである。用途は、栃木県大平町七廻鏡塚古墳出土の報告例と比較して決定した。

遺存状態は、両木口面を残した状態で2片に割れているが、中央部は欠損している。表面、木端、木口の3面には、厚く塗布された黒漆が残り、端部には三点を「ハ」の字状に紐どめしたあとが残り、固着した漆が見られる。

現存部は、長さ8.7cmと6.8cmで、幅5cm、厚さ1.5cmを測り、復元長は紐孔の位置からすると20cm前後のものであろう。

木取りは、板目（樹種未鑑定）で木表側に漆を塗布している。紐は、2本あり、内面から「ハ」の字状にかがられ、漆で固定されている。紐孔は、直径1mm強であり太いものではない。

● 大和久實平 「七廻り鏡塚古墳」 帝國地方行政学会 1974

靱の板は大小2枚がある。2枚とも、長さ15cm、幅5cmを越す長方形で、四隅と縦横に2対と4対の小孔があく。このうち、8孔をめぐる紐を張った様に黒色の滲痕が残る。この形状、法量の特徴と、漆を使用した外装並らびに紐止め方法は、本遺跡のものに近似する。

第5表 木刀形集計

単位 cm

番号	出土位置	樹種	板目	柄の分類	縫の分類	現存法量(長・幅・厚)			特 徴・備 考
4	南 澤	カンバ	板目	—	5	32.3	2.6	1.6	
61	北 澤	モミ	〃	D	—	69.6	4.5	2.3	
100	〃	〃	〃	E	—	50.6	3.6	1.7	
222	西 澤	〃	板目	F	—	22.0	2.9	1.0	No222~313まで第1・第2張出土部の基部から出土
223	〃	〃	〃	F	—	38.3	2.5	0.7	2片に分かれ、全長は合計したものの
224	〃	〃	〃	F	—	28.1	2.7	1.4	
225	〃	〃	〃	—	4	82.0	3.1	1.5	
257	〃	〃	板目	—	2	18.2	3.3	1.2	
311	〃	不 明	板目	A	1	64.6	3.0	0.8	略完存
312	〃	〃	板目	B	1	72.4	3.2	1.0	完 存
313	〃	〃	〃	—	3	24.6	3.3	0.5	
318	〃	モミ	〃	D	2	64.6	3.4	1.4	略完存
319	〃	〃	〃	C	—	64.4	2.6	0.8	
320	〃	ヒノキ	〃	—	6	45.4	2.5	0.5	先端「ハ」の字、唯一の刺形
321	〃	モミ	板目	—	5	36.5	2.5	1.5	断面楕円形を呈し、木刀形
322	〃	〃	板目	F	—	43.3	2.5	1.2	
323	〃	ク リ	板目	F	—	55.5	3.5	2.3	
324	〃	モミ	板目	E	—	88.4	5.9	1.3	
429	〃	カヤ	〃	F	—	50.2	3.7	1.3	

4 建築部材、厚板、板材、有孔板材、角材、杭材(第30~73図、図版33、35~52、55~88)

ここでは、厚板を基本とし、同じ割材である板材、有孔板材、角材までの一群と、太杭を始めとする原木の状態に近い各様の杭材を一括して扱う。

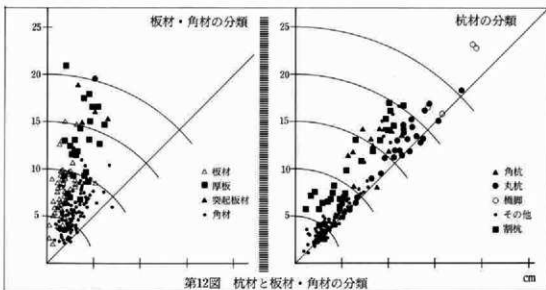
建築部材は、用途が明らかなものにNo455の扉材、519の前記扉材につくと推定される把手、195の蹴離し材、205の井戸枠がある。これらの中で2号井戸の枠を除き、いずれも使用箇所を離れて濠内に投棄か流入したもので、北濠出土の蹴離し材に至っては構築材の一部とし転用されている。扉材と把手は、良質のケヤキを用い、加工状態、厚さ等の法量の点で類似し、ともに西濠から出土し、西辺近くの建物等で使用された可能性がある。扉材は、把手がつく半身程を欠損するが現存幅で19.5cm、高さ156cmを測り、厚さ5cmで平滑に成形されている。上下に回転軸を持つことから、重量感に富む開き戸に復元される(第31、42、73~75図)。

厚板は、直径30~60cm前後の丸木を2~4分割し、厚さ3~5cmに削り成形したものをさすが、No483、485を好例とする木口側に切りこみを持つもの、木口を面取りした507などに分類が可能で、帯状の紐状圧痕や面的なつぶれ痕を持つ例が多く、柵列等での使用が考えられる(第32~35図)。

板材と角材は、木取りの点で幅か厚さを基本にして、出土数量から多様かつ多量に生産されたことがわかる。第12図によると、板材は幅10cm前後、角材は厚さ3cm前後に法量上の中心があり、厚板等の大形部材の残材の有効利用もあろうが、規格的な生産もあり得る。用途は、加工材の素材、紐圧痕、つぶれ、削り出しの段やきざみを持つ等の特徴から建築部材の補助材があてられる。

有孔板材は、ほぼ等間隔に、多段、複数の紐孔を持つうす板をさし、12点が出土している。遺存状態が良好なNo268では、幅8.9cmの中に1列4個、10段分の小孔があき、中に2本のフジツルが残り、裏面では、2本摺り合せの紐となり、一方に強く引かれていたのが観察される。用途は、北濠での蓑状編物との共存例、紐孔間隔の近似から、この種の表面を被覆、保護することが考えられる(第30図)。

杭材は、木製品の中でも最も点数が多く、形状、長さ、用途などの点で内容に富み、各々に分類も可能である。第12図は、杭を直径で示したものが5、10、15cm前後に集中域が見られ、各々に対比さ



せて枝杭、丸杭、太杭の名を用いた。太杭は、北濠や西濠の橋梁遺構の橋脚が主で、丸と角の二形態があり、橋脚とすれば長さ3m以上と推定される。また、館内部の棚列や掘立柱建物跡の15cm前後の柱痕径とも近似すること、橋脚としての使用例からすると、用途は構造物の柱材が考えられる。

丸杭は、太さ、長さともに太杭と枝杭の中間形態としてあるが、杭としての用途だけでなく、横木として架す簡単な構造材、あるいは鋤の柄といった組合せ材といったことも考えられる。この点は細杭も同様で、簡単な削りだけで生産できるとはいえ、多量さの背景にはより幅広い用途があらう。

No211、212(第72図)は、橋桁、木樋として水道橋に推定されるが、ともに木口寄りに方形の納穴を持ち、棟木の転用の可能性もある。

全体の樹種は18種に及び、広葉樹が優位にあり、クリ88、モミ62、ケヤキ34、カシ27、クスギ19が上位種である。器種では、板材、角材にはモミ等の針葉樹が多く、有孔板材は全てが占められている。しかし、特定樹種との明確な対応関係はなく、分割の有利さが反映したものであろうし、細杭に見る多様さは有効部分を取り除いた各種の枝までを有効に利用した結果であらう。

5 用途不明品(第20、21、27~29、48~51図、図版21、33、34、53)

ここでは、明瞭な加工形状を持ちながら文字通り用途不明のもの一括と、クサビ形、有頭クサビ形等を合せて扱う。

クサビ形は、木口面の一方が斜め方向に削られ、圧痕やつぶれ痕を持つものをさす。大きさは、長さ10cm前後、幅10~15cm、厚さ3~5cmが一般的で、長さ30cm近いもの、幅20cmを越す大型のものもある。圧痕は、打撃と押圧の二者があり、単に角材や板材を切断する時に出る木端材と区別した理由も、ここにある。用途は、この圧痕、形状と法量上の特徴がまとまりを持つ一群をなすことの2点から梗と考える(第48~51図)。

有頭クサビ形は、No391の完存品1点を含む大小16点がある。形状は、半円か円を基調とした頭部と角柱状の軸部とからなり、軸部の中位には1×2cm程の納孔がついている。大きさは、完存のNo391を例にすると全長25~30cm、頭部幅6~9cm、軸幅3~5cmを測り、厚さは軸で1cm前後と一定しているが、頭部は1cm前後と明瞭な段を持って境をなし3cm前後のものがある。用途は、軸部と頭部の木口側下端面に圧痕が見られるところから、縦か横のいずれからか、門状に差しこみ、納孔への埋木で固定することが考えられ、前記のクサビ形を単に埋木程度とすると、納穴で組んだ構造物に対する、より規格化されたものといえる。樹種は、クリ8、ケヤキ4、エゾエノキ、カシワ、カンバ、ケンボナシ各1と広葉樹が主体で、柾目14に対して板目2である(第27、28図)。

次いで、明瞭な形を持ちながら、用途不明なものに第20図の4点がある。形状は、遺存状態が良好なNo240を例にとると、全体を細かな削りで均整感のある「U」字形にし、一定の厚さにしているが両端がわずかに薄くなる。断面は、稜を面取りした長方形で丸さを強調している。大きさは、完存に近い240で22.7cm、335で20.9cmを測り、22~25cm前後と推定される。No335は、残る3点とは形状をやや異にし、全体に薄く仕上げられ、左右非対称、中央寄りに幅2cmの貫通孔が裏面にあき、軸木に対して挿しこみ式の使用方法が考えられる。厚さを異にし、左右非対称のあり方から、一方を頭部、残るを尾部にたとえて鳥形とも考えるが、可能性の指摘だけとしておく。240以下の3点は、形状、法量、加

工状態、端部形状に共通点が見られ、前記335とは用途を異にし、扉材につく把手としたNo419に類例が求められる。419が軸の部分挿しこむ方式なのに対して、両端2点どめの把手に復元される。3点ともに、西辺にある2基の張出部の間にある湾入部分からの出土である。樹種は、クリ3、ケヤキ1と硬質の広葉樹が用いられている。

このほか第21図、29図に集成をしたが、形状は、角材状のもの、板状のもの等多様で、前者は穿孔の様子やらせん状の紐痕から組み合わせの使用状態が、後者はNo261、266に動、兼の可能性のある様に単独で使用される道具であろう。

棒状の中では、No333が木刀形の一つと考えられる。カヤの分割材を角柱状に削り出し、現存する中程の稜線に、半ば対称的に9箇所明瞭な刻みを施している。端部は、緩かにカーブをし、柄を表現か。No334は、平城宮跡等で「たたき棒」として報告例があるもので、端部の一部を欠損するだけで完存に近い状態である。穿孔、紐痕の明瞭なものとしては、No77、227がある。77は、有孔板材よりは厚い角材に、3～5cmと不定間隔ながら斜め方向に穿孔されている様子が窺える。227は、らせん状に紐圧痕が残る。第41図の230は、クスギの角材の両側面に2乃至3を基本単位とする刻みがつけられ、腐編みの横木にもたとえられる。

板状の中では、完存に近いNo300の樹皮加工品がある。表面を粗く滑り出し、周縁に等間隔で9個の紐孔を持っている。No269は、半分程を欠損しているがモミの板を十字形に削り出し、不整列に大小の孔があげられている。No332は、スギの板目材の両端に丸棒状の軸を付けたものである。右下隅には、サクラの皮を巻いた埋木と小孔がある（第29図）。

第42図、43図の中には、切りこみを持つ角材を集成した。No396は、完存品で上端木口面は丸く削られ、下端は約55度の角度で接地する様に斜め方向に面取りされている。裏面に2cm程の段差を持つことから、軸木に挿しこんで何んらかの台か脚にしたものか。

No421、526は、一方の端部を出納状に、No67、306はL形に削り出し、No75は両端部に見られる。これらは、法量からして小型の組み合わせ道具の一部か、建築部材の中でも補助材に相当するものであろう。

第72図のNo206は、2号井戸の中から東側の枠に立てかけて出土した、把手を持つ板、蓋と推定するものであるが、ケヤキの柾目材からの一木削り出しである。下端木口面は平滑に削られているが、左端部にL形の紐かけ様の突起を持っている。上端は欠損し、把手のある表面に残る弧状のスレ帯からすると、複数枚数で使用されることも考えられるが、転用材の可能性もある。出土状態からして、井戸の蓋とも考えられるが、弧状のスレ帯の復元径は約72cmで、井戸の復元径を約1m下回る。

補註 本報告のうち、加工材を中心とした180点については、柳元興寺文化財研究所でPEG（ポリエチレン・グリコール）の含浸処理が完了している。残る2,000点余りについては、現在当事業団保存処理室でPEG含浸処理が進行中である。この作業過程で、未報告の中にも少量ではあるが製品のあることがわかった。農具に分類をしたナスビ形着柄部断片2点、生活用具に分類をした下駄の前歯断片1点、武器に分類をした木刀形に関連する、鞘装具と思われるものが1点、主なものである。後日、詳報を願いたい。

5 木取りと加工

1 選材

木製品は、鑑定の結果、537点について61種の樹種が判明した（第6表）。さらに、樹種と器種との対応関係を見たのが第6表の補註に示した、1 深別の樹種分布、2 杭材、板材、加工材の系統別の樹種分布、3 多出する上位6樹種の器種分類である。

この傾向は、第1表に示した様に鑑定対象547点以外にも、千点近い細杭等があるところから、加工材を中心としたものといえるが、高崎市新保遺跡、日高遺跡、渋川市中村遺跡の類例と比較すると、前橋台地での弥生時代後期から古墳時代後期にかけての傾向とも、凡そで一致している。

全体では、いずれの器種でも、多出する上位の樹種に集中する傾向が見られたが、次の特徴がある。

1 選材については、伝統的ともいえる適応する樹種と、針葉樹、広葉樹の使い分けがある。鋤や獣の農具類では、広葉樹のカンパ属が好んで使われ、丸木弓のイヌガヤ、有孔板材のモミなどは独占種ともいえる。針葉樹は、年輪を利用して分割することが容易なためか、角材、板材の占める率が高い。

2 加工材は、針葉樹、広葉樹ともに良質で太い材が用いられているが、太杭を除く杭材は、量が要求されたためか、雑多ともいえる樹種、木端材だけでなく細枝までが用いられている。幹の良質部分は加工材に、木端部分や枝は杭材までと、有効な限り使用している。

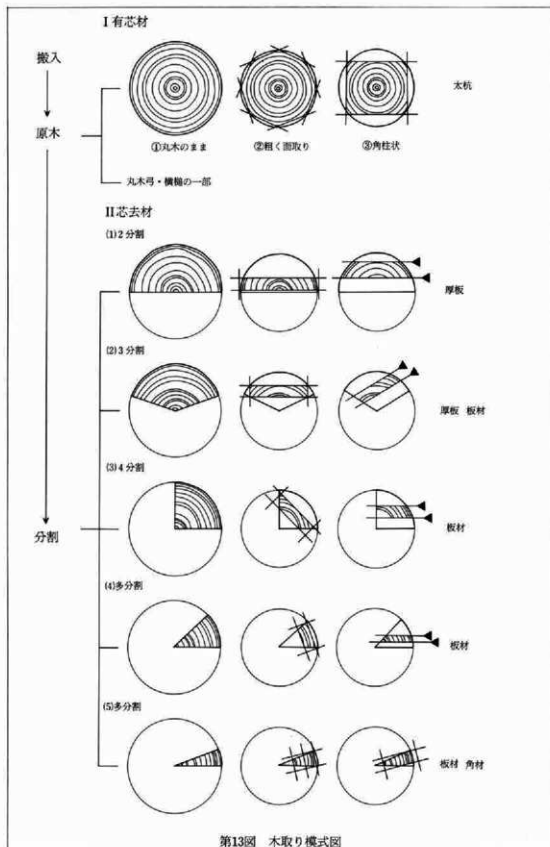
2 木取り

木取りは、第13図に模式図で示したが、原材には有芯材と芯去材の二つがあり、容器の一部を例とする横木取りを除いて、殆どが所謂「みかん割り」の方法での縦木取りされている。

有芯材は、杭材の多くと丸木弓や横槌に用途が限定され、樹皮を残す例が多いが、表皮での加工の状態は、① 丸木のまま、② 縦方向に全周して粗く面取り、③ 角柱状にするの三形態がある。

芯去材は、2～4分割を基本にし、用途に応じて幅や厚さの基準で板材や角材に多分割されている。分割は、年輪に対して直交と平行する二方向から行われているが、板目、柀目を意識して厳密に区別したのではなく、可能な限り分割をし、量産化する方に比重が置かれている。しかし、年輪を利用して割り裂くことには基本の一つであり、針葉樹の板材や角材が多いのも、この特性を反映した結果ともいえる。

原木の大きさは、杭材の上限は橋脚の一群に見る様に直径20～30cm前後にあるが、良質の太い材を使用した加工品の中には、部分的に残る年輪径からすると、これを上回るものが多く、No205の井戸枠やNo455の扉材に至っては直径1m近い復元値が得られる。遺跡内への原材の搬入は、二つの状態が考えられる。一つは、立木に近い状態で、幹から枝まで最大限に利用をはかる場合で、多出する上位の樹種が大型部材から杭材、木端材まで幅広い用途を持つことからすれば、この例に属するか。二つは、遺跡内に搬入された時、既に成形、加工されている場合で、No205の井戸枠の様に特殊な樹種か、特定の器種がこの例に属するか。量比からすると、後者は井戸枠の様に例外的存在で、前者を一般的とすべきだが、原木の入手に当っては遺跡周辺だけでなく、遠隔地を十分考慮する必要もあろう。



第13図 木取り模式図

第6表 三ツ寺I遺跡樹種別集計

分類		農具	武器	生活用具	建築部材・板材・杭材			用途不明	合計
番号	樹種	長着ナ又 柄柄ビ彫 鋸鋸取取	丸平木製 木刀 弓弓形板	容横刀下曲紡 子 の 遺 器榫柄駄物具	建扉把厚板有角分有ク井 築・孔割割サ戸 部板タビ	角橋太丸枝 杭・ 割 杭脚杭杭	用加う木樹把 透工ナ皮手 不明板ナ加付 品材板片品板		
		1	カヤ		1 1	3	5 2 5		1 5 1
2	イヌガ		8			1		9	
3	モミ	1	12	1 3	1 1 1 1 2 2 1 3	1 1 4 5	1 4 3 2	85	
4	アカマ					1 1		2	
5	スギ						1	2	
6	ヒノキ		1	2	1 1 1			6	
7	サウラ			1	1		1	4	
8	ヤナギ			1			2 1 0	13	
9	オニグルミ				1		1	2	
10	ハンノキ						2 1	3	
11	アカシデ・イヌシデ			1				1	
12	サワシバ					1 1		2	
13	カンバ	2 1 9	1		1 1 1 1		1 1	19	
14	クバリ	1	1	3 1	1 1 1 6 8 27 3 8 26	4 3 2 1 2	3 3 1	125	
15	カシ		1	3	1 1	1 1 3 1 5		35	
16	ブナ					1		1	
17	コナラ			1	1	1 1	1 2	7	
18	クヌギ	1 1			3 1	1 3 5 7	1	23	
19	カシ					1 3 1		5	
20	エノキ		1			3	5	9	
21	オヒヨウニ					1		1	
22	ケヤキ	1		1 2 1	1 1 6 4 3 4 1 2	3 2	1 5 1 1	49	
23	ヤマグワ				1	1		2	
24	フサザク					2		2	
25	メギ		1					1	
26	ヤマザク				1	1 1		3	
27	イヌザク						1	1	
28	モミ					1		1	
29	アズキナシ						1	1	
30	ナナカマド					1	1	2	
31	サイカチ				2 1 1	1	1	6	
32	コクスギ						1	1	
33	ニギキ				1		1	2	
34	アカメガシ					1		1	
35	チドリノキ		1		1		3	5	
36	ウラダエンコウカエデ						2	2	
37	イタヤ類			1	1 1			3	
38	ウリハダカエデ				1		1	2	
39	モミ			1			7 1	9	
40	トチノキ			1	1		1	3	
41	ムクジ					1		2	
42	アワブキ						2	2	
43	ケンボナシ			1		1 1 4	1	9	
44	サルナシ						1	1	
45	ツバキ			1			6	7	
46	ウコギ						1	1	

三ツ寺I遺跡 (木器編)






モミ・クリ 各23、ケヤキ 19、カンバ 13、イヌガヤ 8、クヌギ 6、カヤ・ケンボナシ・ヒノキ 各3、スギ・コナラ・サワラ・ヤブダマリ・ムラサキシネブ 各2、ヤナギ・トチノキ・エノキ・エゾエノキ・カシワ・カシ・チドリノキ・サイカチ・ヤマグワ・ヤマボウシ・ニガキ・モミジ・ツバキ・メギ 各1、不明 8

3 上位6樹種の器種別分類

クリ	125点	モミ	85点	ケヤキ	49点
農具	1 (0.8%)	農具	1 (1.8%)	農具	1 (2.0%)
生活用具	4 (3.2)	生活用具	4 (4.7)	生活用具	4 (8.1)
武器	1 (0.8)	武器	12 (14.1)	武器	0 (0)
杭材系	31 (24.8)	杭材系	11 (12.9)	杭材系	5 (10.2)
板材系	45 (36.0)	板材系	50 (58.8)	板材系	14 (28.6)
クサビ等	36 (28.8)	クサビ形	4 (4.7)	クサビ等	17 (34.6)
用途不明	6 (4.8)	用途不明	5 (5.9)	用途不明	8 (16.3)

カシ	32点	カヤ	25点	クヌギ	25点
農具	1 (3.1%)	生活用具	3 (12.0%)	農具	5 (20.0%)
杭材系	29 (90.6)	武器	2 (8.0)	杭材系	16 (64.0)
板材系	2 (6.3)	杭材系	7 (28.0)	板材系	3 (12.0)
		板材系	8 (32.0)	用途不明	1 (4.0)
		クサビ形	4 (16.0)		
		用途不明	1 (4.0)		

次の表は、三ツ寺I遺跡を前後し、樹種の鑑定報告がされた、新保、日高、中村遺跡と、樹種を比較したものである。

時 代	弥 生 時 代		古 墳 時 代		
	中 期	後 期	前 期	中 期	後 期
遺跡の存続期間	新保 		中村  三ツ寺  元総社明神  三室A 		
各遺跡の上位5樹種	新保 1028点 1 クヌギ類 448 2 カシ類 156 3 クリ 100 4 モミ類 77 5 イヌガヤ 52	日高 51点 1 クリ 10 2 アカガシ属属 9 3 クヌギ類 5 4 モミ 3 5 モミ属 2 カバノキ属 2	中村 208点 1 ヤナギ 53 2 ヤマグワ 22 3 クリ 17 4 ハンノキ 10 5 ヌルデ 8	三ツ寺I 536点 1 クリ 125 2 モミ 85 3 ケヤキ 49 4 カシ 32 5 カヤ 25 クヌギ 25	

ま と め

これまで見てきた、本遺跡出土の木製品の特徴は次の様に要約される。

- 1 時期について 時期は、館の存続期間である5世紀後半から6世紀初頭に限定され、ナスビ彩着柄畷を代表とする農具類に時代的な特徴があらわれている。
- 2 出土状態について 木製品は、館を囲む濠内最下層である黒色泥土を包含層として出土したが、量は西濠が最も多く、北、南と続き、南濠にはやや稀薄さが窺える。この量は、調査した箇所や面積を反映するが、伴する土器の量とは反比例に近い関係があり、濠毎に分布背景が求められる。この背景は、館の南北二分される構造と正面観を反映しているようだが、西濠は館の背後に相当するため、北濠は竪穴住居(群)と外縁部とを結ぶ主要出入口を控えた日常性の高い場面に面するためと推定される。その反面で、南濠の稀薄さは非日常性の現われともいえる。
張出部の基部、石垣及び外縁沿いには、特に集中した状態が共通項として見られたが、単に館の内部から自然崩落しただけでなく、2度にわたる改築に対応する「故意に廃棄」したものが含まれ、むしろ大勢を占める可能性が高い。その時間的経過については、二ツ岳F A降下を契機として建物等が濠内へ一気に自然崩落した形跡はなく、南辺や西辺で確認された2～3回の石垣崩落に端を発すか、連動する段階的なものといえる。この点は、出土したレベルが濠底面に密着したものと、高いものがあることから裏付けられる。
- 3 器種について 器種は、農具、武器、生活用具等、5分類32以上があり、館内部での生活や構造物の一端を示すものである。これらは、日高、新保等の農耕集落に共通する生産、生活用具の内容と本遺跡独自の祭祀に関するものがある。太杭は、多量かつ直径15cm前後に法量が安定し、館内の各種柱痕径に近似すること、脚だけ残る橋梁の遺構実態と合せて、館内部の構造物を具体的にイメージさせる。また、祭祀具としたものは、33点の丸木弓と木刀形があり、張出部の石垣斜面から単独乃至集中して出土した高坏、須臾器の甕等、滑石製模造品と性格を同じくするもので、これらを複数組み合せて供献具としたものであろう。
- 4 樹種と木取りについて 樹種は、536点を鑑定した結果、61種以上あることが判明した。上位からクリ、ケヤキ、クスノギ等の広葉樹を主体に、モミ、カヤ等の針葉樹も多く、広葉樹と針葉樹との比率は4:1である。同じ前橋台地にある日高、新保遺跡では、弥生時代後期から古墳時代初期にかけては落葉広葉林だったものが、二ツ岳F A降下前後の時期になると徐々にモミ、ツガ等の針葉樹が抬頭するが、本遺跡もこれに沿う傾向を示し、遺跡周囲の景観として捉えられる。
木取りは、「みかん割り」により、板目、柾目を意識せず、板材、角材の生産を無駄なく繰り返している。原材は、幹から枝まで有効に使用して量を満たすとともに、農具や丸木弓等に特定の樹種を選材している。

参考文献

- 1 群馬県教育委員会 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
『日高遺跡』(関越自動車道(新四線)地城埋蔵文化財発掘調査報告書第5集 1982)
- 2 同 上
『新保遺跡 I』(同 上 第10集 1965)

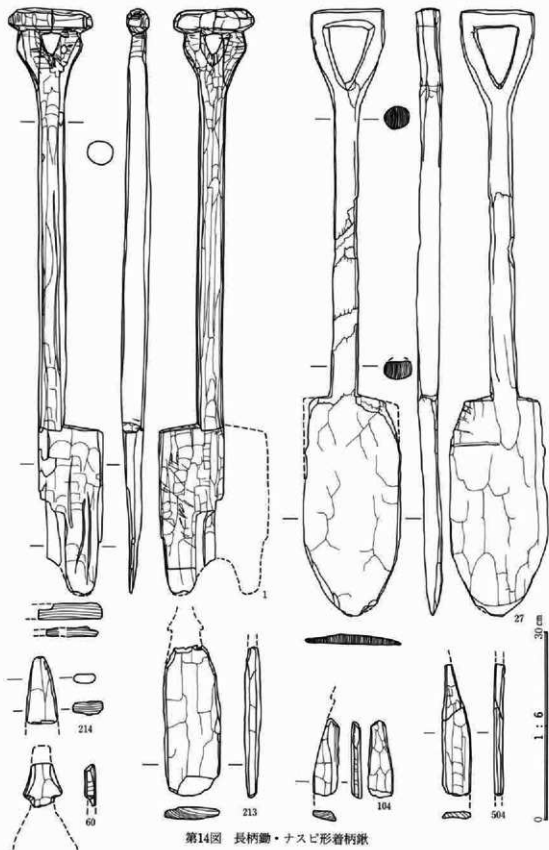
- 3 狭川市教育委員会 群馬県教育委員会、日本道路公団 【中村遺跡】 (1986)
 4 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 【元総社明神遺跡 III・IV】 (1986)
 5 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 【年報】 6 (1987) 【新保田中村前遺跡】 【二ノ宮千足遺跡】
 6 同 上 【年報】 1 (1982) 【三室A遺跡】
 7 黒崎 直 「古墳時代の農耕具」 『奈良国立文化財研究所研究論集』 3 (1976)
 渡辺 誠 「ヨコヅチの考古民具的研究」 『考古学雑誌』 第70巻第3号 (1985) 日本考古学会
 松井和幸 「日本古代の鉄製兼先・鋸先について」 『考古学雑誌』 第72巻第3号 (1987) 日本考古学会
 置田雅昭 「古墳時代の木製刀剣鞘装具」 『考古学雑誌』 第71巻第1号 (1985) 日本考古学会
 高木ヨシ 「東日本縄文時代後・晩期の網代編みについて」 『物質文化』 15 (1970) 物質文化研究会

補註

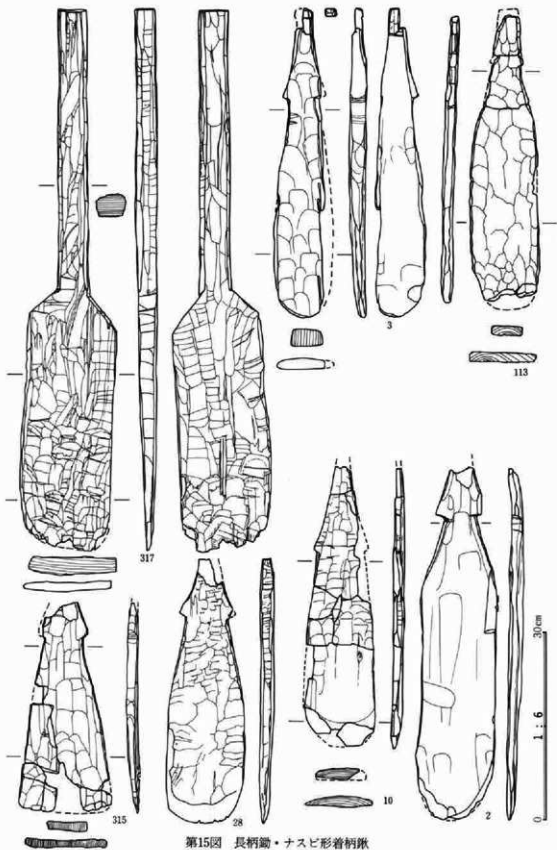
校正中、前橋市二之宮町二之宮宮下東遺跡から、古墳時代前期から後期にいたる木製品が出土した。木製品は、狭い谷地の浅間C軽石と標名二ツ岳火山灰(FA)、奈良時代遺物包含層によって明瞭に面された自然堆積土中から出土している。二ツ岳FAと奈良時代包含層間から出土した木製品は、伴出遺物より6世紀中頃から後半に限定でき、三ツ寺I遺跡等の後に位置付けられる。製品としては、靴、ナスビ形着柄鉢、鉄、鋼の柄、横槌、下駄等がある。ほかには建築部材に相当する、大型のものが多く出土している。

この時期の木製品は、県下では出土例が少なく、貴重な資料である。中でも靴は全国的にも類例が少なく、一般集落を想定させる農具、生活用具等とともに出土したことは興味深い(大西 雅広氏 教示 報告は昭和66年度刊行予定)。

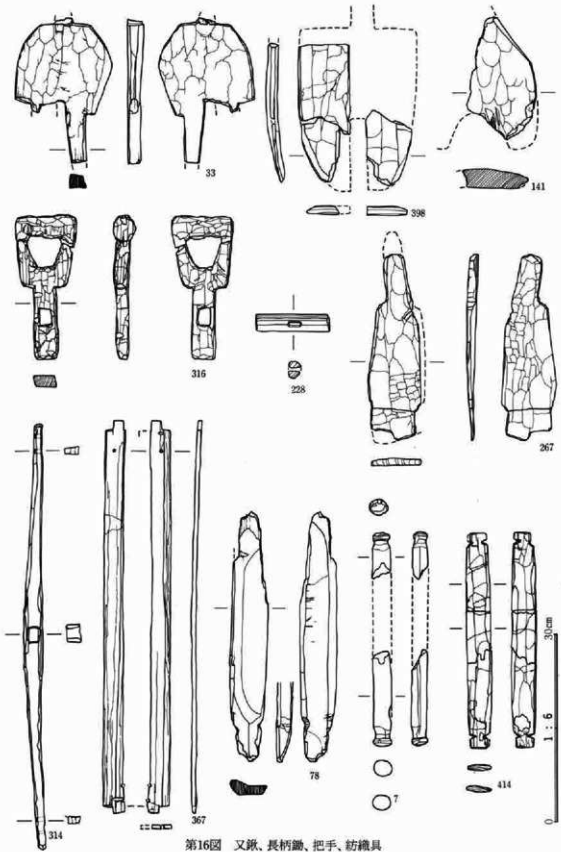
また、元総社明神遺跡に隣接する寺田遺跡の報告があった(前橋市埋蔵文化財発掘調査団 【寺田遺跡】 1987, 3)。2つの遺跡は、大溝ならびに堰を設けた溝をもってつながるものである。木製品は、ともに溝内の二ツ岳FA下黒色泥土から出土した。その状態と内訳は、溝の護岸施設として打ちこまれた多量の杭材と、溝内に泥炭・流入したと思われる農具(ナスビ形着柄鉢、藤柄生活用具(盆、横槌、整杆、楔?)、釣孔、相欠き柄を持つ板材、角材のほかに、椰子や暖板に転用されたと思われる長さ1m、厚さ5cmを越す厚板があり、建物内外の様子を示す。特に、暖板に転用の建築部材や扉の法量や加工上の特徴は、三ツ寺I遺跡の内容と近似するものであり、福判や大型建物の建築が一般集落とも共通していた点で興味深いものがある。



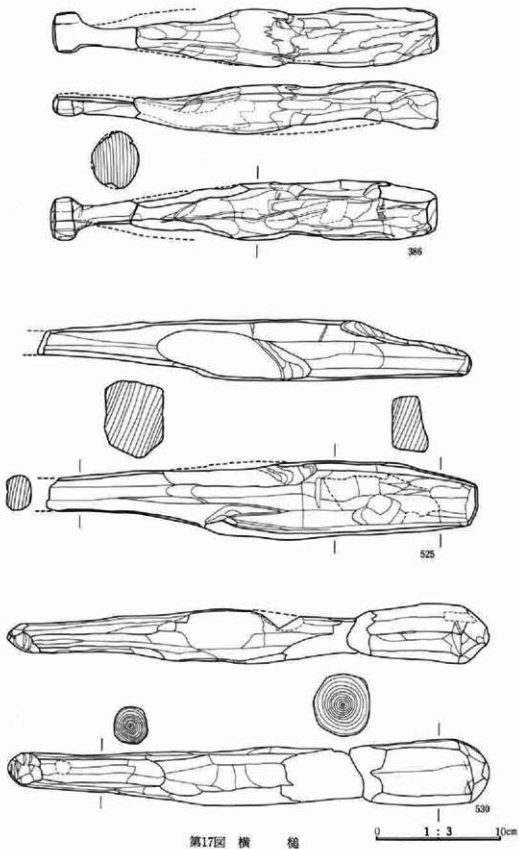
第14図 長柄鋤・ナスビ形着柄鍬



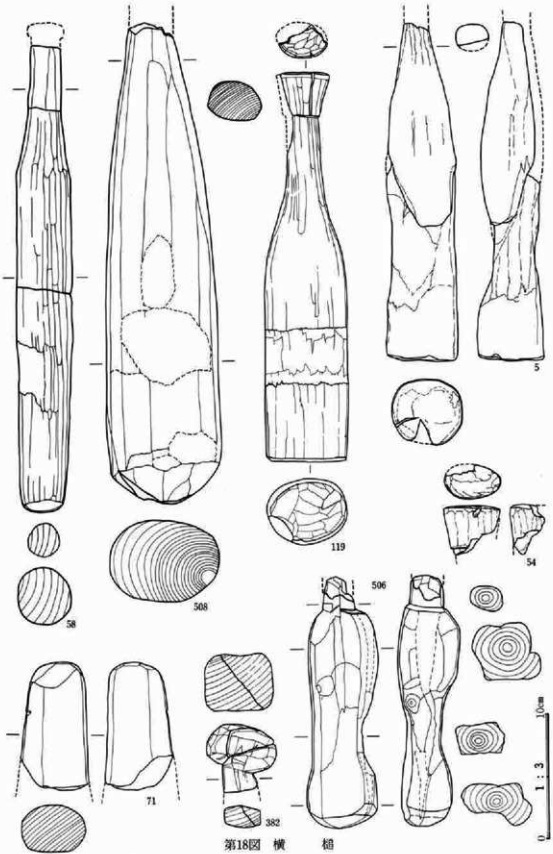
第15図 長柄鋤・ナスビ形着柄楯



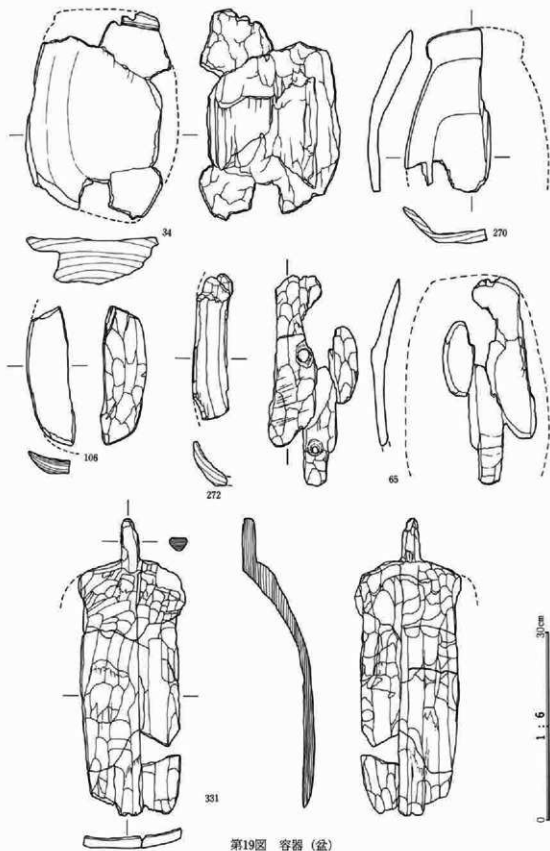
第16図 又鋏、長柄鋏、把手、紡織具



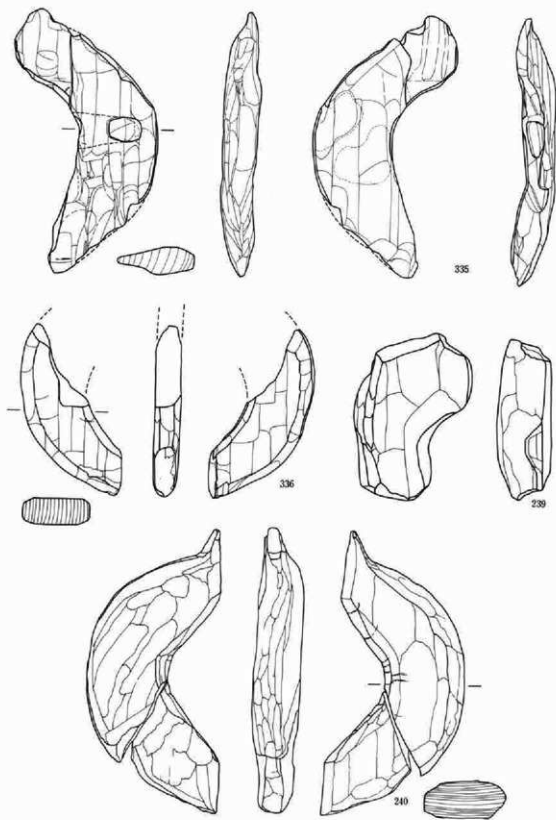
第17図 横 槌



第18図 横 栝

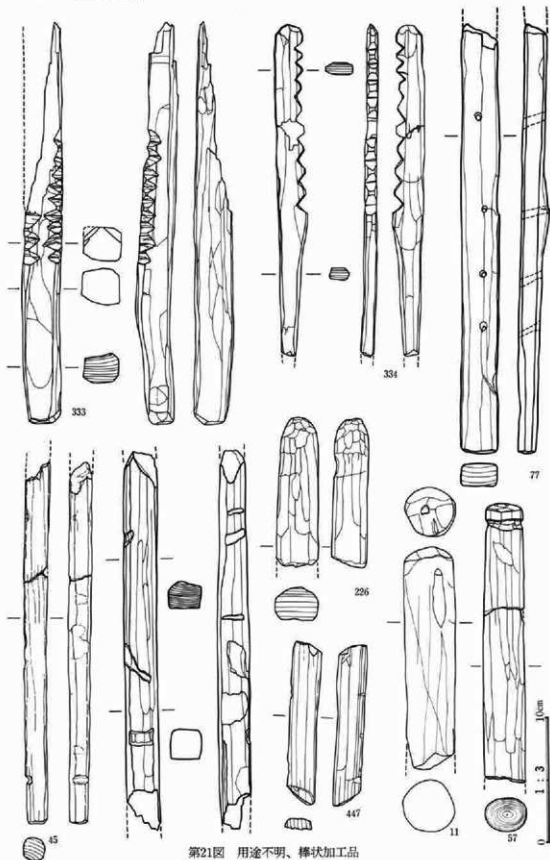


第19図 容器 (盆)

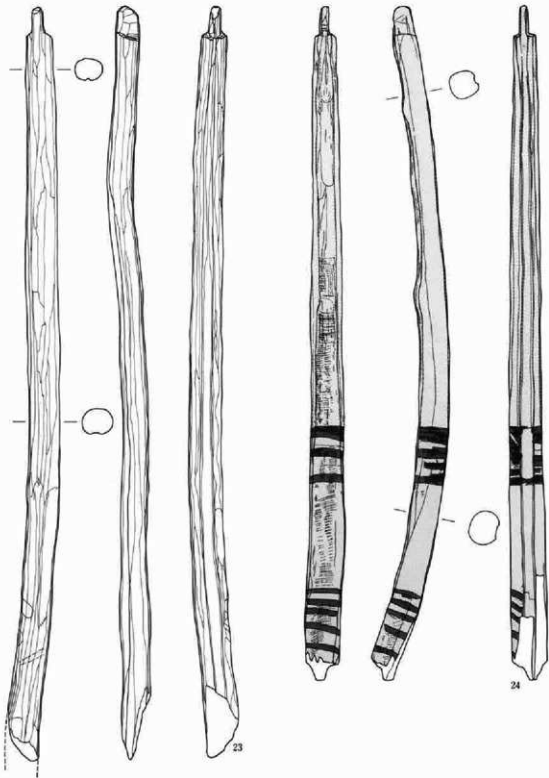


第20圖 用途不明

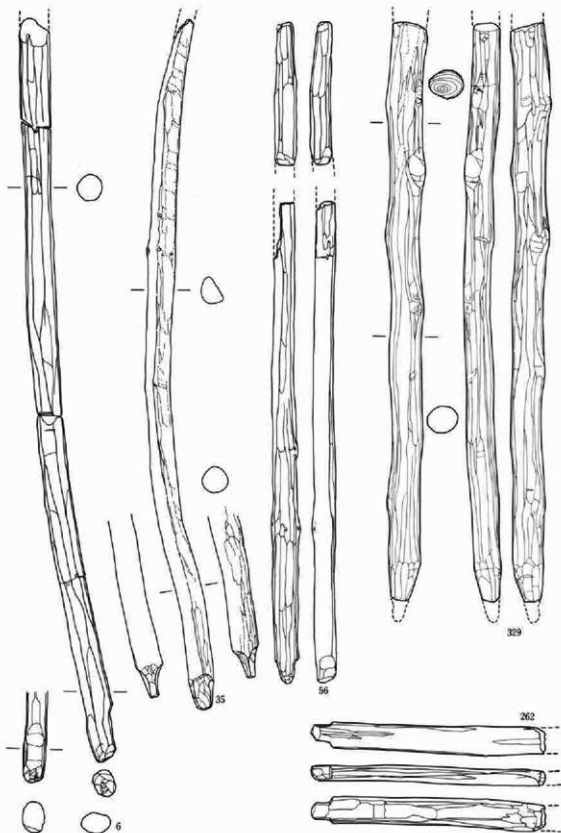
0 1 : 3 10cm



第21図 用途不明、棒状加工品

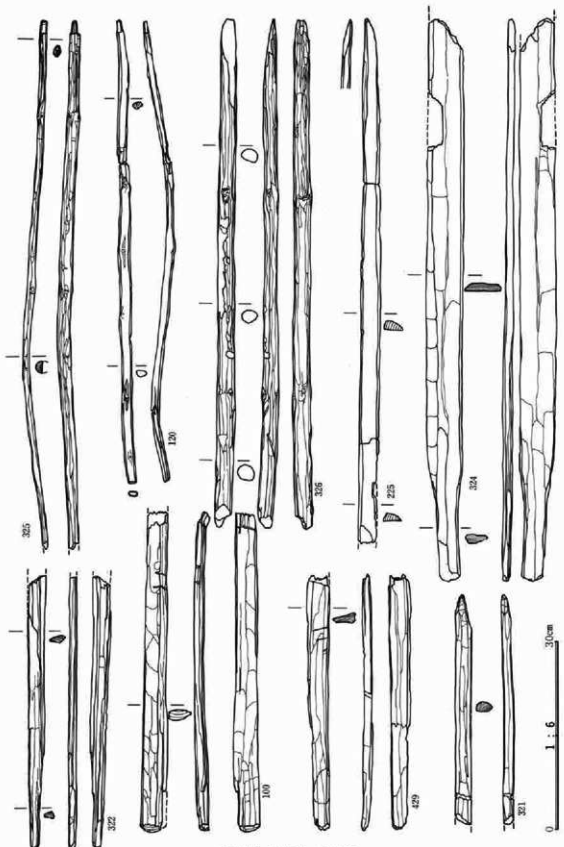


第22図 丸木弓

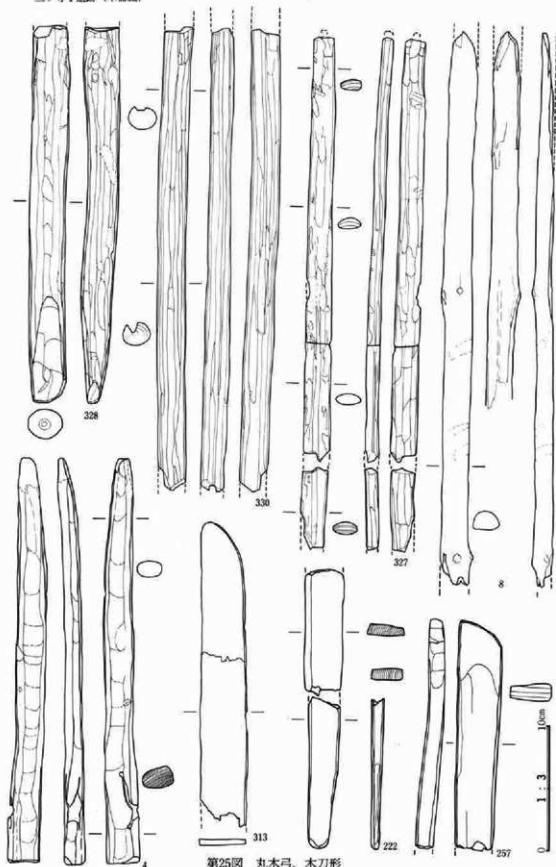


第23図 丸木弓

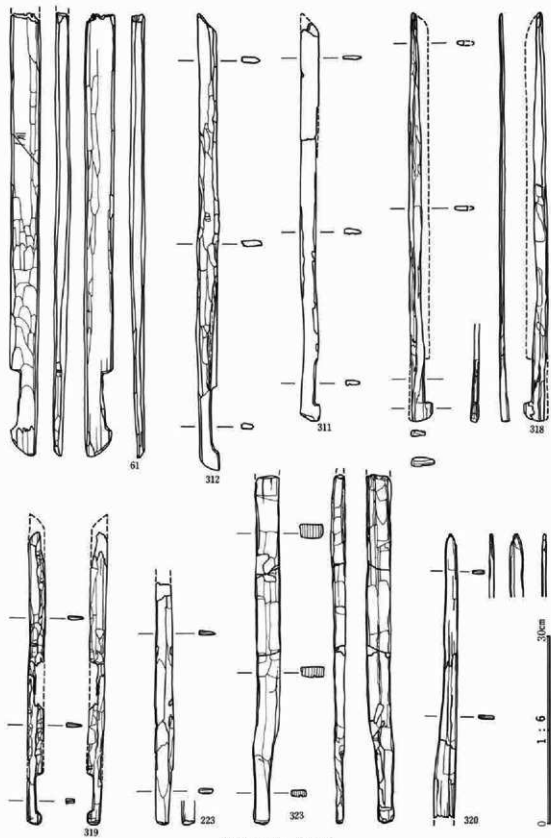
0 1 : 3 10cm



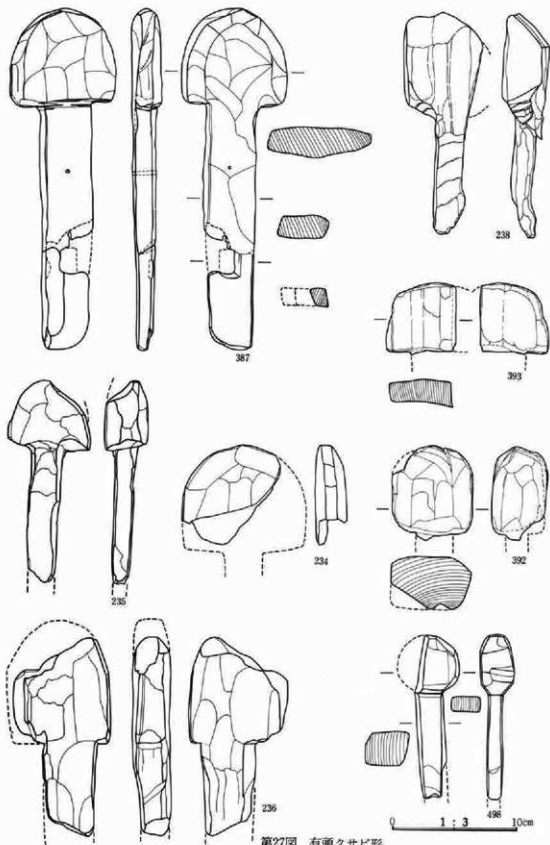
第24図 丸木弓、木刀形



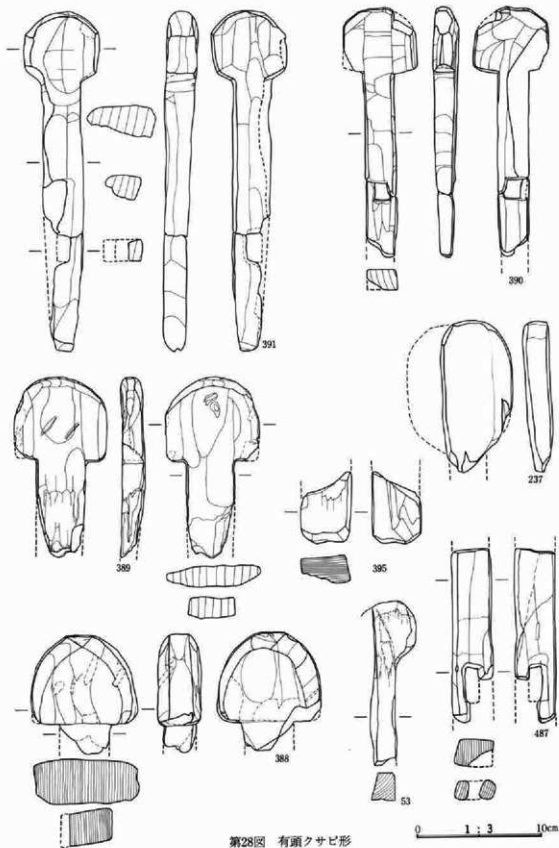
第25図 丸木弓、木刀形



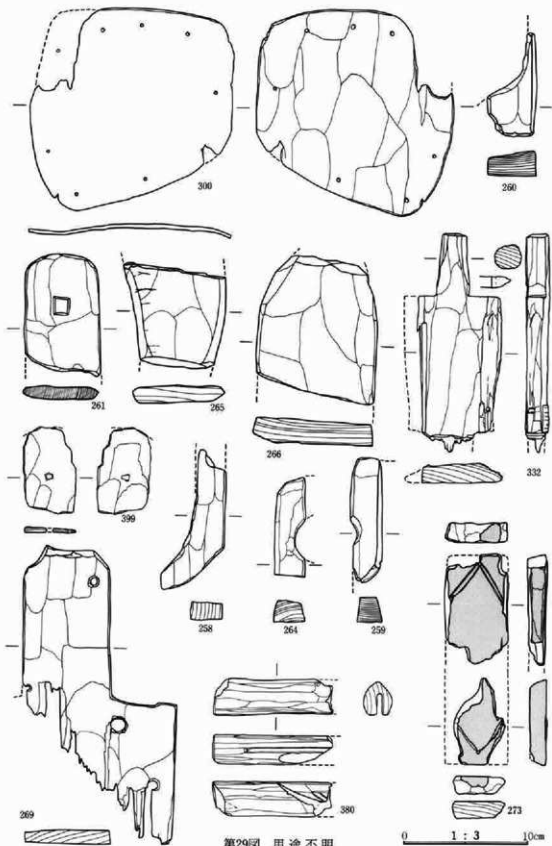
第26図 木刀形



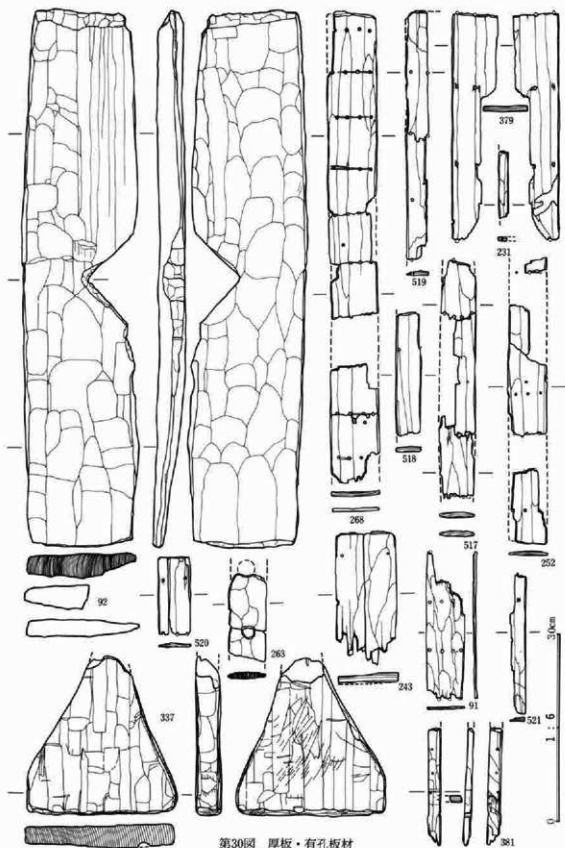
第27図 有頭クサビ形



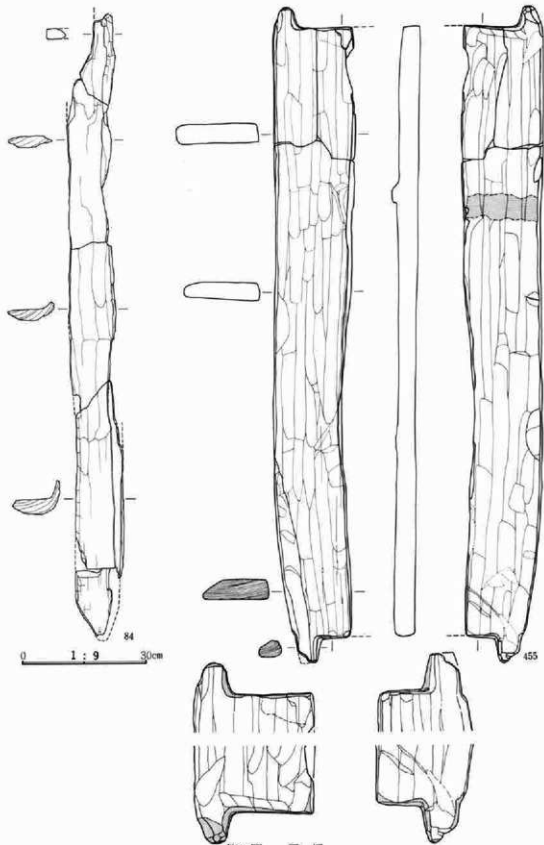
第28図 有頭クサビ形



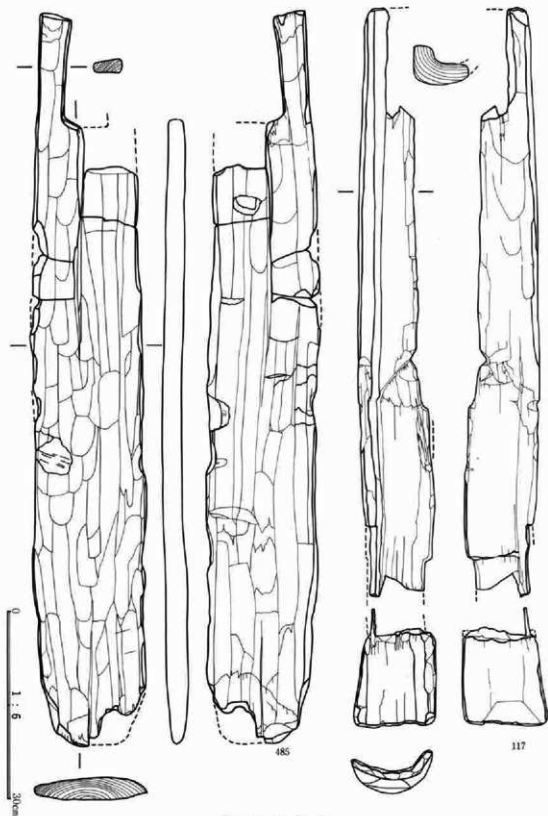
第29図 用途不明



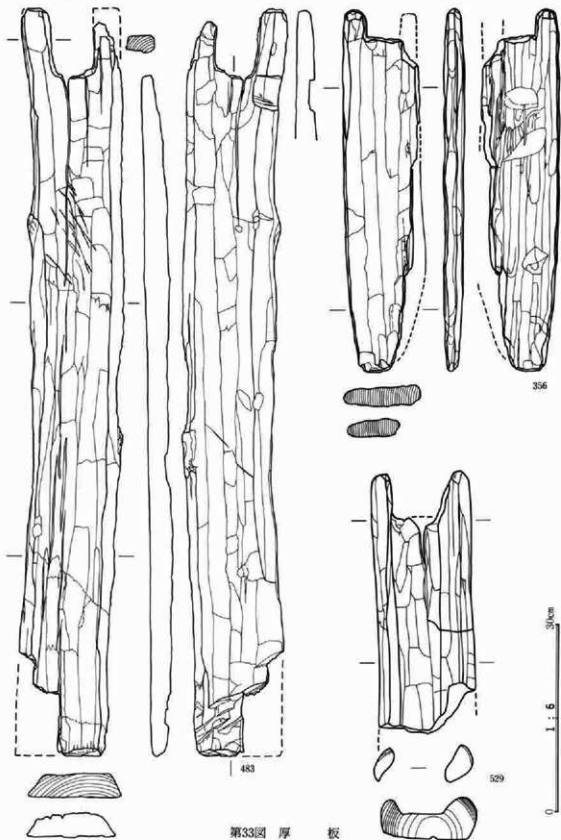
第30圖 厚板・有孔板材



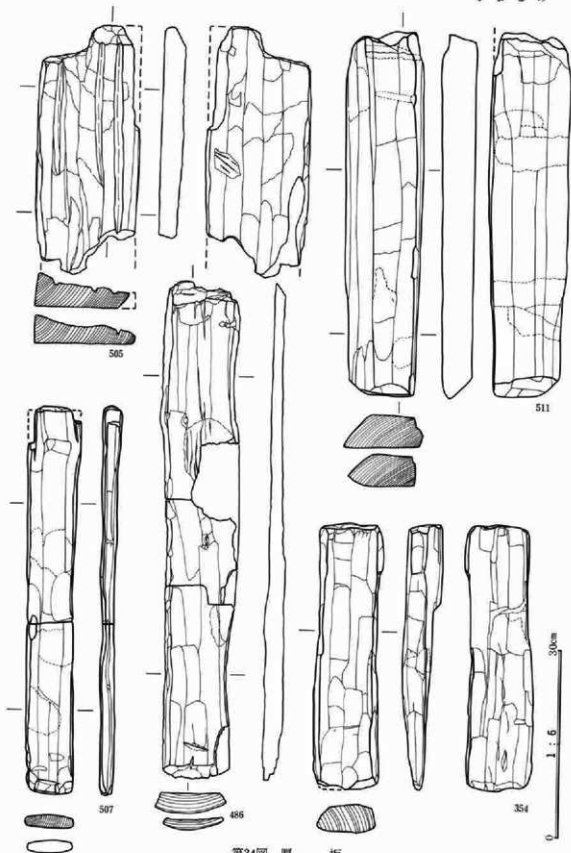
第31図 扉、榑



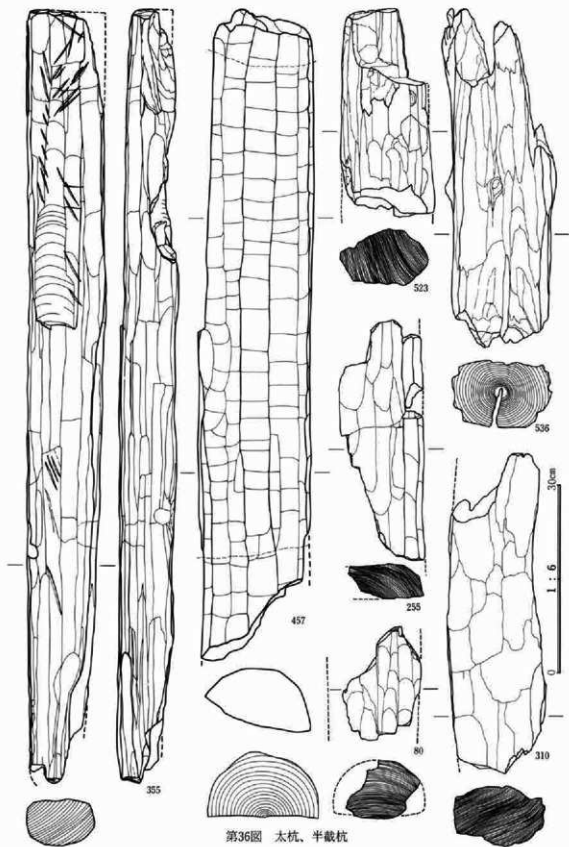
第32図 厚板、楯



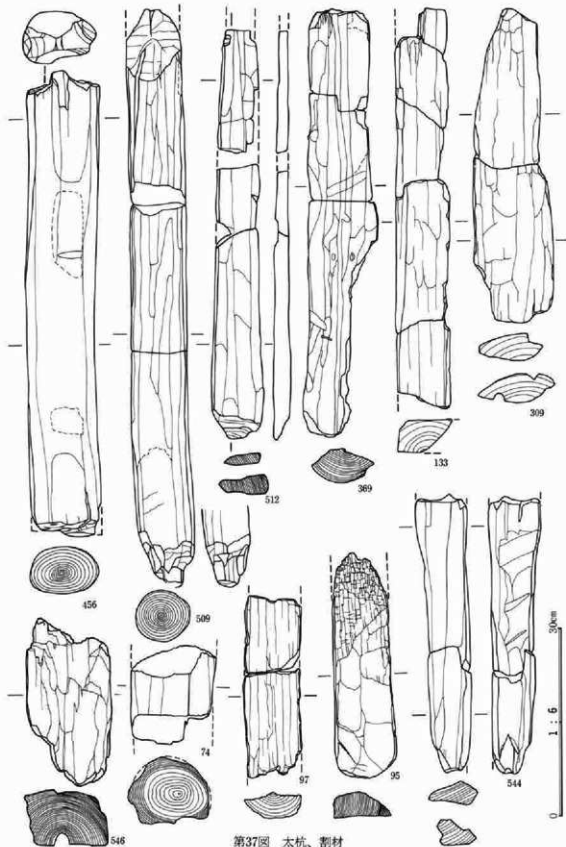
第33図 厚板



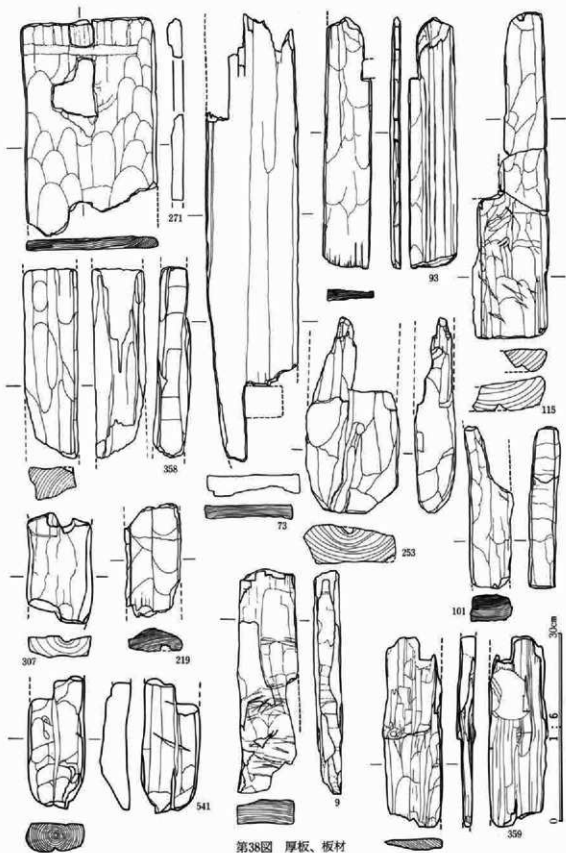
第34図 厚板



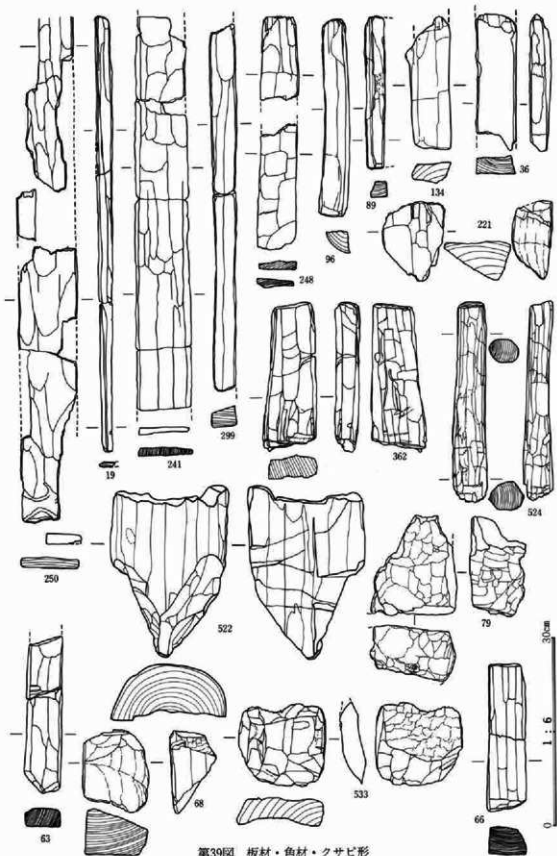
第36図 太杭、半截杭



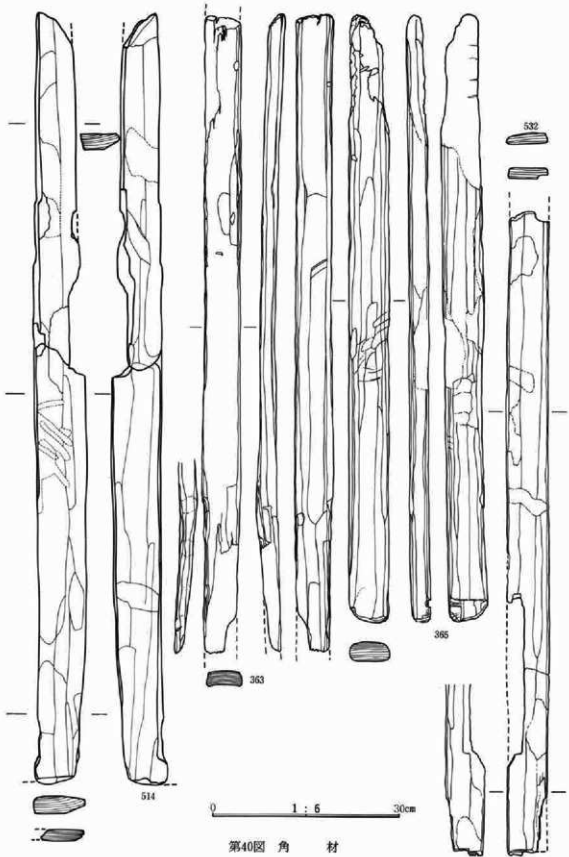
第37図 太杭、割材



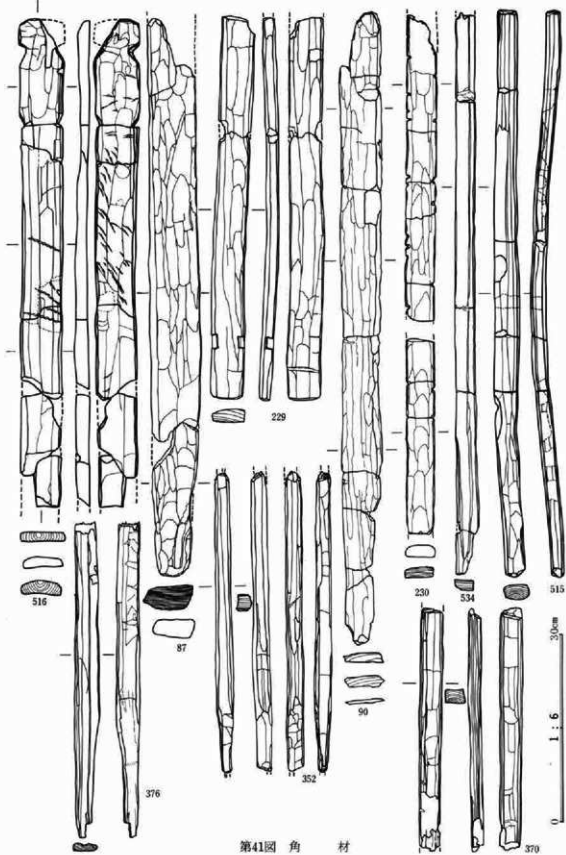
第38図 厚板、板材



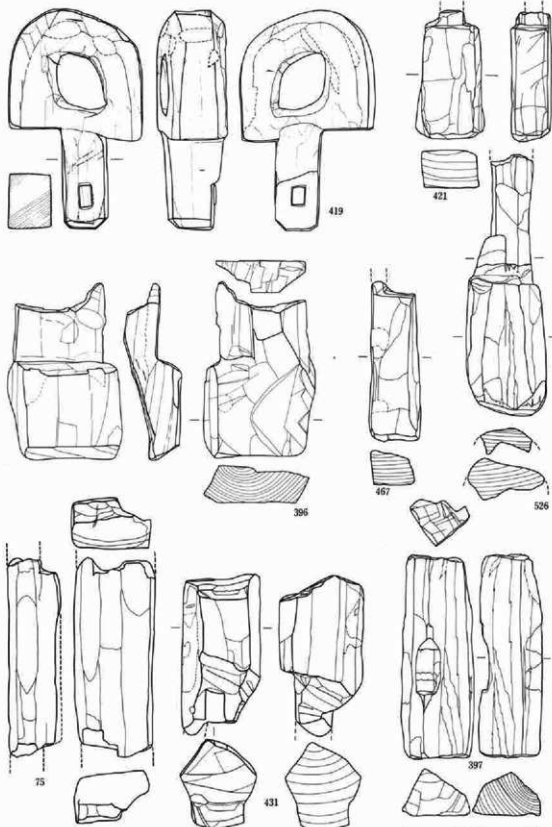
第39図 板材・角材・クサビ形



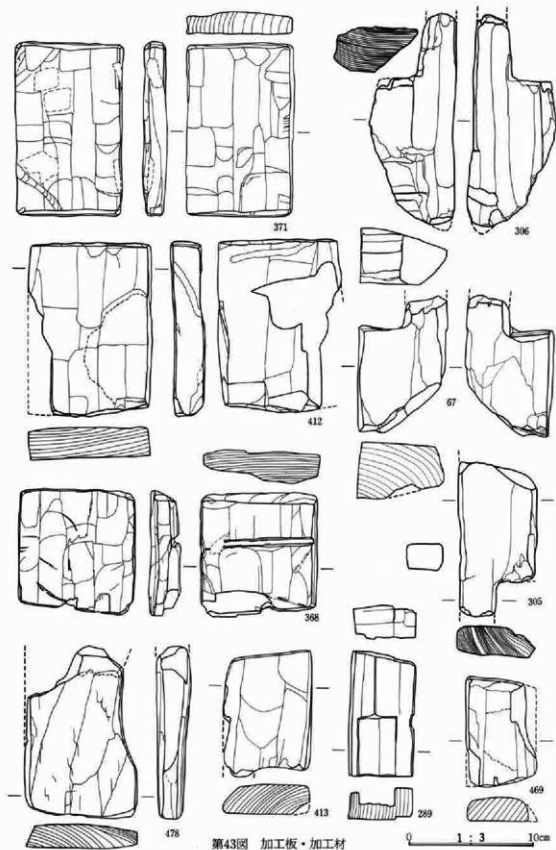
第40図 角 材



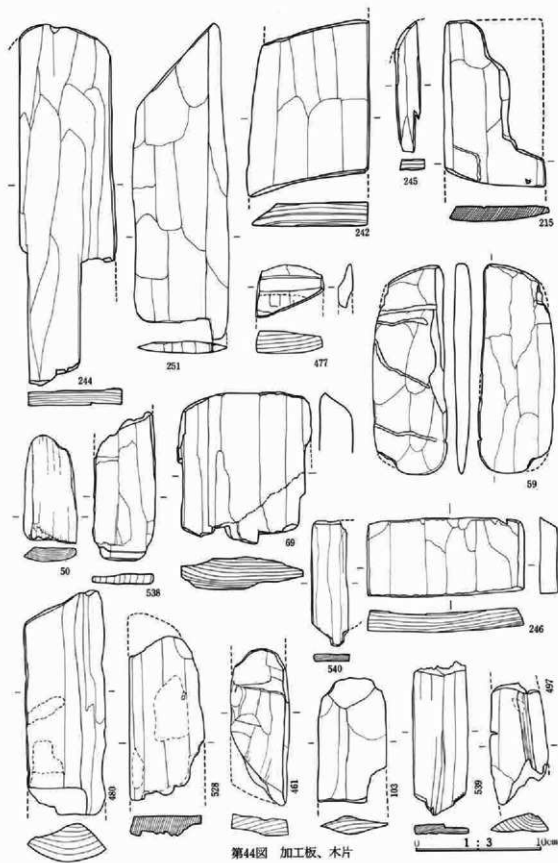
第41図 角材



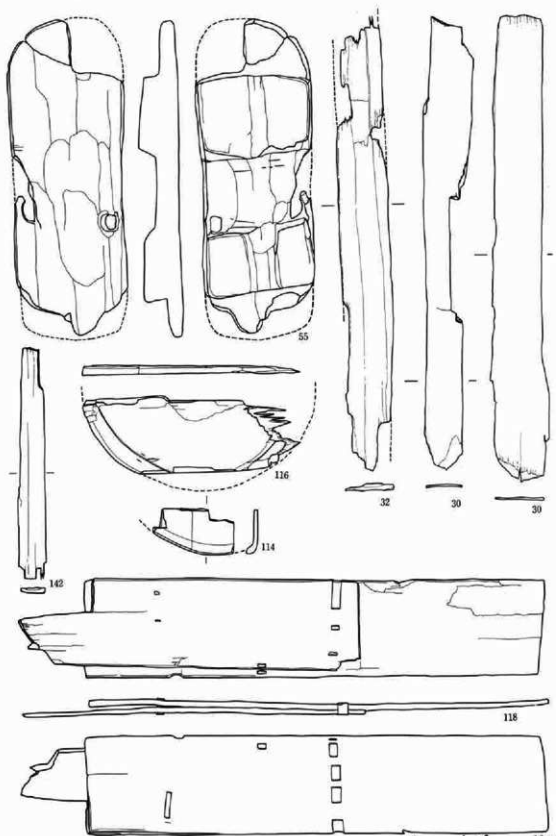
第42図 把手、加工品



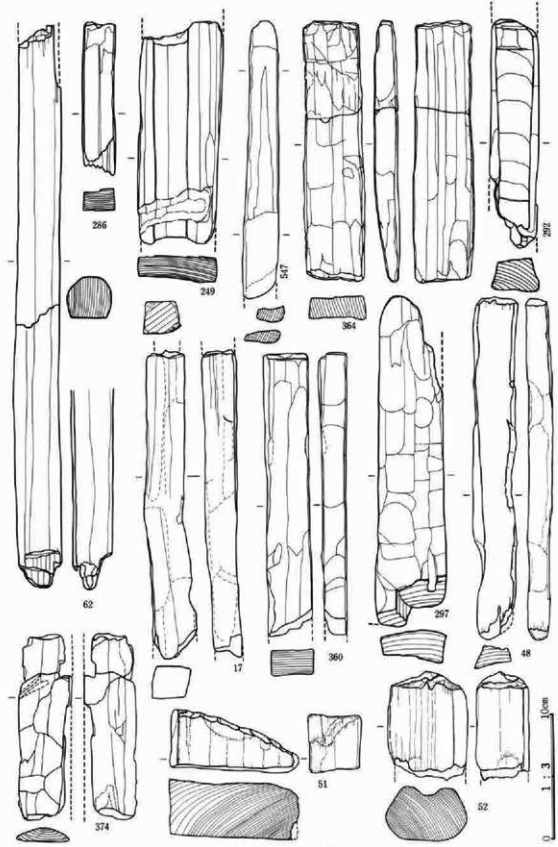
第43図 加工板・加工材



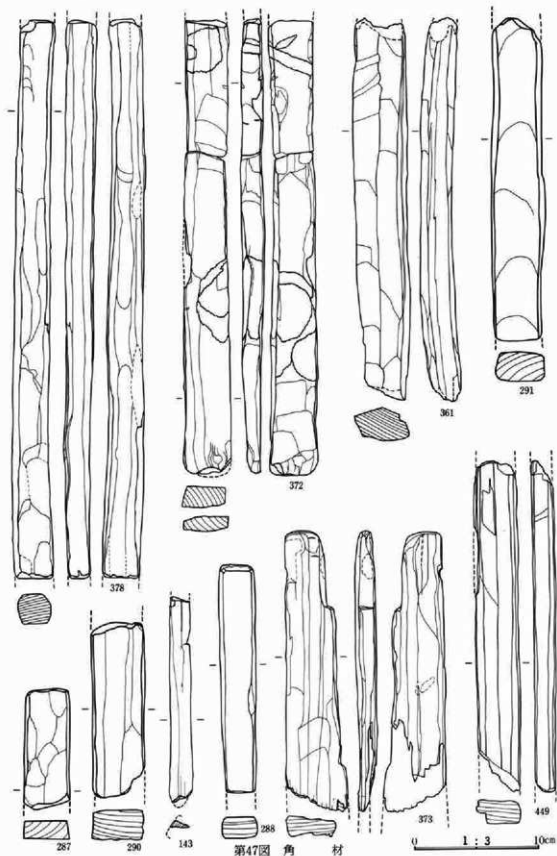
第44図 加工板、木片



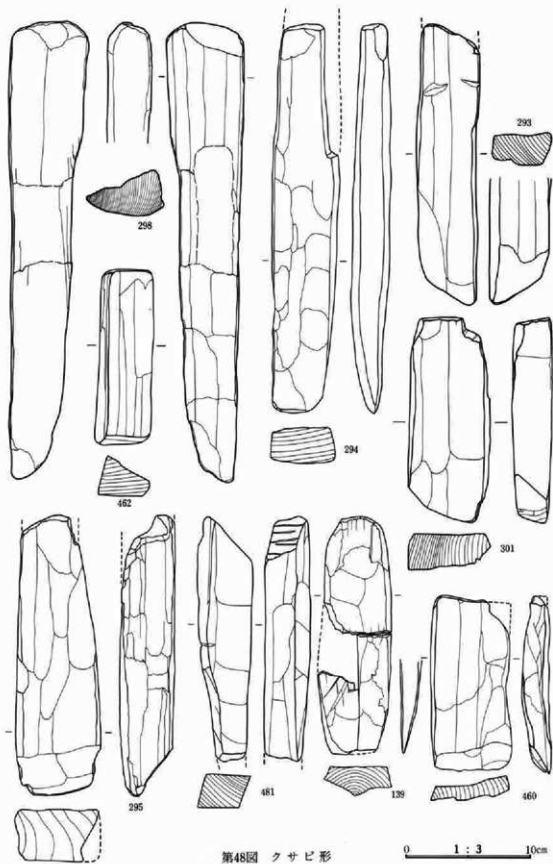
第45図 下駄、曲物、木片



第46図 角材、木片

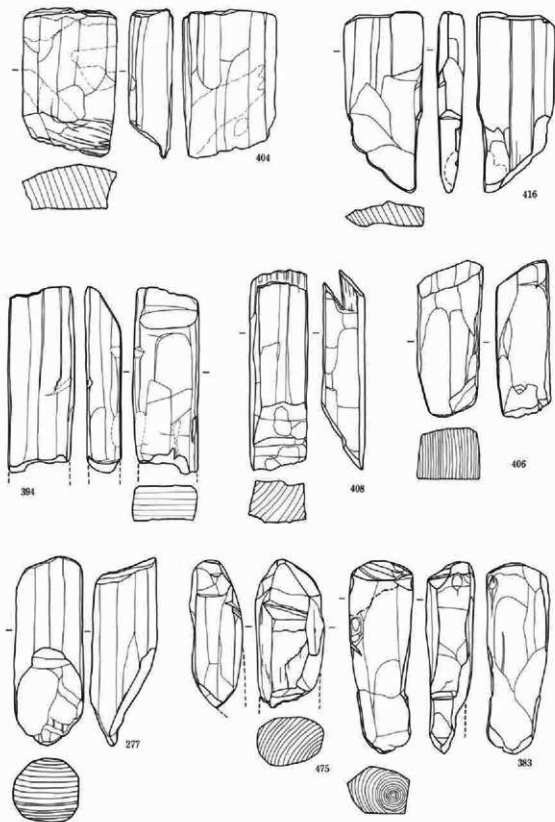


第47図 角材



第48図 クサビ形

0 1 : 3 10cm



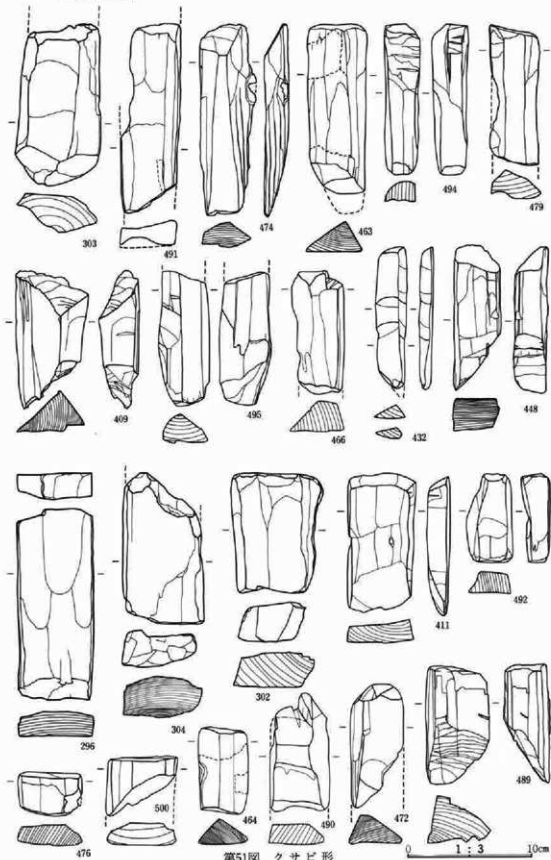
第49図 クサビ形

0 1 : 3 10cm

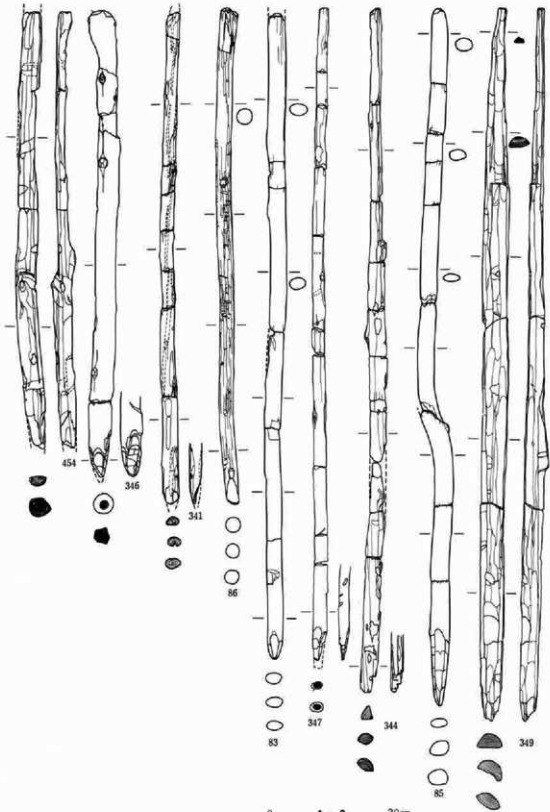


第50図 クサビ形

0 1:3 10cm

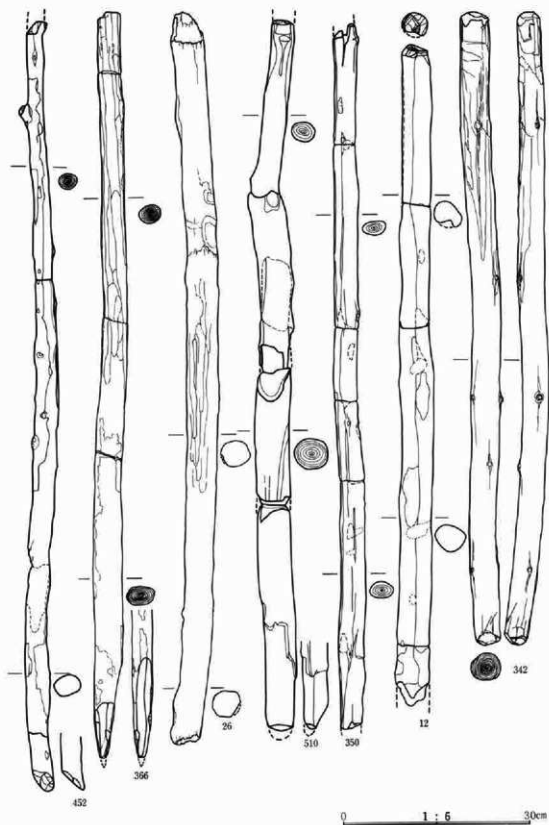


第51図 クサビ形

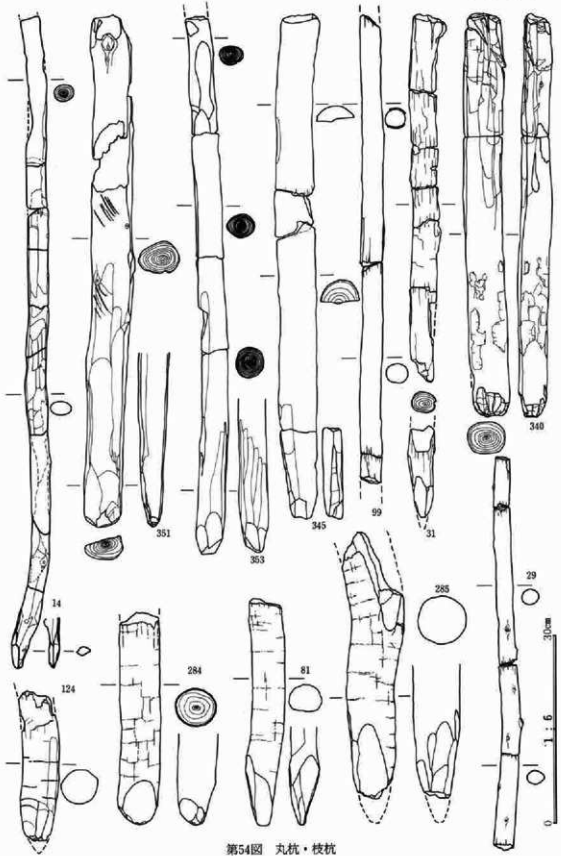


第52図 丸 杭

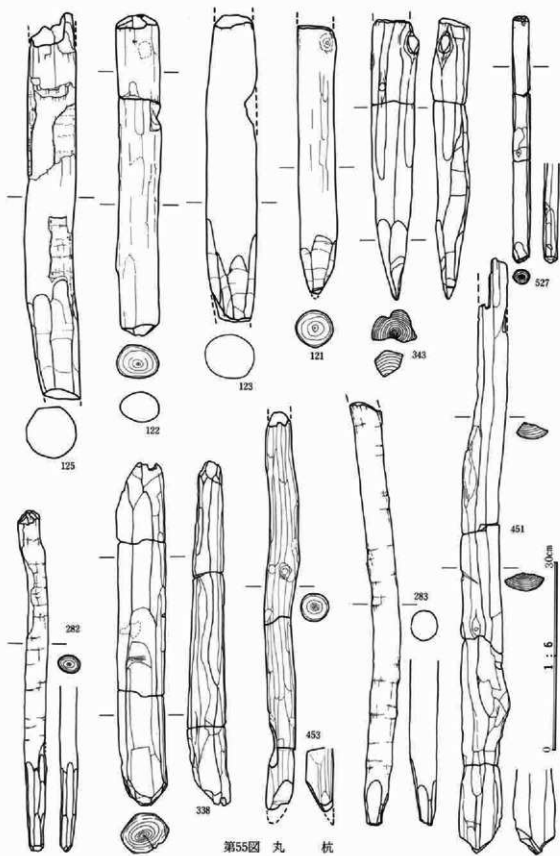
0 1 : 9 30cm



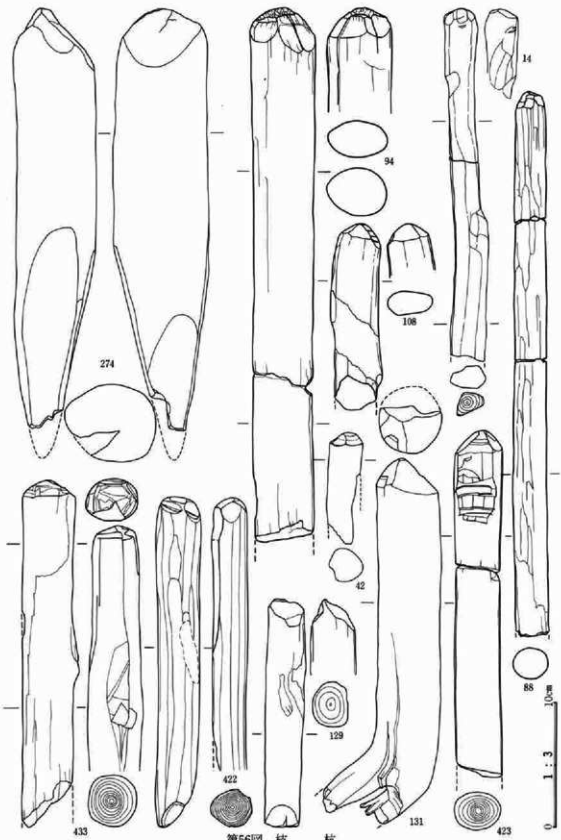
第53図 丸 杭



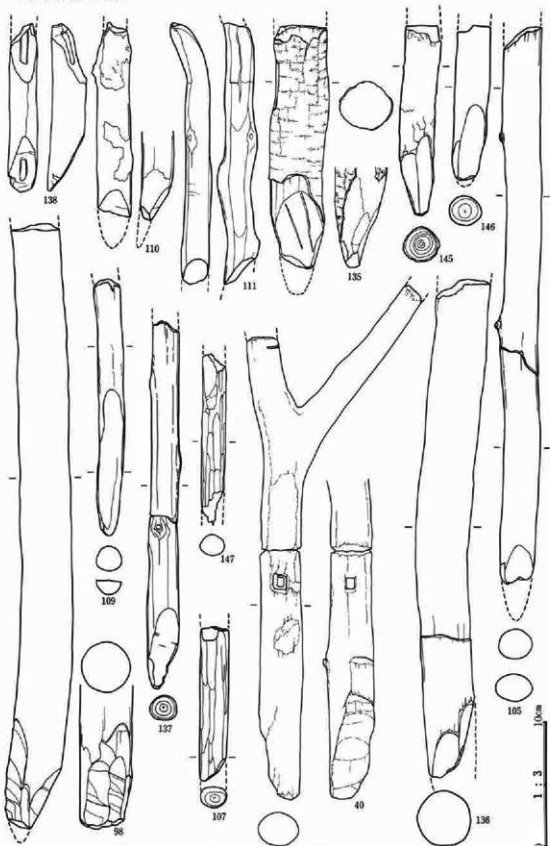
第54図 丸杭・枝杭



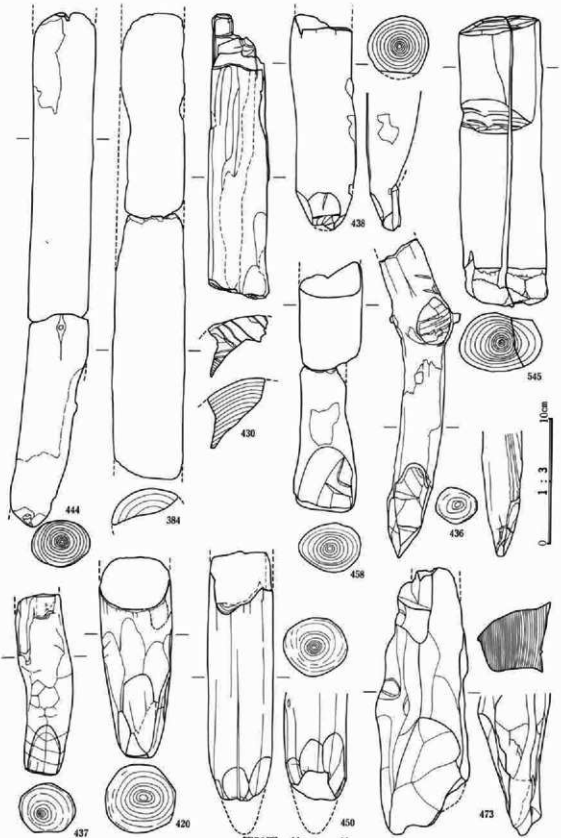
第55図 丸 杭



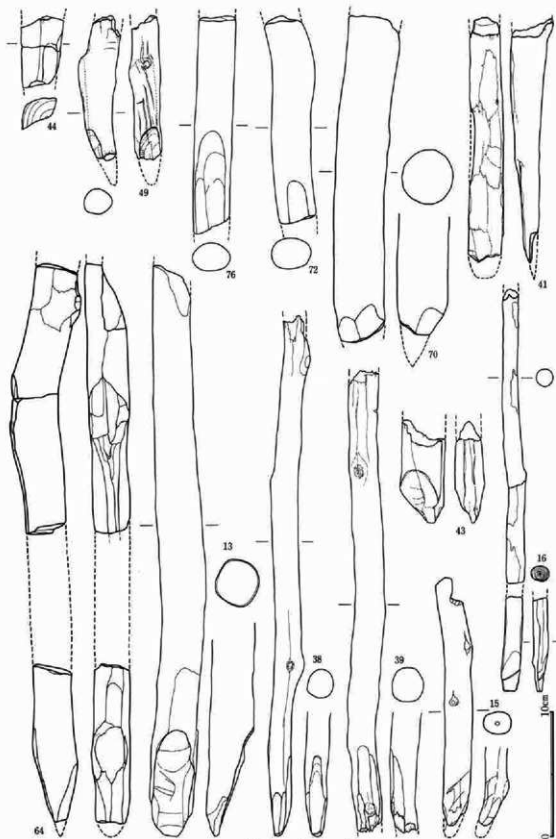
第56図 枝 杭



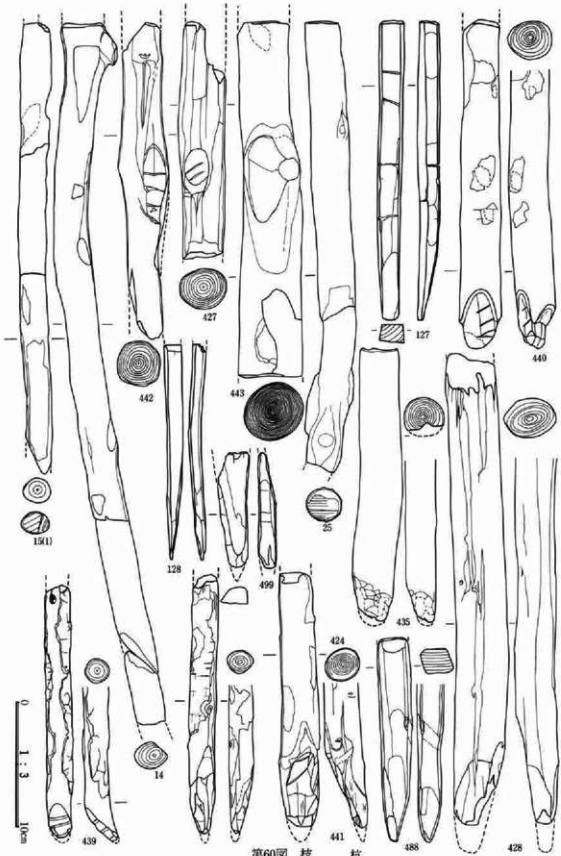
第57図 枝 杭



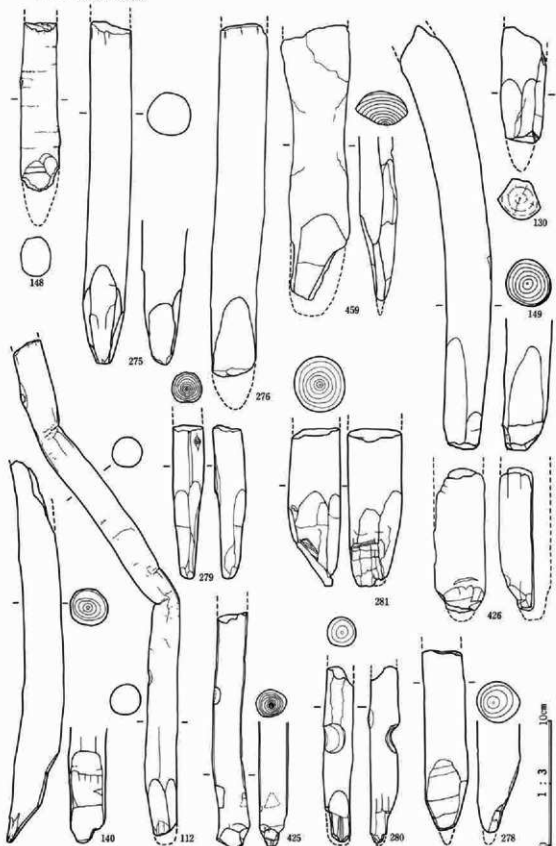
第58図 枝 杭



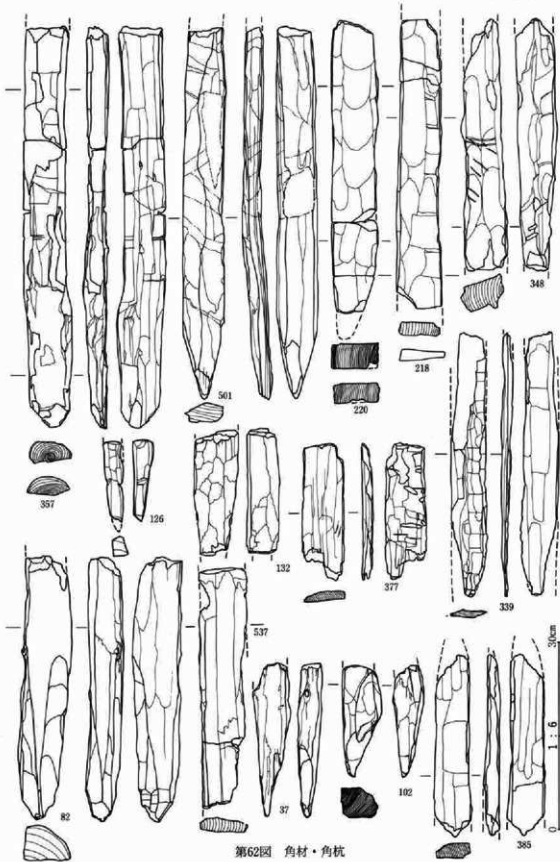
第59図 枝 杭



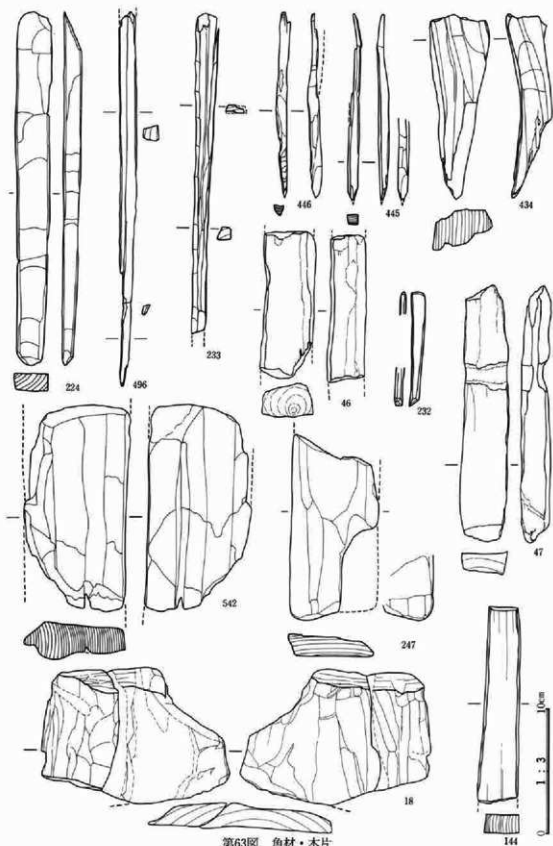
第60図 枝 杭



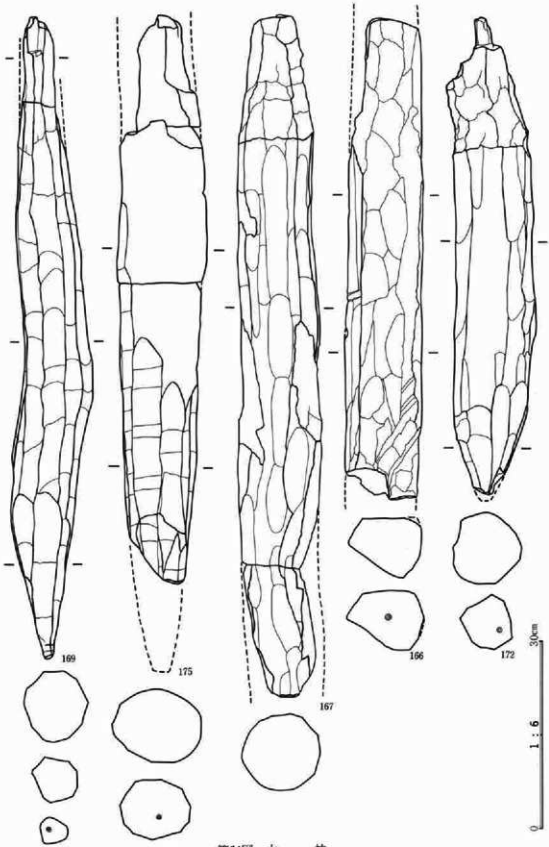
第61図 枝 杭



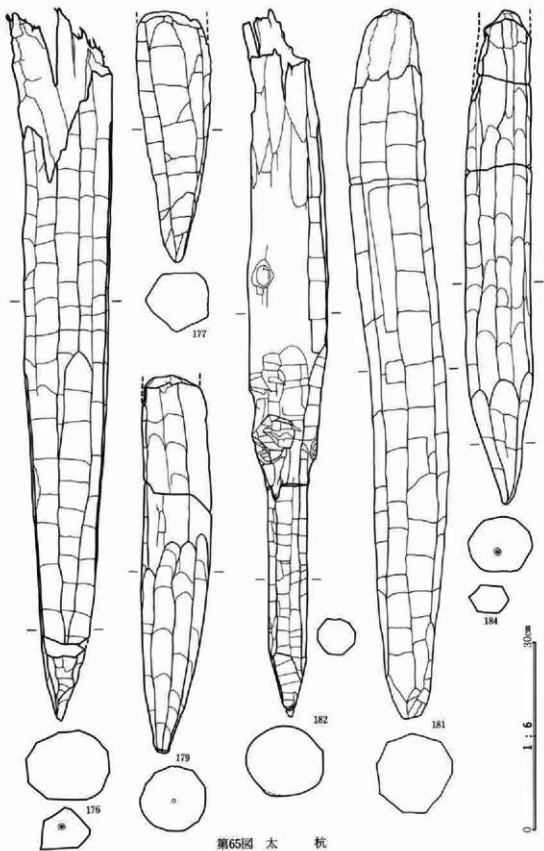
第62図 角材・角杭



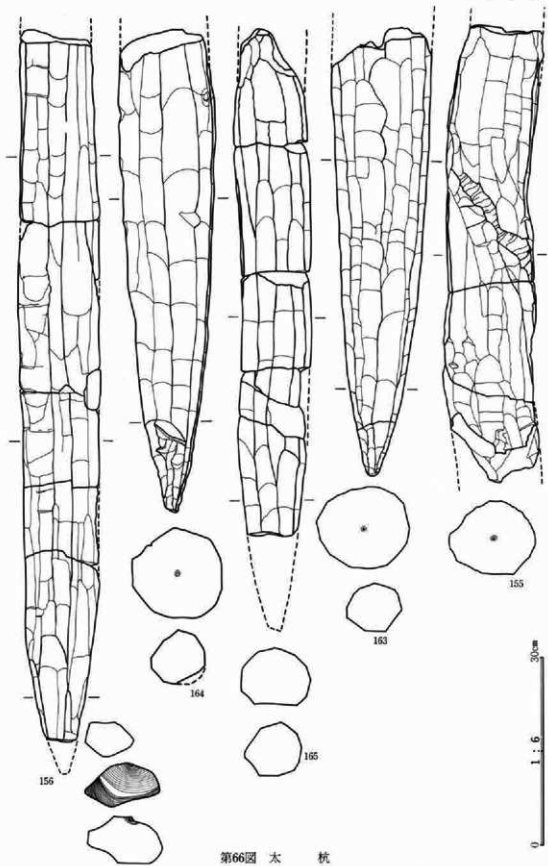
第63図 角材・木片



第64図 太 杭

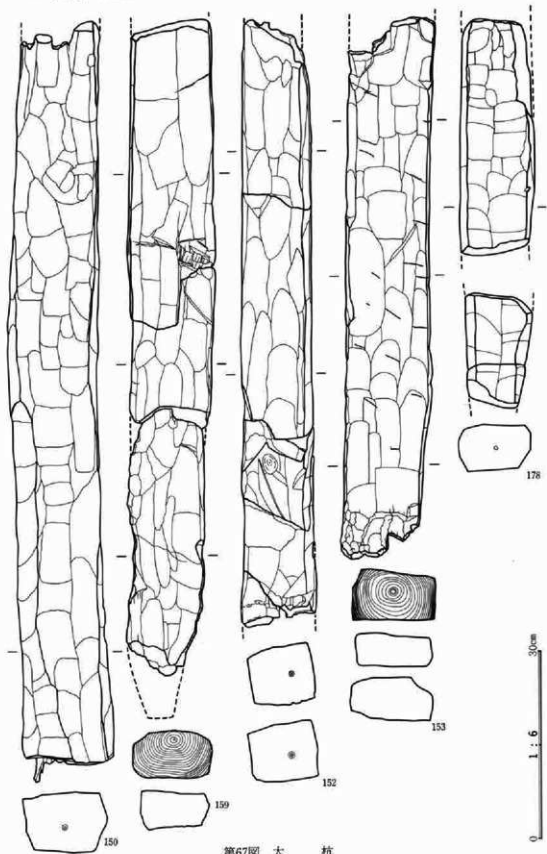


第65図 太 杭

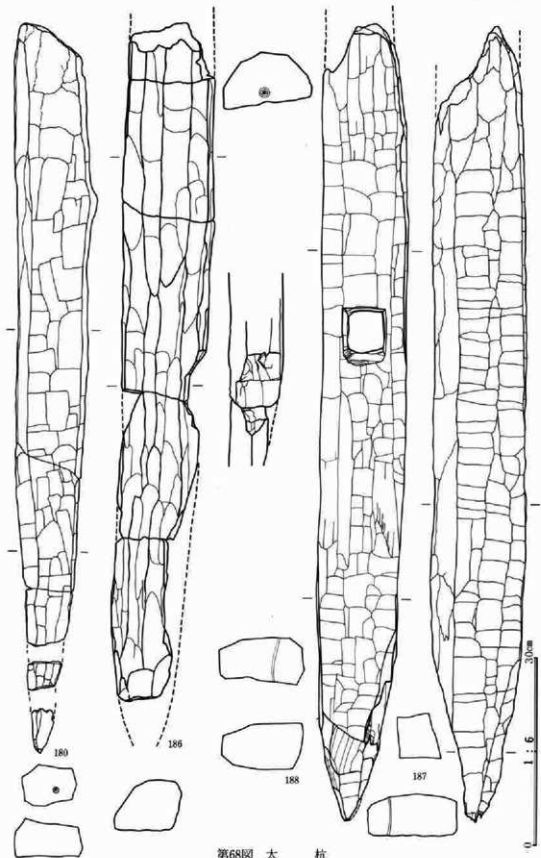


第66図 太杭

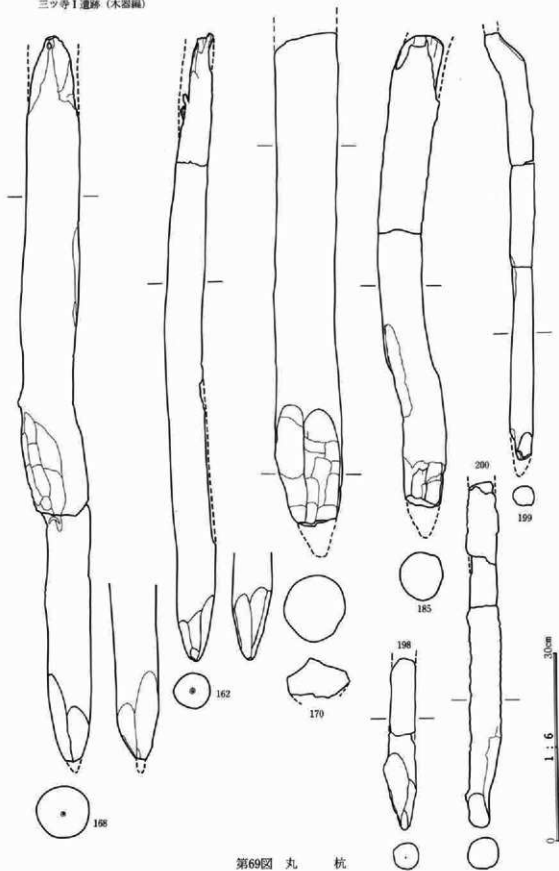
0 1:6 30cm



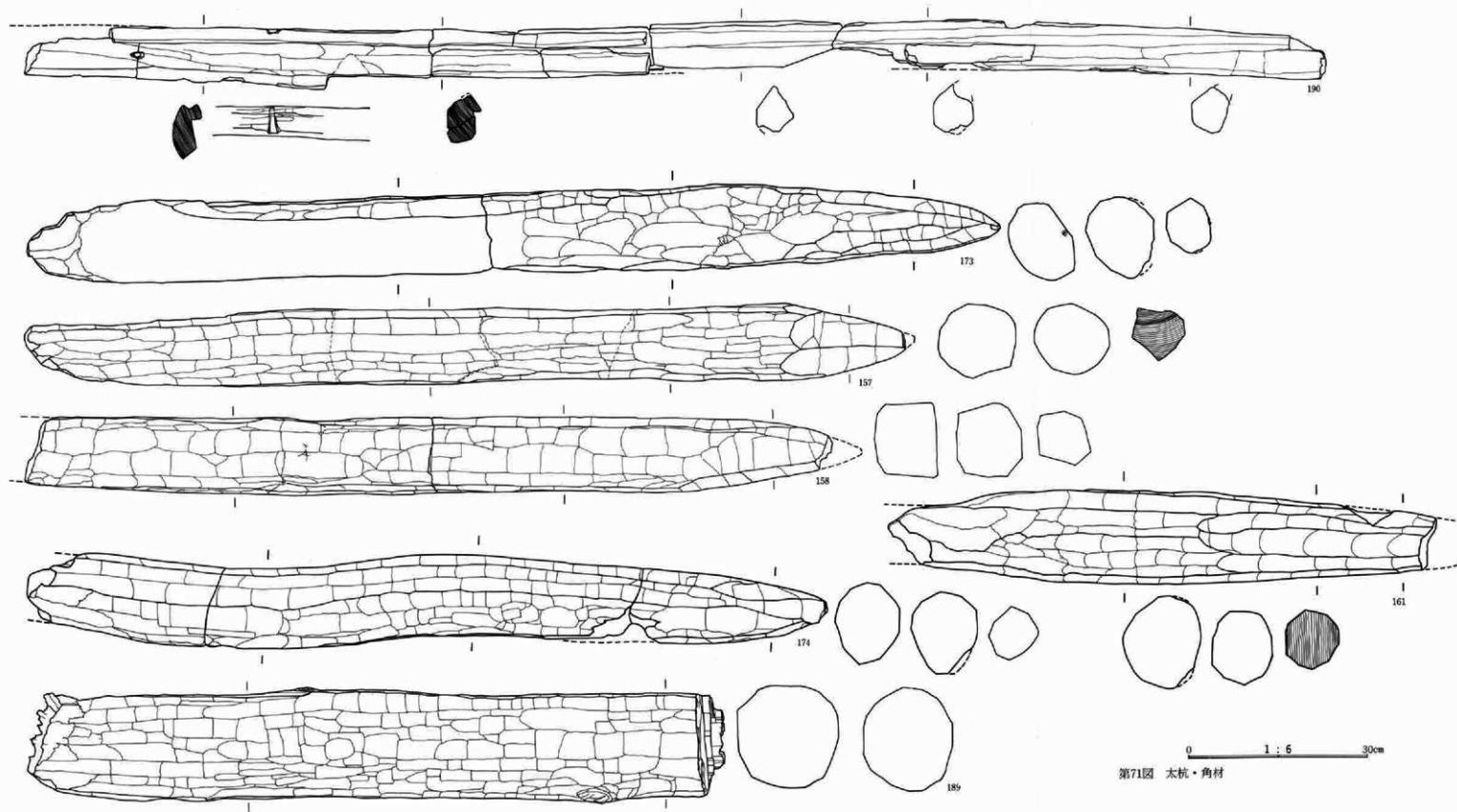
第67図 太 杭



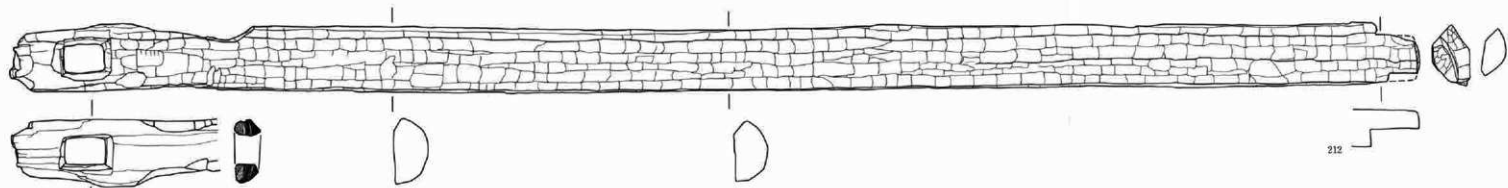
第68図 太 杭



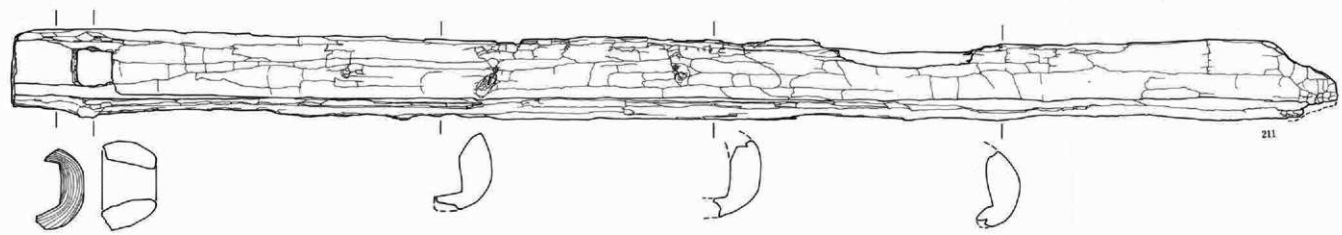
第69図 丸 杭



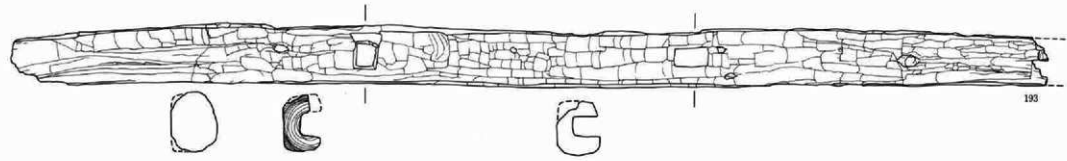
第71圖 木杭・角材



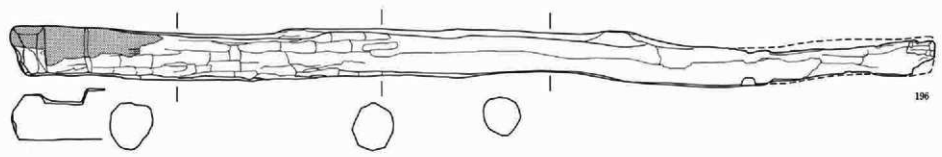
212



211



193

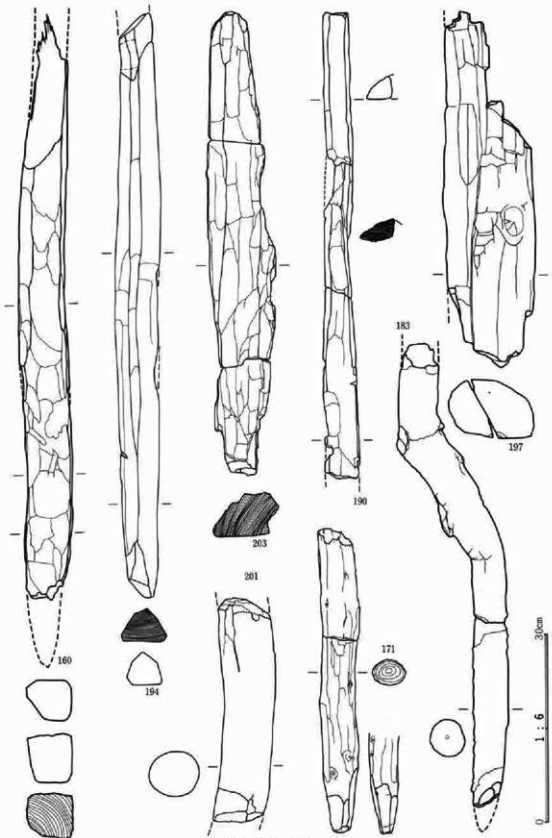


196

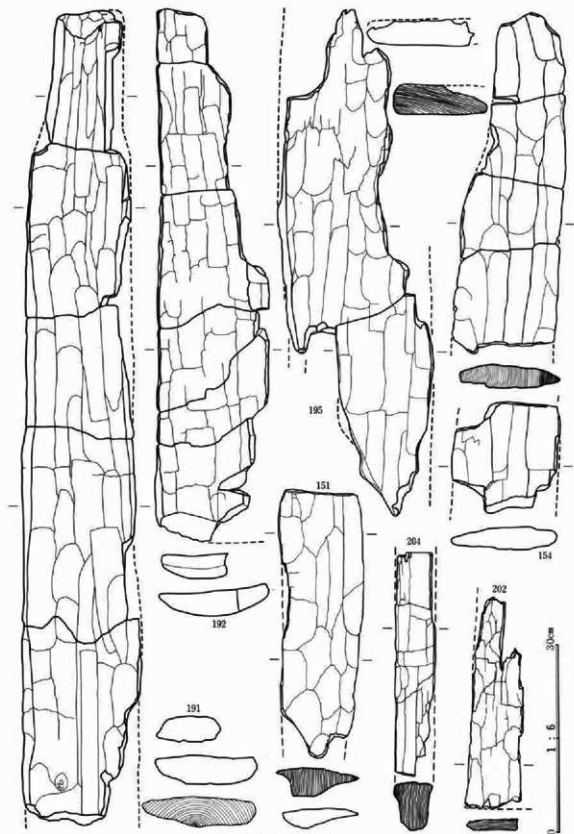
植物系の付着部分

0 1 : 10 50cm

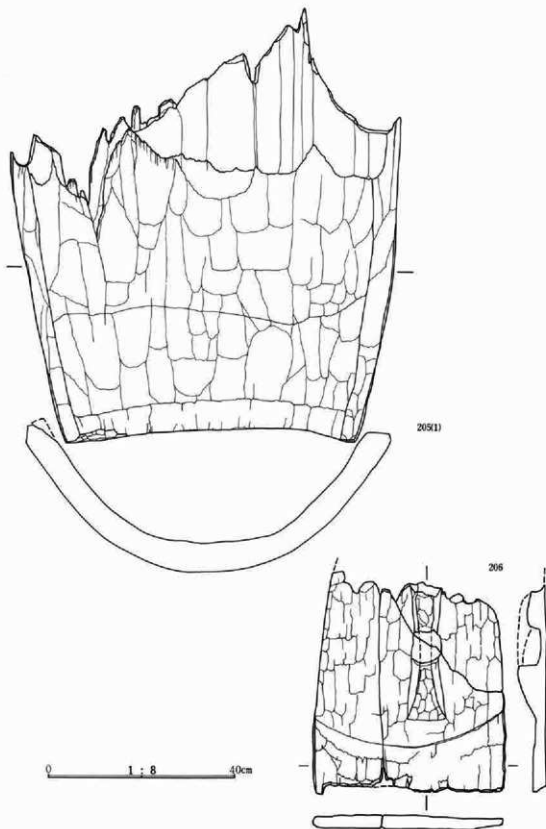
第72図 種・建築部材



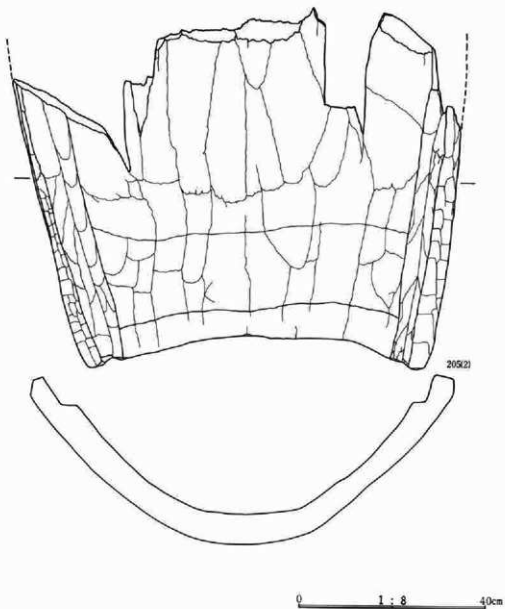
第70図 角杭・丸杭・枝杭



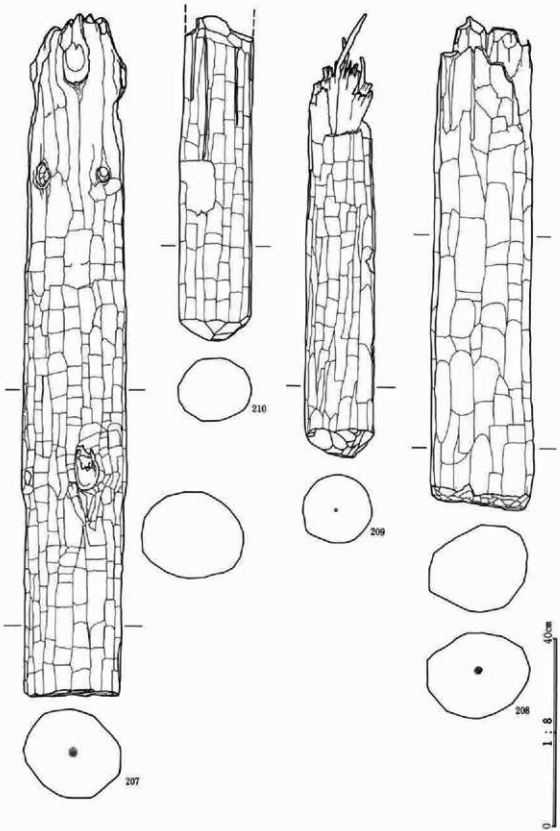
第73図 厚板



第74図 井戸杓・把手付板



第75図 井戸杓



第76図 橘脚

第7表 三ツ寺I遺跡木製品観察表
南 濠(1区西側道)

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
1	長柄 鏝	92.1×4.3×3.4	板目、カンバ	鏝身を欠損、刃先は約6cm快れこんだ二股をなし、側面の痕跡から鉄刃先を着装、柄は丸く削り出し、握り部を持つ。	14
2	ナスビ形着柄鋸	56.3×12.5×1.8	板目、カンバ	略完、着柄部上端を欠損、身の長さ48cm、幅12cm、刃縁は舌状、断面両刃。	15
3	ナスビ形着柄鋸	49.1×[9.0]×2.5	板目、カンバ	略完、身の右側面と着柄部上端を欠損、身の長さ34cm、幅10cm、細身、刃縁は舌状、断面は截断状、やや厚みあり。	15
4	木 刀 形	32.3×2.6×1.6	板目、カンバ	刀身の残存、細身の角材から断面楕円形の木刀状に削り出す、削りによる種、鑄の表現あり。	25
5	横 槌	27.0×5.7×5.0	芯持、カシ	略完、握り部の先端を欠損、身は円形に削り出され中程に触打痕あり、下端面は平滑に削り出され使用痕ない。	17
6	丸 木 弓	60.3×2.2×2.1	芯持、メギ	弓幹は全体に丸く削り出す、引は一面からやや平らに削りこむ。	23
7	棒状加工品	15.0×2.9×2.6 7.5	芯持、モミジ	中央部を欠損し2点に分かれる。直幹の有芯材を丸く削り出し、両端に削り出しによる算盤状のふくらみを持つ。	16
8	丸 木 弓	44.0×2.0×1.5	2分割、イスガヤ	両端部を欠損、丸木の半身はさけたものか。	25
9	厚 板	35.0×9.6×4.1	板目、ケヤキ	4面とも密なケズリ、断面四角形。	38
10	ナスビ形着柄鋸	44.5×10.5×1.7	板目、カンバ	略完、着柄部上端を欠損、身の長さ31cm、幅11cm、刃縁は舌状、断面両刃、着柄部の上端寄りには紐絞りを残す。	15
11	梶 棒 状	17.6×4.0×4.0	芯持、モミ	上半部残存、頭部丸く削り取り。	21
12	丸 杭	104.5×5.1×4.5	芯持、カシ	下半部を欠損、頭部削り取り。	53
13	枝 杭	45.3×3.5×3.6	芯持、コナラ	上半部を欠損、先端は片側からの削り出し。	59
14	枝 杭	103.5×3.1×2.6	芯持、カシ	両端部を欠損。	54
15	枝 杭	35.8、19.5×2.2×2.0	芯持、コクスギ	上半部を欠損、先端は片側からの削り出し。	59
16	枝 杭	23.5、8.5×1.2×1.4	芯持、ヤブムラサキ	樹皮を残して先端に片側からの削り出し。	59
17	角 材	24.5×2.7×2.5	コナラ	両端部を欠損、断面四角形。	46
18	木 片	10.8×15.0×1.9	板目、カンバ属	木端材か、表面両縁に削りあり。	63
19	板 材	69.0×2.5×0.8	板目、モミ	下端側を欠損、割材からの削り出し。	39

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
20	枝 杭	89.0× 5.0× 3.0	芯持、エゴノキ	先端に面取り、遺存状態が悪く未掲載	
21	枝 杭	227.0× 4.2× 4.0	芯持、ツバキ	No20と同じ。	
22	枝 杭	77.0× 4.0× 4.0	芯持、カシ	No20と同じ。	
23	丸 木 弓	60.0× 2.5× 2.1	芯持、イヌガヤ	引は両側から削りこみ、明瞭な段を持った弦かけ部を作り出している。弓幹は全体を丸く削り出し、張寄りが少し細くなる。弓腹には棒樋が貫通し、引近くで3mm、中央部は10mmを測る。	22
24	丸 木 弓	53.6× 2.6× 2.4	芯持、イヌガヤ	引は両側から削りこみ、明瞭な段を持った弦かけ部を作り出している。弓幹は、背側のみ密に削り、断面円形、引寄りは少し細くなる弓腹には幅6～10mmの棒樋が貫通する。全体に黒漆を塗付し、樹皮を細帯にして巻きつけている。	22
25	枝 杭	35.8× 2.8× 2.5	芯持、クヌギ	下部を欠損、頭部に削り引きと思われるほぼ平行する線条痕あり。	60

南 濠 (1区東側道)

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
26	丸 杭	115.0× 5.0× 5.0	芯持、モミ	両端部欠損、中央部に削り痕あり。	53
27	長 柄 鋸	95.5×4.2,15.5×1.5	板目、クヌギ	鋸身の両側を欠損するほか、ほぼ完存、身は長さ約36cm、幅15.5cmとやや広い、刃先は舌状に調整、刃先を着装か、柄は方柱状に削り出され、握り部を持つ。	14
28	ナスビ形着柄鋸	41.8× 12.2× 1.9	板目、カンバ	略完、着柄部上端を欠損、身の長さ32cm、幅12cm、刃縁は「U」の字形、断面両刃。	15
29	枝 杭	62.1× 2.5× 2.3	芯持、ヤナギ	4点に折れ、両端を欠損。	54
30	う す 板	36.9× 3.9× 0.2 36.0× 3.9× 0.1	板目、モミ	No32と同一個体か、2点あり、角材から剝離したものか。	45
31	枝 杭	58.2,14.6×3.8×3.3	芯持、サワシバ	一部接合不可、先端4面削り。	54
32	う す 板	34.5× 3.8× 0.4	板目、モミ		45
33	二 又 鋸	23.0× 15.1× 2.7	板目、クヌギ	着柄部と一方の歯を欠損、身の裏面は平坦、表面は中央に横を持つ、歯は断面方形で現存長9.5cm、左右非対称。	16
34	削 抜 き 盆	33.5× 24.0× 7.0	板目、トチノキ	略完、2分割の芯雲り材から削り出す。表面は平滑で浅くくぼむ、裏側はX状の脚が削り出しで付く。	19

三ツ寺I遺跡(木器類)

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
35	丸木弓	54.8×φ2.0	芯持、イヌガヤ	須は両側から削り出し弦かけ部を作り出している。弓幹は丸木を用いているが、弦近くを残して一面側を平坦に削り出し、表面を作る。	23
36	角材	21.6×6.1×2.6	板目、モミ	両端部欠損、左側面に圧痕あり。	39
37	角枕	24.5×6.7×3.8	芯持、クリ	先端部のみ残存。	62
38	枝枕	41.5×φ2.0	芯持、モミ	上半部を欠損、先端6面削り。	59
39	枝枕	36.6×φ2.4	芯持、モミ	両端部を欠損、先端片側から削りを集中。	59
40	枝枕	41.0×φ3.6	芯持、ヤナギ	頭部欠損、又木を使用し、先端片側から削り中央部に2.0×1.5cmの竹穴あり。上端に紐圧痕あり。	57
41	枝枕	19.4×2.4×2.9	芯持、ヤナギ	両端部を欠損、先端片側から削り、樹皮あり。	59
42	枝枕	8.8×φ2.6	芯持、モミシ属	頭部のみ残存、6面削り。	56
43	枝枕	8.1×3.4×2.3	芯持、エゴノキ	先端部のみ残存、先端両側から削り。	59
44	枝枕	5.7×3.2×1.5	芯持、アワブキ	先端部のみ残存。	59
45	棒状加工品	28.7×φ1.8	割材、モミ	削り出し棒、端部は平坦に調整され、上3cmの位置にアクリ痕あり。	21
46	角材	11.6×4.0×2.8	芯持、クリ	両端を欠損、丸木から削り出す。	63
47	角材	20.4×3.6×2.2	板目、モミ	上端を欠損、表面中程に幅1.5cmの圧痕あり。	63
48	角材	27.0×3.4×1.9	板目、モミ	略完、断面方形に削り出す。側面に圧痕あり。	46
49	枝枕	11.4×2.2×2.0	芯持、双子葉1種	両端部を欠損、先端片側からの削り。	59
50	木片	8.6×4.2×1.0	板目、ケヤキ	削り屑か、全体に磨滅する。	44
51	角材	4.5×10.3×4.1	割材、サワラ	完存、全体に削りを施す。	46
52	角材	8.7×6.5×4.2	割材、ヒノキ	上端面削り、全体楕円の断面形、枕の頭部か。	46
53	有蓋クサビ形	13.1×1.9×2.2	割材、ケヤキ	左側面と下端部を欠損。	28
54	横槌	4.0×2.7×4.5	割材、ケヤキ	握り部の一部のみ、丁寧な削り成形。	18

北濠(3区西側道)

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
55	下駄	25.5×9.1×1.8	板目、ヤナギ	上下両端を欠損、割材からの削り出し、全体は楕丸の長方形を呈する。前歯の幅6.3cm、高さ1.2cm、後歯の幅6cm、高さ1.8cm、鼻緒孔は割抜き、孔の位置から左足用か。	45

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
56	丸木弓	38.1× ϕ 2.0 11.5	芯持、イヌギヤ	両側を残し、中央部付近を欠損。本側は両側から削り出し弦かけ部を作り出す。矢頭は弓幹より細身に削るのみで明瞭な弦かけ部はない。弓幹は一面側を削り出し表裏を作る。	23
57	棒状加工品	21.8× 3.2× 2.6	芯持、ケヤキ	丸木削り出し棒、上端は面取りされ、紐かけらしい小溝が全周する。	21
58	横 槌	39.0× 4.2× 4.4	割材、コナラ?	割材削り出し、握り部の一部を欠損するのみ全体に細身、平行する密な削りが全周する。中央近くに敲打痕。	18
59	板 材	16.5× 5.8× 1.4	楳目、カンバ属	隅丸長方形、扁平、裏面に紐痕あり。	44
60	ナスビ形磨柄杓	6.7× 6.0× 1.7	楳目、カンバ属	上下を欠損する着柄部の一部。	
61	木 刀 形	69.6× 4.5× 2.3	楳目、モミ	刀身部の一部を欠損、全体は直線的で反り身がない。刀身は横側面に削りを集中させ、厚さを調整するとともに溝を表現したものか、柄は全長14cm、厚さ1.8cmと薄く削る。柄尻は緩やかな弧を描き、内側に切りこみを持つ。	26
62	角 材	44.4× 3.5× 3.2	楳目、モミ	上半側を欠損、下端は出納状に調整。	46
63	角 材	24.8× 5.6× 2.9	楳目、クリ	端部やや丸く面取り。	39
64	枝 杭	32.5, 12.5×3.2×3.0	芯持、エゴノキ	2点接合不可、先端2面削り、枝払い痕あり。	59
65	朝 抜 き 盆	33.2× 13.5× 1.5	楳目、クリ	表裏平滑に削り抜く、浅鉢の形跡か、裏面にボタン状の突起があり、脚を表現する。	19
66	角 材	23.2× 6.0× 4.3	楳目、クリ	端部面取り。	39
67	角 材	10.9× 6.9× 4.4	楳目、コナラ	側面からL字形の切込みを持つ、端部面取り組合せ材の一部か。	43
68	ク サ ビ 形	13.2× 9.9× 7.2	楳目、ケヤキ	上端面は欠損か、下端斜面に強いツブレあり。	39
69	板 材	11.9× 9.7× 2.5	楳目、クリ	上端面取り。	44
70	枝 杭	25.8× 4.0× 4.3	芯持、クヌギ	両端部欠損。	59
71	横 槌	10.1× 5.2× 3.7	割材、ケヤキ	握り部の一部。	18
72	枝 杭	16.3× 3.1× 2.5	芯持、カシ	両端部欠損。	59
73	板 材	70.6× 14.7× 3.2	楳目、モミ	下端が尖る矢根状か、6×5cmの穴あり。裏面にヤリゴナの削り痕多く残る。	38
74	太 杭	15.6× 12.8× 10.2	芯持、クリ	カンナ状工具で丸く削り出す。	37
75	角 材	15.5× 6.3× 4.0	楳目、クヌギ	上下両端面にL字形の切りこみを持つ、組合せ材の一部か。	42
76	枝 杭	17.0× 3.0× 2.2	芯持、カシ	両端部欠損、先端片側からの削り。	59

三ツ寺1遺跡(木器編)

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
77	有孔角材	34.0×3.9×1.6	板目、モミ	上半部を欠損、端部から約10cm離れて4～7cmの間隔で斜め方向に穿孔された小孔あり。	21
78	紡織具	39.8×5.8×1.4	柾目、サワラ?	盆の転用、上下両端寄りにV字状の刻みを入れる。刻みの間は長さ約27cmを測る。	16
79	面取り加工品	15.7×13.7×8.7	芯持、カンバ属	幹の又の部分を利用して、3面に粗い削りを施して面取りする、作業台か。	39
80	半截杭	18.0×[15.0]×9.3	半截、シオジ?	芯去りの半截した材に幅広いな削りを施す。	36
81	丸杭	35.3×5.2×4.3	芯持、カシ	上半部欠損、先端4面削り。	54
82	角杭	42.0×7.4×5.4	4分割、クスギ	上半部欠損、先端に削りを集中させる。	62

北濠(3区西側道)

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
83	丸杭	205.0×φ4.8	芯持 カシ	頭部欠損、直幹、先端6面の削り、樹皮を残す。	52
84	桶状	147.4×10.6×2.8	板目 ヤマザクラ	4分割材の芯側を削り抜き、高さ約3cmの立ち上がりを作る。先端三角状、裏面やや丸く削り出し、先端寄りに一段削りこみあり。	31
85	丸杭	221.3×φ5.0	芯持 カシ	完存、先端6面削り、頭部面取り。	52
86	丸杭	157.5×φ5.0	芯持 モミ	完存、先端2面削り、ツブシあり、頭部敲打によるツブレ、中央部削り集中し紐直あり。	52
87	角材	88.4×8.0×3.7	板目 ハリギリ	上半部欠損、全体に削りを施し、下端はやや細身に削り出す。	41
88	杖杭	50.2×φ2.6	芯持 ヤナギ	頭部面取り、全体に削りあり。	56
89	角材	24.3×2.6×2.3	板目 モミ	中央部に焼けこげあり。	39
90	角材	100.2×6.6×1.5	板目	表面全体に密な削りを施す、端部うすい。	41
91	有孔板材	23.1×6.0×0.4	板目 モミ	上下両端を欠損、径5.2の小孔が約2cm間隔で並列し、7～8cmの間隔で4段にあく。	30
92	建築材	85.0×18.1×2.6	柾目 クリ	完存、全体に手押削りを施した板、上端から中位まで厚さ一定するが下端にむけて薄い、中央側面に間口14cm、奥行7cmの刻みあり。	30
93	板材	39.9×7.5×1.7	板目 モミ	全体に削りを施し、均一の厚さに成形、上端寄りに推定3cm角の枘穴あり、側面に縦圧痕。	38
94	丸杭	42.4×φ4.8	芯持 カシ	頭部面取り、側面にアタリ痕。	56
95	削材	35.6×9.0×3.8	柾目 クリ	端部削り、上端焼けこげあり。	37

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
96	角材	31.4×3.3×3.3	4分割 カシ	完存、端部削り、上端に焼けこげあり。	39
97	割材	28.9×9.0×4.0	2分割 クリ	分割面に若干の削り。	37
98	枝杭	48.0×φ3.9	芯持 エゴノキ	先端両面削り。	57
99	枝杭	73.8×φ3.0	芯持 カシ	両端部を欠損、植物葉(ヨシ科)付着。	54
100	木刀形	50.6×3.6×1.7	板目 モミ	刃先側がネジ切れる、刀身は直で刃側に削りによる表現あり、柄は刀身と区別されず、わずかに厚く、削りが密である、端部面取り。	24
101	角材	25.7×6.7×4.2	板目 ケヤキ	両端部欠損。	38
102	角杭	17.5×5.8×4.8	4分割 クリ	先端部のみ。	62
103	木片	19.9×5.3×1.5	板目 クリ	表裏に粗い削り。	44
104	ナスビ形着柄杓	12.3×3.8×1.5	板目 カンパノ属	身の左側面の破片、厚めの様子がうかがえる。	14
105	枝杭	44.3×φ2.7	芯持 カシ	頭部側を欠損。	57
106	割抜き盆	22.0×6.7×3.5	板目 クリ	側縁部の断片、内面平滑、裏面削り痕を残す鉢状のものか。	19
107	枝杭	12.3×φ2.0	芯持 ガマズミ	両端部を欠損、全体削り出し。	57
108	枝杭	14.8×φ3.6	芯持 アツブキ	頭部のみ、山形に面取り。	56
109	枝杭	20.4×φ2.0	芯持 ミズキ	先端部片側からの削り。	57
110	枝杭	15.5×φ2.9	芯持 ヤナギ	先端部片側からの削り、樹皮あり。	57
111	枝杭	20.8×φ2.5	芯持 ツバキ	側面に2条の削り。	57
112	枝杭	42.0×φ2.4	芯持 クリ	先端部3面削り、枝払い痕あり。	61
113	ナスビ形着柄杓	45.4×10.7×1.5	板目 カンパ	着柄部と刃縁を欠損、身の現存長37cm、幅11cm、全体に磨減する。	15
114	盆	3.6×6.4×2.5	板目 ケヤキ	薄板からの削り出し、平安時代の流入か。	45
115	角材	51.7×11.5×4.6	板目 ヤマザクラ	左側面にL形の切りこみがあり柄穴の可能性もある。下端面は平滑、組合せ材か。	38
116	桶底板	17.3×6.1×0.7	板目 ヒノキ	径18cmの曲物、桶の底板、両縁に皮トジあり。	45

北 濠 (3 区東側道)

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
117	椀	15.5×8.6×6.1 137.5	2分割 クリ	半割材の芯側から削り抜き、両側に立ち上がりを作る。内面浅いU字形、外面丸く削り出し、破れ口部分に一段深く削りこむ、組合せ上の蓋所か。	32

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
118	桶 側板	41.9× 7.7× 0.8	柾目 ヒノキ	平安時代のもの、2枚の側板をカバ度でとじる。1枚の側板は長さ34cm、幅7.5cm	45
119	横 槌	31.0× 6.4× 5.3	芯持 ツバキ	略完 丸木からの削り出し、上下両端も平滑に削る、身の中央に全周して敲打痕	18
120	丸 木 弓	73.8× 1.6× 1.1	芯持 イヌガヤ	完存、柄は両側から削り出し弦かけ部を作るうち一方は端部平滑で弦かけ部の表現はない、弓幹は半身を削り出し表裏を作る。	24
121	丸 枕	42.5× 6.0×	芯持 ヤマグワ	頭部欠損、先端5面削り	55
122	丸 枕	50.9× 6.2× 4.7	芯持 エゾノキ	完存、両端面取り	55
123	丸 枕	48.4× 7.9× 6.9	芯持 カシ	頭部欠損、先端8面削り、樹皮あり	55
124	丸 枕	23.8× 5.9× 5.6	芯持 クヌギ	頭部欠損、先端3面削り、樹皮あり	54
125	丸 枕	61.7× 8.1× 7.8	芯持 カシ	頭部欠損、先端8面削り、樹皮あり	55
126	枝 枕	12.9× 2.8× 3.1	割木 クヌギ	先端のみ残存、4面削り	62
127	枝 枕	23.6× 2.0× 1.4	割木 サワラ	完存、4面とも削り、紐疔痕あり	60
128	枝 枕	17.1× 1.4× 1.0	割木 モミ	No127と同タイプ	60
129	枝 枕	18.0× 3.5× 2.8	芯持 エノキ?	完存、両端部2面削り	56
130	枝 枕	9.2× 3.4× 3.2	芯持 ヤナギ	先端のみ残存	61
131	枝 枕	28.8× φ5.2×	芯持 サルナシ	頭部山形に削り取り	56
132	角 枕	19.7× 7.0× 5.0	芯持 コナラ、カシワ	4面の削り出し	62
133	角 材	63.3× 8.5× 5.2	割木 タリ	両端部欠損	37
134	割 材	20.6× 6.0× 3.2	4分割 クリ	木皮側に粗削り、下端面取り	39
135	枝 枕	19.3× φ4.2×	芯持 コナラ	先端片側からの削り、樹皮あり	57
136	枝 枕	39.6× φ4.3×	芯持 ケヤキ	先端3面削り	57
137	枝 枕	29.3× φ2.1×	芯持 クヌギ	先端片側からの削り	57
138	枝 枕	13.4× φ2.7×	芯持 ウコギ	先端片側からの削り	57
139	ク サ ビ 形	19.0× 5.4× 2.4	3分割 コナラ	略完、表面は平坦に削り出すが裏面は分割時のまま、上端厚く敲打あり、下端三角形でクサビ状の製品か	48
140	枝 枕	30.2× φ2.9×	芯持 アズキナシ	先端部片側からの削り	61
141	又 鑿	19.4× 10.2× 3.1	柾目 ケヤキ	鑿身の半分が残存、刃先は二股に分かれ、身の部分とほぼ同じ厚さを持つ、全体に厚みがあり、身も短いことから鏃の可能性もある	16

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
142	うす板	18.4×1.9×0.3	板目 モミ	残片	45
143	角材	16.3×1.5×0.5	割木 モミ	角材の一部が剥離	47
144	角材	15.1×2.8×1.5	板目 モミ	4面を削り出し	63
145	枝杭	15.1×φ2.8×	芯持 ヤナギ	先端3面削り、樹皮あり	57
146	枝杭	12.2×φ2.6×	芯持 エゴノキ	先端3面削り、樹皮あり	57
147	枝杭	13.6×φ2.0×	芯持 イヌガヤ	芯持ち丸木からの削り出し	57
148	枝杭	13.4×φ2.4×	芯持 ヤナギ	先端片側からの削り	61
149	枝杭	33.5×φ3.5×	芯持 ケヤキ	先端4面削り、樹皮あり	61

北 濠（3区東側道 井堰）

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
150	角杭	117.5×13.2×8.5	芯持 クリ	頭部側を欠損、丸木から断面長方形に削り出す。全体に4～6cm幅のチョウナ削り板を残す	67
151	厚板	42.5×13.1×4.5	板目 ハリギリ	ミカン削りによる分割材、断面紡錘形、表面に幅広い削り、裏面分割に若干の調整程度	73
152	角杭	96.5×10.9×9.0	芯持 モミジ	頭部側を欠損、丸木から断面長方形に削り出す。削り面の幅4～6cm	67
153	角杭	85.9×13.2×8.0	芯持 クリ	頭部側を欠損、丸木から断面長方形に削り出す。下位薄くなり、端部にツブレあり	67
154	厚板	54.0×6.0×3.6 17.5×6.8×3.6	板目 ケヤキ	ミカン削りによる分割材、断面紡錘形、表裏両面とも幅広い削り、上端部舌状を呈す	73
155	太杭	72.5×13.5×11.5	芯持 モミジ	両端部を欠損、木本来のヨレを直すため全体に密な削りを施す	66
156	角杭	113.0×12.0×7.1	2分割 モミジ	頭部側を欠損、有芯の分割材を変形の紡錘状に削り出す。削り面は主にタテ方向に平行	66
157	太杭	147.2×12.2×12.6	2分割 クリ	頭部側は磨滅、有芯の分割材を丸く削り出す。削り面はタテ方向に平行、先端5面削り	71
158	角杭	134.0×12.5×10.5	芯持 モミジ	頭部側を欠損、上半分は断面長方形に、下半分は丸く削り出す	71
159	角杭	104.0×13.2×6.1	芯持 クリ	頭部側を欠損、やや蛇行した丸木を断面長方	67

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
159	(前頁に続く)			形に削り出す、削りはやや不規則	67
160	角 杭	92.5×7.0×7.7	4分割 クリ	頭部側を欠損、4分割材から断面方形に削り出す	70
161	太 杭	91.5×15.4×13.0	分割 クリ	頭部側は磨減、3～4分割材の太い材から断面丸く削り出す、上下で削りの単位を異にし下位を総身に仕上げる	71
162	丸 杭	99.5×5.9×5.6	芯持 モミ	頭部側を欠損、先端に7面削り	69
163	太 杭	60.5×16.0×13.3	芯持 クリ	頭部側を欠損、幅広い削り面は先端まで平行、先端ツブレあり	66
164	太 杭	76.2×14.1×14.3	芯持 クリ	頭部側を欠損、№163と同タイプ、先端にツブレあり	66
165	太 杭	81.6×11.0×8.8	芯持 ナナカマド	頭部側を欠損、丸木からの削り出し、幅広い削り面はやや蛇行する	66
166	角 杭	75.5×12.9×9.3	芯持 モミジ	両端部を欠損、丸木から断面台形状に削り出す、削りはやや不規則	64
167	太 杭	108.0×12.5×12.0	芯持 クスギ	両端部を欠損、丸木からの削り出し、削り面やや蛇行する	64
168	丸 杭	114.5×8.3×8.2	芯持 カシ	頭部側を欠損、又木を枝払いし直幹とし、樹皮を残して先端4面削り	69
169	太 杭	101.7×10.2×11.0	芯持 フサザクラ	頭部側は磨減、丸木から削り出す、削りは平行し、先端部単位を異にする	64
170	丸 杭	78.0×10.2×9.6	芯持 カシ	頭部側を欠損、樹皮を残し先端部削り	69
171	丸 杭	48.2×5.4×4.0	芯持 クスギ	頭部側を欠損、先端7面削り	70
172	太 杭	75.5×11.0×11.3	芯持 クスギ	頭部側を欠損、丸木に粗い削りを施す、先端8面削り	64
173	丸 杭	163.0×13.0×10.6	芯持 ケヤキ	頭部側を欠損、丸木の芯寄り削り出す、削りは不規則に下半部に集中し、上半部の大半は樹皮を残すか	71
174	太 杭	134.4×13.4×10.6	芯持 ブナ	頭部側を欠損、丸木から削り出す、削りは平行し、先端部やや粗い	71
175	太 杭	90.0×14.3×11.5	芯持 クスギ	頭部側を欠損、丸木から削り出す、先端寄りに削りを集中させ、№173と同様に上半部は樹皮を残すか	64
176	太 杭	113.5×13.2×10.6	芯持 クリ	頭部側を欠損、丸木から削り出す、上半部はクチ平行の規則的に、下半部は幅広い削り	65
177	太 杭	39.5×12.0×10.0	芯持 ケヤキ	頭部側を欠損、丸木から削り出す、平行する稜を消しながら先端部を細く削り出す	65

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
178	角 枕	37.5×11.4×7.3 18.5× ×	芯持 モミジ	一部接合不可、丸木から断面長方形に削り出す	67
179	太 枕	59.5×10.5×	芯持 エゾエノキ?	頭部側を欠損、丸木から削り出す、平行する線を消しながら先端部を細く削る	65
180	角 枕	98.0×10.9×5.2 4.5、7.0	芯持 モミジ	一部接合不可、丸木から断面長方形に削り出す	68
181	太 枕	111.7×12.0×12.5	芯持 ケヤキ	頭部側は磨滅、丸木から削り出す、先端近くまで平行する規則的な削り	65
182	太 枕	111.3×12.3×11.0 ×6.0×5.8	芯持 カヤ	頭部側を欠損、上半部樹皮を残して粗い削り、下半部上下方向からの削りこみで細く、丸く削り出す	65
183	丸 枕	73.0×φ5.5×	芯持 カシワ	頭部側を欠損、枝払いをし、樹皮を残して先端に削り	70
184	太 枕	78.0×10.2×8.6	芯持 フサザクラ	頭部側を欠損、丸木から削り出す、先端は平行する線を消して細く削りこむ	65
185	丸 枕	74.5×6.8×7.6	芯持 カシワ	頭部側を欠損、樹皮を残して先端に削り	69
186	平 箆 枕	107.6×14.0×9.0	2分割 モミジ	有芯の2分割材を使用、表面には平行する密な削り、右側面に間口12cm、奥行き3cmの抉りこみあり	68
187	角 枕	125.0×14.5×7.3	板目 カヤ	ミカン削りの辺材を断面長方形に削り出す、裏面は分割面を残すが、表面は上下二方向から削る。№188とは隣接箇所であり、同一原木から分割か	68
188	角 枕	126.3×13.7×7.0	板目 カヤ	ミカン削りの辺材を断面長方形に削り出す、中央部に6cm角の穴があく	68
189	太 枕	117.0×17.3×16.8	芯持 カヤ	頭部側を欠損、全体に密なチョウノ削りを施す、下端面は二方向から削りこむ	71
190	角 材	217.4×10.0×4.7 73.8×5.4×3.6	板目 クリ	両端部を欠損、2点あり接合不可、全体は角柱状、左側縁に断面方形の立ち上がりあり、約20cm離れて交差方向の2つの縦孔あり、横木状の組合せ材か	70 71
191	厚 板	129.5×18.0×4.5	板目 ハリギリ	有芯の2分割材を削り出す、上端は密な削りを施し幅を狭くする	73
192	厚 板	84.5×17.5×3.9	板目 トチノキ	ミカン削りの芯取り材を長方形に削り出す、厚さはほぼ一定するが、下端部は断面舌状	73
193	建築部材	277.3×16.0×12.3	割材 ヤマザクラ又はイヌザクラ	両端部を欠損、直幹の丸木を断面隅丸方形に削り出し、一方に平坦面を作り出す、その中に約90cm離れて方形の穴2ヶ所がある、平坦面の一部にはアタリ痕も目立つ	72

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
194	角杭	93.8×7.1×5.8	割材 クリ	頭部側を欠損、ミカン割りの分割材を断面三角形～菱五角形に削り出す	70
195	建築部材	79.8×15.0×4.6	板目 ニガキ	両端部を欠損、全体に密な削りを施す	73
196	建築部材	248.0×12.5×11.3	芯持 コナラ	略定、直幹の丸木を枝払いして断面円形に削り出す。板元側に削りを集中させ平坦面を作る。両端部はやや丸みを残して面取りし、下端寄りには約4cm削りこんだ入り組み筋があり、ヨシ科の植物茎が厚さ2cm程度に付着し接地面の保護材の役目をする	72
197	半截杭	56.5×9.5×9.3	2分割 イヌザクラ	遺存状態悪く、両端部を欠損、有芯の2分割材を一部削る	70
198	枝杭	27.9×φ4.0×	芯持 クワ	頭部側を欠損、樹皮を残して先端部削り	69
199	枝杭	68.5×φ4.9×	芯持 エゴノキ	頭部側を欠損、樹皮を残して先端部削り	69
200	枝杭	54.6×φ4.9×	芯持 カシワ?	頭部側を欠損、樹皮を残して先端部削り	69
201	丸杭	35.6×8.0×7.2	芯持 マルバアオダモ	両端部を欠損	70
202	板材	33.5×8.1×1.7	柾目 カヤ	下端部平滑	73
203	角材	73.2×10.5×6.7	分割 クリ	3～4分割を断面不整形に削り出す	70
204	角材	35.5×6.1×7.6	分割 クリ	ミカン割りの部材を削り出す、直交方向に紐圧痕2条あり	73

2号井戸

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
205 (1)	井戸枠	90.0×76.0×6.0	2分割 スギ	(2)と同一の原木、径1mを越す原木を半分削し、木皮側を残して木芯側から削り抜く全体の厚さは一定し、各端部は平滑に仕上げられる (2)とは分割面をもって合せ口とするが、底部から上方に向かって外反形状となる、断面は底部が丸みのある紡錘形、上方で円形に近いと推定される	74
205 (2)	井戸枠	78.0×94.0×6.0	2分割 スギ	木取り、加工は(1)と同様、合せ口の部分は、(1)が平滑に削り出したのに対して、内側を厚さ3cm、奥行6cmで明確な段を持つ様に削りこみ、受け口状としている	75
206	把手付板	48.0×40.2×3.0	柾目 ケヤキ	把手の位置から60×50cmの長方形に復元する不端は平滑で隅に紐かけ様の突起あり、把手は刺抜き式で重量感あり、表面のみに直径約72cmに復元される円形のスレ帯がある	74

橋 脚

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
207	橋脚	144.5×21.9×18.3	芯持 カヤ	面部側は磨滅、丸木から削り出し、全面に上下方向をかえての密な削り、下端面はほぼ平滑だが二方向からの切りこみ痕を残す	76
208	橋脚	104.2×22.0×18.2	芯持 クリ	面部側は磨滅、丸木からの削り出し、全面に刃幅5cmを越す削りが施される。下端面はほぼ平滑に調整	76
209	橋脚	93.9×φ14.8×	芯持 クリ	面部側を欠損、丸木からの削り出し、下端面はV形の削りこみ	76
210	橋脚	68.6×15.5×13.2	芯持 クリ	面部側を欠損、丸木からの削り出し	76
211	柱	354.3×23.6×9.0	2分割 アカマツ	略完 分割の有芯側を使用、芯側から約10cm削りこみ、平坦面と立ち上がりを作り出す。上端部は平坦にし、寄った位置に8cm角の枿穴があり、上端側に向かってツブれている、下端部は舌状に削り出されている、建築材の用途か	72
212	柱	377.1×19.5×9.4	2分割 アカメギシワ	完存、分割の芯取り側を使用、分割面は粗く削る程度で木皮側に輪状の削りを集中させる。上端には10×8cmの枿穴と内側に向かって斜めに入る削りがある。下端部は木皮側を残して厚さ4cm、奥行12cmの削りこみがあり、さしこみ式になるのか、上端、下端寄りに各々アタリ痕あり	72

西 濠 (2区)

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
213	ナスビ形着枿痕	24.0×8.8×1.9	板目 クリ	着枿部を欠損、方縁は舌状、断面厚く截断状全体に磨滅する	14
214	ナスビ形着枿痕	10.5×4.8×2.1	板目 ヤブデマリ	着枿部の上端のみ	14
215	板材	13.3×7.9×1.2	板目 クリ		44
216	板材	34.9×13.0×1.7	板目 クリ	継ぎ目あり	35
217	厚板	38.8×14.3×3.5	板目 チドリノキ	上半部を欠損	35
218	角材	45.5×7.3×1.9	板目	両端部を欠損	62
219	角材	17.8×8.5×3.5	板目 ナナカマド	両端部を欠損	38
220	角枕	46.4×7.5×4.0	板目 クリ	先端を欠損	62
221	クサビ形	12.5×10.7×6.1	分割 クリ	完存、側面に圧痕、上端面は敲打でツブレ	39

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
222	木 刀 形	10.0× 2.9× 1.0 12.0× 2.5× 0.9	板目 モミ	柄部分と刀身の一部、接合不可、柄は少し細く削り、長さ約6cm	25
223	木 刀 形	38.3× 2.5× 0.7	板目 モミ	刃先を欠損、柄は長さ約8cm、断面長方形に削る、刀身は刃側を斜めに削り出す	26
224	木 刀 形	28.1× 2.7× 1.4	板目 モミ	完存、細い割木を断面長方形に削り出す、柄部わずかに薄い、刃先斜めに削り出す	63
225	木 刀 形	82.0× 3.1× 1.5	板目 モミ	柄部を欠損、分割面を利用した断面三角、全体に船身で反りが無い、刃先部に削りを施す柄は削りにより表現か	24
226	棒状加工品	11.9× 3.5× 2.6	板目 モミ	下半部を欠損、割木からの削り出し、頭部丸く面取りされ、幅1cmの圧痕あり	21
227	棒状加工品	30.0× 2.5× 2.4	板目 モミ	両端部を欠損、割木からの削り出し、らせん状に廻る紐圧痕あり	21
228	把 手	11.8× φ2.6×	割材 モミ	完存、中央に朝抜き穴あり	16
229	角 材	60.2× 5.1× 2.0	板目 モミ	上端側を欠損、端部寄りの表面に溝状の紐圧痕、裏面の側面にかけて長方形の浅い切りこみあり	41
230	角 材	48.6× 4.6× 2.1 30.6× 4.5× 1.7	板目 クヌギ	両端部を欠損、一部接合不可、両側面に2乃至3個を一組とする紐かけ線の刻みが交互にある、裏面平坦、断面溝状	41
231	有孔板材	10.6× 1.4× 0.7	板目 モミ	断片、8.30cm離れて小孔あり	30
232	加工木片	9.0× 1.0× 0.5	板目 モミ	棒状木片の先端を鋭利に削る、完存	63
233	加工木片	25.4× 1.5× 0.6	板目 モミ	断面台形、側面に明瞭な削り痕	63
234	有頭クサビ形	7.9× 7.9× 2.5	板目 エゾノキ?	頭部の断片、丁寧な削りを施す、厚みあり	27
235	有頭クサビ形	16.1× 6.7× 3.4	板目 クリ	輪部の端部を欠損、頭部の下端平面にツブレ	27
236	有頭クサビ形	15.8× 7.7× 3.2	板目 ケヤキ	頭部から輪部上端を残存、輪部は右寄り	27
237	有頭クサビ形	12.1× 5.6× 1.9	板目 クリ	扁平な頭部の断片、磨滅している	28
238	有頭クサビ形	17.7× 6.3× 3.7	板目 カシワ	頭部と輪部に段差があり、輪部に面のツブレ	27
239	不 明	9.5× 13.3× 4.4	板目 ケヤキ	240と同形、端部のみ厚みあり	20
240	不 明	22.7× 6.5× 2.9	板目 クリ	全体は、端部にむけ「ハ」の字状に開く「U」形を呈する、断面は縁が面取りされた長方形で、両端にむけて薄くなる、内側は蛇行し、現存の間口で約12cmを測る	20
241	板 材	62.5× 8.5× 1.2	板目 クリ	両端部を欠損	39
242	板 材	13.8× 9.8× 1.7	板目 ケヤキ	両端部を欠損	44

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
243	有孔板材	21.0×9.8×1.6	板目 モミ	下半部を欠損、上端近くに孔間7cmで小孔あり、左側面中程に紐かけ様の刻みもある	30
244	板材	28.5×7.5×1.1	板目 モミ	上端に丸みを持つ、表裏は幅広い削り、№245と同一個体か	44
245	板材	9.6×2.0×0.7	板目 モミ	断片、端部は丸く削る	44
246	木片	6.1×12.5×1.3	板目 モミ	完存	44
247	板材	14.7×6.9×1.8	板目 ケヤキ	裏面の下端寄りに浅い段を持つ刻みあり	63
248	板材	19.8, 13.2×5.9×1.3	板目 モミ	中央部接合不可、下端部ヘラ状	39
249	板材	18.0×6.3×2.0	板目 モミ	両端部欠損 表面と両側面とに圧痕あり	46
250	板材	81.8×9.3×1.7	板目 モミ	3点に分かれ接合不可	39
251	加工板	25.0×7.6×0.9	板目 モミ	中央に厚みを残して両側を薄く削りこんだ板 上端は斜めに削り落とし、下端は縁近くまで大きく切りこんだものか	44
252	有孔板材	70.0×6.5×0.7	板目 モミ	3点あり接合不可、一列3個の小孔が6~13cmの間隔で6段残存	30
253	厚板	31.0×14.6×6.2	2分割 クリ	有芯分割材を削り出す、端部は丸みを持つ	38
254	厚板	27.3×11.6×2.9	板目 サイカチ	ミカン割材を削り出す、表面に摩滅布か	35
255	割杭	38.2×12.1×5.5	2分割 ケンボナシ	芯より分割材を断面溝鋸型に削り出す、厚板の可能性もある	36
256	厚板	33.0×11.6×3.2	板目 クリ	上半部を欠損、割材から削り出す	35
257	木刀形	18.2×3.3×1.2	板目 モミ	刀身の刃先のみ、厚みあり	25
258	加工木片	11.0×5.0×1.4	板目 クリ	断片	29
259	加工木片	19.8×2.5×2.0	板目 ケヤキ	左側面に浅いU字形の擦痕	29
260	加工木片	8.2×3.3×1.9	板目 ケヤキ	断片	29
261	有孔板材	9.6×6.0×1.0	板目 ケヤキ	上端部は丸く削られる、中央部に1.5cm角の小孔あり、鋸の一部か	29
262	丸木弓	18.6×2.1×1.3	芯持 イヌガヤ	弦を含む断片、弦は両側から削りこみ弦かけ部を作る、弓幹は芯近くまで半身を削る	23
263	有孔板材	14.0×6.0×1.0	板目 ケヤキ	約8cmの間隔で径1.5cmの円孔があく、他の有孔板材より孔が大きく別の用途であろう	30
264	加工木片	8.0×2.5×1.7	板目 サイカチ	径3cm以上の円孔を持つ加工品の断片	29
265	兼の一部か	8.3×7.3×1.5	板目 カシ	又兼か鋸の歯の1本か、厚手の板から削り出す	29

三ツ寺I遺跡(木器編)

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
266	角材	11.5×9.6×2.0	板目 ケヤキ	上端の両側を丸く削る、加工品の一部	29
267	着柄籠	30.0×9.0×1.0 着柄軸長8cm、軸幅4cm	板目 オンパ属	着柄部と刃縁に欠損あり、身の現存長21cm、幅9cmと細身、裏面は平滑で刃縁にむけて薄くなる、着柄軸はやや斜めにつく	16
268	有孔板材	74.2×8.9×0.6	板目 モミ	一部接合不可、孔間約2cm、1列4個の小孔が7cm間隔で10段残存、表面に1乃至2本の組圧痕があり、約半数の小孔に2本を一組とするフジズルが組として残る	30
269	板状加工品	23.3×12.3×1.1	板目 モミ	木口方向から「L」形に切りこみ十字をなす、大小不規則な細孔が4個あり、右側部木口面も一段削る、組合せ式の板か	29
270	明抜き盆	26.0×13.5×2.3	板目 クリ	2分割材を芯側から削抜く、内外面とも平滑に削られ、端部は把手様に継工される	19
271	板材	34.0×21.0×2.0	板目 クリ	各端部は平滑に面取りされる、上端寄りにL状の柄穴があり、その上に横一直線で段を持つ程度のズレあり、組合せ板か	38
272	盆	23.2×5.6×1.5	板目	2分割材を芯側から削抜く	19
273	漆塗り板 (翻板か)	8.7×5.0×1.5 6.8	板目	裏面を除く3面に漆が塗られる、両端部には漆で固められた「ハ」の字形の組痕あり、組孔は貫通する	29
274	丸枕	33.8×7.4×7.1	芯持 カシ	完存、頭部2面、先端4面の削り	56
275	枝枕	27.0×3.4×3.3	芯持 ウラゲンコウカエデ	頭部側を欠損、先端2面削り	61
276	枝枕	27.8×φ3.7×	芯持 ツバキ	頭部側を欠損、先端1面削り	61
277	割枕	15.0×φ5.2×	割材 クリ	完存、割木から丸く削り出す	49
278	枝枕	14.0×φ3.3×	芯持 エノキ?	先端部のみ	61
279	枝枕	12.1×φ2.4×	芯持 エノキ	先端部のみ	61
280	枝枕	13.7×φ2.2×	芯持 エノキ	先端部のみ	61
281	枝枕	12.4×φ4.2×	芯持 ウラゲンコウカエデ	先端部のみ、1面にツブレあり	61
282	枝枕	54.0×3.3×2.7	芯持 ガマズミ	完存、先端部は長い削り、頭部山形に面取り	55
283	枝枕	66.9×φ4.7×	芯持 エゾエノキ	頭部を欠損、樹皮を残して先端に6面削り	55
284	枝枕	33.0×φ6.4×	芯持 エノキ	先端部にツブレあり	54
285	丸枕	42.0×φ7.5×	芯持 クヌギ	先端は全周して6面の削り	54
286	角材	12.0×2.5×1.7	板目 モミ	両端部を欠損、右側面にスレあり	46
287	角材	9.5×3.6×1.4	板目 クリ	上端部のみ残存	47

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
288	角材	18.0×2.8×1.6	板目 クヌギ		47
289	加工木片	9.1×5.1×2.2	板目 サワラ?	完存、表に4.5×3cm、深さ1cmの割抜き、右側面に浅いU形のスレ	43
290	角材	13.6×4.0×2.3	板目 クリ	両端部を欠損	47
291	角材	25.5×3.9×2.3	板目 サイカチ	両端部を欠損	47
292	角材	18.0×3.8×2.6	板目 ムクロジ	両端部を欠損、下端部に焼け焦げ	46
293	角材	22.3×4.7×2.5	板目 クリ	上端に紐かけ様の「ハ」の字形刻みあり	48
294	角材	30.7×5.1×2.8	板目 ケヤキ	上端部を欠損	48
295	角材	22.1×7.0×4.1	板目 クリ	上端部は焼け焦げ、下端面にツブレ	48
296	クサビ形	15.0×6.0×1.9	板目 カヤ	完存、下端面にツブレ	51
297	木片	26.1×5.2×2.6	板目 モミ	太杖の表皮近くが剥離したものか	46
298	角材	36.4×6.1×3.1	板目 カヤ	完存か、裏面中央部と下端面にツブレ	48
299	角材	58.3×4.0×3.1	板目 クリ	両端部を欠損	39
300	木皮加工品	16.2×16.3×0.4	樹皮 樹種未鑑定	変五角形、裏面は調整程度だが表は樹皮の丸みを活かして幅広の削り、周縁も丁寧に調整、周縁の内側約1cmの位置で不定間隔に8個の小孔がほぼ楕円形を作って通る	29
301	クサビ形	16.8×6.5×3.0	板目 クリ	完存	48
302	クサビ形	9.4×6.4×2.7	板目 ニワトコ	上端面に敲打によるツブレ	51
303	クサビ形	12.9×6.5×2.9	3分割 カンバ属	下端山形に面取り、裏面は未調整	51
304	クサビ形	12.0×6.4×3.7	板目 ケンボナシ	下端は平坦に面取り	51
305	角材	12.3×6.3×2.3	板目 クリ	側面にL形の削りこみを持つ	43
306	角材	16.8×6.6×3.6	板目 クリ	側面にL形の削りこみを持つ、下端部は三角状に薄く、先端に径12cm位の半円のスレあり	43
307	分割材	17.3×10.0×3.3	2分割 モモ?	両端部を欠損、裏面は分割時の状態に近い	38
308	厚板	33.3×13.0×3.0	板目 ケヤキ	分割材から断面長方形に削り出す、表面は平坦だが、裏面はやや不定、側面、端部は平坦だが、上端側にむけて厚くなる	35
309	分割材	50.0×12.3×4.5	2~3分割 ヤマザクラ	両端部を欠損、全体にクサリが入り、磨滅している	37
310	太杖	50.5×13.5×9.5	分割 クリ	両端部を欠損、3~4分割材から粗く削り出す、柱材か	36

三ツ寺I遺跡(木器編)

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
311	木 刀 形	64.6× 3.0× 0.8	柾目 樹種未鑑定	縁の一部を欠損、全体はほぼ直線状、刀身は割け面を利用し、刃側にわずかな削りを施す、柄部は長さ10cm、内側に切り込みを持つ	26
312	木 刀 形	72.4× 3.2× 1.0	板目 樹種未鑑定	完存 全体は直線状、刀身は刃側に削りを密に施す、切先は三角状で鋭利、柄部は長さ12cmで刀身より細身、内側に弧状に削りこむ	26
313	木 刀 形	24.6× 3.3× 0.5	板目 樹種未鑑定	切先近くのみ残存、全体は薄手、幅広、切先は丸みを持つ	25
314	紡 織 具 か	67.0× 3.0× 2.3	芯持 樹種未鑑定	完存 やや弧状の角材で中央部に2.2×1.4cmの孔があり、両端に径0.5~0.8cmの円孔が各2個あく	16
315	ナスビ形着柄剣	33.2× 13.0× 1.7	柾目 カンバ	基部と刃先を欠損、基部から刃先に向かって楕円に開く、刃先は平らで断面が三角状に削り出される	15
316	把 手	23.9× 9.8× 1.8	柾目 クリ	完存、握り部には長さ5cmの三角状、刺抜き穴がある、軸中程に3×2cmの筋穴があり、握り部との間に圧痕、軸先端もつぶれる	16
317	長 柄 鋸	85.6× 14.0× 2.8	板目 モミ	完存、全体に粗い削り、柄は長さ45cmで把手はない、身は反りがなく先端にむかって薄くなる、刃先の着装はなく、刃部は片減りする	15
318	木 刀 形	64.6× 3.4× 1.4	板目 モミ	略完、刀身部の刃側全体と柄の一部に欠損あり、全体は柄部に厚みを残し、切先にむけて細身、薄手に削り出す、柄は切りこみあり	26
319	木 刀 形	46.4× 2.6× 0.8	板目 モミ	略完 刀身部の中程と切先に欠損あり、全体は細身、薄手に削り出す、刀身の削りはやや密、柄部は長さ8cm、内側に切りこみあり	26
320	木 刀 形 (刺 形 品)	45.4× 2.5× 0.5	板目 ヒノキ	刀身部のみ残存、全体は細身に薄手、切先は削りが集中し山形に尖る	26
321	木 刀 形	36.5× 2.5× 1.5	板目 モミ	刀身部のみ、割木から切先にむかって直線的に削り出す、刃側に削りを施し鑊も表現か	24
322	木 刀 形	43.3× 2.5× 1.2	板目 モミ	刀身部中程から欠損、刀身は分割面を残し、柄はやや細身に削り出す	24
323	木 刀 形	55.0× 3.5× 2.3	柾目 クリ	柄から刀身中程まで、刀身は前面長方形に削り出す、柄は長さ約12cm、幅2.4cm、厚さ1cmと細い、刀身から柄にかけて少し蛇行する	26
324	木 刀 形	88.4× 5.9× 1.3	板目 モミ	刀身の一部を欠損、全体に大振り、刀身は直線的で削りで鑊を表現、柄は長さ17cm、刀身とは両側から削りを入れて表現している	24
325	丸 木 弓	83.2× 1.1× 1.9	芯持 カヤ	下端部を欠損、弓幹は芯近くまで半身を削り出す、引は明瞭な段を持って削り出す、長さ2cmで弦の圧痕を残す	24

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
326	丸 木 弓	83.0× 2.8× 2.4	芯持 イヌガヤ	両端部を欠損、全体に細い削りを施し、断面凸レンズ状にし表裏を作る	24
327	平 弓	39.7× 2.0× 0.9	板目 ムラサキシキブ	下半部欠損、一部接合不可、弦は段を持つ削り出し、弓幹は半身を削りこみ断面レンズ状とする	25
328	丸 木 弓	29.8× 2.3× 2.4	芯持 テドリノキ	頸付近のみ残存、弦は両面から舌状に削りこむ	25
329	丸 木 弓	45.9× 2.8× 2.3	芯持 エノキ	上半部招欠損 幹は被払いとともに細かな削る、弦は先端にむけ丸く削り出す	23
330	丸 木 弓	36.7× 2.3× 1.8	芯持 ムラサキシキブ	両弦側を欠損、幹は細かな削りを施し、幅8cm位の背溝が入る、黒漆付着か	25
331	朝 抜 き 盆	47.1× 15.5× 1.8	板目 アカシデかイヌシデ	中央部分のみ残存、片面に長さ6cmの角状突起が1本以上あり、薄く深みがある	19
332	不 明	17.4× 6.5× 1.5	板目 スギ	11×8cmの両木口に断面の丸い軸がつく軸径2cm、下端右側にサクラの皮を巻いた2cm角の切片が埋め込まれ、楕に小孔あり	29
333	不 明	31.9× 2.8× 2.3	板目 カヤ	木刀形の柄部分か、全体は断面方形の角柱状下端から12cm上の左右の腰に上下二方向からの浅いV形の刻みが9個つく	21
334	た た き 棒	26.3× 2.3× 1.0	板目 モミ	下端部を欠損、細い削り出し棒の片面に9個の山形が刻み出される。山形の頂部は丸みをおびるが敷き痕とは認めがたい	21
335	不 明	20.9× 6.3× 2.2	板目 クリ	完存、全体に磨滅、片面の中央に幅約2cmの貫通孔あり、左右非対称で、一方の端部は丸みを持ち、残る一方は三角状をなす	20
336	不 明	13.5× 5.5× 2.2	板目 クリ	下半部のみ残存、240と同形か、厚みがあり全体に丁寧な削りを施す	20
337	厚 板	25.0× 23.6× 3.7	板目 ケヤキ	上端を欠損、約4cmの均一の厚さに削り調整された三角形の板、裏面に刀痕が乱雑に残る。下端部は平坦でヤヤツブレあり	30
338	丸 枕	54.4× 7.5× 6.1	芯持 サイカチ?	全体に削りを施す、先端にツブレ	55
339	板 材	41.8× 5.7× 1.2	板目 カヤ	太枕の表皮が剥離したものか	62
340	丸 枕	63.5× 6.0× 5.0	芯持 カシ	完存、樹皮を残して両端部に削り	54
341	丸 枕	156.0× 4.7× 3.2	芯持 ヤナギ		52
342	丸 枕	102.0× 4.5× 4.2	芯持 モミ	完存 樹皮を残して両端部に削り	53
343	丸 枕	44.4× 6.8× 4.9	2分割 カシワ	有芯分割材の半身を削り出す	55

三ツ寺1遺跡(木器編)

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
344	分割 枕	217.8×5.1×3.6	3分割 カシ		52
345	丸 枕	79.6×6.2×3.7	2分割 カシ	有芯分割材の芯側を削る	54
346	丸 枕	148.3×φ6.4×	芯持 クヌギ	略完 横皮を残し、先端と頭部に削り	52
347	丸 枕	208.0×4.3×3.1	芯持 ハンノキ	頭部欠損	52
348	角 枕	39.8×6.7×5.2	板目 クリ	両端部を欠損	62
349	分割 枕	227.0×8.2×4.3	3分割 クリ	略完、分割材からの削り出し、上端より56cmのところに削りによる段あり	52
350	丸 枕	111.7×3.7×2.2	芯持 ハンノキ	両端部を欠損	53
351	丸 枕	89.6×6.7×5.0	芯持	先端にツブレあり	54
352	角 材	47.5×2.3×2.5	板目 モミ	両端部は出納を推定されるが欠損	41
353	丸 枕	85.0×4.4×3.7	芯持 サワシバ	先端に削り集中し、ツブレあり	54
354	クサビ形	41.8×9.2×4.4	板目 クリ	完存、断面は長い三角形、頭部の平坦面にツブレ、裏面上端から13cmのところに段がある	34
355	太 枕	122.5×10.9×7.2	割材 クリ	先端部を欠損、分割材から断面隅丸長方形に削り出す、頭部は平坦、裏面上半部は少し抉り状の削りこみ	36
356	厚 板	57.3×12.0×3.0	板目 クリ	略完、上端に長さ4cmの突起が2個つく、下端は半円に近い形状、裏面に不規則な帯状のツブレあり	33
357	丸 枕	63.4×6.5×3.5	芯持 ヤナギ	頭部を欠損、先端から25cmと29cmの位置に幅3mmの紐かけ様の溝あり、芯を残し裏面から削りこみ角材様とする	62
358	角 材	29.9×7.3×4.7	割材 クリ	3～4分割材を断面方形に削り出す	38
359	板 材	29.7×8.8×1.5	板目 モミ		38
360	角 材	22.3×3.4×1.5	板目 ケンボナシ	断面方形、上端は平帯に面取り	46
361	角 材	30.3×4.5×2.7	板目 モミ	表裏両面に圧痕あり	47
362	角 材	22.8×7.8×2.5	板目 クリ		39
363	角 材	109.8×5.6×2.1	板目 モミ	断面薄錐形、側面に圧痕あり	40
346	クサビ形	20.4×4.6×1.6	板目 クリ	完存、両端にツブレ、表裏に圧痕あり	46
365	角 材	96.0×6.5×3.1	板目 モミ	上端に焼け焦げ、断面薄錐形、下端から2.5cmのところに幅1cmの溝状刻みがある。中央部に圧痕あり	40

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
366	丸 枕	117.3× 3.5× 2.8	芯持 エゴノキ	樹皮を残して上半部と先端に削り	53
367	板 材	62.0× 3.2× 0.6	板目 ヒノキ	一方の側を欠損、均一の厚さを持ち、両端に長さ1cm程の突起があり、つねねに直線的に並ぶ2個の小孔と紐ずれがある	16
368	加 工 板	9.7× 9.4× 2.3	板目 クリ	完存、表面の中央に4mm幅の溝状刻みあり	43
369	分 割 枕	67.7× 9.8× 5.5	2分割 トチノキ	両面にツブレあり	37
370	角 材	38.5× 3.3× 2.0	板目 モミ	上端には深い削りが入り段を持つ、両端欠損	41
371	加 工 板	13.5× 8.5× 1.7	板目 ケヤキ	完存、長方形に面取りされた板	43
372	角 材	36.0× 3.6× 1.5	板目 クリ	先端と側面にツブレ、表裏に紐圧痕あり	47
373	角 材	22.3× 4.0× 1.7	板目 モミ		47
374	角 材	14.7× 4.2× 1.0	板目 クリ	表裏に圧痕あり	46
375	角 材	11.9× 9.0× 4.7	板目 クリ	完存、断面五角で厚い、両端は細かな面取り	50
376	角 材	50.2× 3.8× 1.3	板目 モミ	裏面に紐圧痕あり	41
377	角 材	21.4× 6.6× 1.4	板目 クリ	上端面切りおとし	62
378	角 材	44.3× 2.7× 2.3	板目 モミ	全体に面取り	47
379	有 孔 板 材	35.8× 7.0× 0.9	板目 モミ	両端を欠損、一列3cm間隔で2個の小孔が残る。これが12cm間隔で4段あり	30
380	刀 子 の 柄	9.5× 2.3× 2.7	板目 イタヤカエデ	割木の削り棒の一方に幅3mm、深さ12mmの溝が切られる	29
381	有 孔 板 材	18.5× 1.8× 1.0	板目 モミ	断片、4個の小孔は3～4cm間隔、表裏と側面に圧痕あり	30
382	槌	5.4× 5.5× 4.8	板目 ケンボナシ	握り部分の断片	18
383	ク サ ビ 形	15.2× 5.0× 3.7	芯持 ケヤキ	略完、両端にツブレ、下位に挽け焦げあり	49
384	杖 枕	37.0× 5.7× 2.0	芯持 カシ	表皮側が剥離したもの	58
385	角 材	28.8× 5.3× 2.4	板目 クリ	圧痕あり	62
386	横 槌	31.0× 4.6× 3.7	板目 ヤブダマリ	略完、分割材からの削り出し、全体に細身で両端平滑に面取り、握り部の径1.5cm、身の中央部に約10cmの幅で敲打痕	17
387	有 頭 ク サ ビ 形	27.1× 8.4× 2.4 4.2× 2.8	板目 ケヤキ	略完、頭部から11cm下の軸に2×1cmの角孔がつく、釘穴が軸の中央を貫通する	27
388	有 頭 ク サ ビ 形	14.3× 7.5× 2.6	板目 ケヤキ	頭部のみ残存、軸部3.3×2.5cm	28
389	有 頭 ク サ ビ 形	14.3× 7.5× 2.6	板目 クリ	軸部下半を欠損、軸部3.8×2.7	28

三ツ寺I遺跡(木器編)

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
390	有頭クサビ形	19.0×2.4×1.6	柾目 クリ	略完、軸の先端を欠損、頭部は約5cmの隅丸方形、軸は先端に向けて薄くなり、頭部から8cm下に1.5×1.0cmの竹孔あり	28
391	有頭クサビ形	26.9×6.0×2.5 2.7×1.8	柾目 カンパ属	略完、No390と同形、頭部から12cm下に2×1cmの竹孔あり	28
392	有頭クサビ形	7.4×6.4×4.2	板目 クリ	頭部のみ残存	27
393	有頭クサビ形	5.8×5.2×1.8	柾目 クリ	頭部の断片	27
394	クサビ形	14.8×5.2×2.7	板目 ケヤキ	先端は片面からの削りおとし	49
395	有頭クサビ形	5.7×4.0×2.0	板目 ケンボナシ	軸の先端のみ	28
396	不明	14.0×8.4×3.0	新材 クスギ	略完 全体は粗く削り出す、表面は斜めに削られ、裏面の中央には2cmの段差を帯び、上端木口は丸く削られる。組合せ部材の一つ	42
397	クサビ形	16.1×5.5×3.5	新材 ケンボナシ	完存、上下両端は面取りされ、ツブレあり、断面三角で、稜の中央に長さ3.3cmの削りがある	42
398	長柄鋸	21.6×8.2×2.0	板目 カンパ	身の部分のみ、身の長さ23cm、幅19cmに復元され、先端は約11cm削りこまれた二股になる、身全体は刃先に向かって少し反る	16
399	有孔板材	7.7×4.2×0.4	板目	下半部を欠損、上端山形に面取りされた薄い板、中央に5mm角の小孔あり	29
400	クサビ形	8.7×8.7×3.6	板目 モミ	完存、上下両端は面取り	50
401	クサビ形	7.7×7.9×3.7	新材 エノキ?	完存、側面・端部にツブレあり	50
402	クサビ形	6.2×8.3×3.8	新材 エノキ	完存、芯持ち	50
403	クサビ形	10.5×5.8×2.6	柾目 ケヤキ	完存 下端面は斜めに削りおとし	50
404	クサビ形	11.6×7.5×3.6	柾目 クリ	完存、下端面は斜めに削りおとし	49
405	クサビ形	9.0×7.3×3.2	柾目 クリ	完存、断面三角、上端面ツブレあり	50
406	クサビ形	12.5×5.0×4.0	柾目 クリ	下端を欠損	49
407	クサビ形	8.8×7.7×2.8	板目 クリ	完存 断面三角形、ツブレあり	50
408	クサビ形	15.8×4.6×3.4	柾目 カヤ	完存、上下両端面は鋭利に削りおとし	49
409	クサビ形	11.0×5.4×3.2	柾目 カヤ	完存 断面三角形、上端面にツブレあり	51
410	クサビ形	12.8×11.0×3.7	柾目 ケヤキ	完存 断面菱形、上下両端面にツブレあり	50
411	クサビ形	10.9×5.4×1.6	板目 ケヤキ	完存、上下両端面にツブレあり	51
412	加工板	13.6×9.6×2.4	クリ	略完 No371と同形 表面に圧痕あり	43

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
413	板材	10.1×7.0×2.4	柾目 クリ	下半部を欠損、側縁から約4cmの深さまでL形に削りおとす	43
414	紡織具	34.0×4.0×1.0	板目	輪完、上下両端に深さ1cmのV形の刻みあり、中央部の断面はやや紡錘状	16
415	クサビ形	4.0×7.6×1.9	柾目 クリ	表面調整、下半部は折損	50
416	クサビ形	14.3×6.3×1.7	柾目 クリ	完存、先端は薄く削り出す	49
417	角材	9.0×7.7×5.0	板目 クリ	割材からの削り出し、端面は平坦	50
418				欠番	
419	把手	17.5×10.6×4.3	柾目 ケヤキ	完存、№455(屏)の把手か、握り部と軸とからなる。握り部は中心に指かけ用の割抜き穴があり、外縁を削り丸みを出している。軸はさしこみ式で全長8.1cm、握り部から4.5cmの位置に埋木が残る穴を持つ。膠材とは握り部の下端面のツブレの様子から、やや下向きにつけられたものか	42
420	枝杭	16.0×5.6×5.4	芯持 ニガキ?	先端部のみ残存	58
421	角材	10.2×4.6×3.0	板目 クリ	下端は面取りされツブレあり、上は両側面から削りこまれ段を持つ	42
422	枝杭	26.2×3.4×3.0	芯持 カシ	全体削り出し、頭部丸く面取り	56
423	枝杭	27.5×3.6×2.9	芯持 ヤナギ	樹皮を残す、頭部山形に面取り、ツブレあり	56
424	枝杭	20.5×2.2×1.9	芯持 クリ	樹皮を残し、先端に削り、ツブレあり	60
425	枝杭	18.7×2.5×2.2	芯持 ツバキ	樹皮を残し、先端に削り	61
426	枝杭	11.4×4.1×2.4	芯持 カシ		61
427	枝杭	18.7×3.7×3.2	芯持 カシ	両端部を欠損、全体に削り	60
428	枝杭	37.4×4.1×3.1	芯持 ハンノキ	先端にのみ削り	60
429	角材	50.2×3.7×1.3	板目 カヤ	両端部は欠損か、側縁はさけている、下端寄りにアタリ痕あり	24
430	太杭	22.5×4.8×5.2	芯持 モミ	太杭の表皮が剝離したもので、チョウナ削り	58
431	角材	12.7×6.0×7.0	板目 クリ	側面からL形に削りこむ、上端面削り	42
432	クサビ形	11.2×2.5×1.1	柾目 クリ	完存、断面三角	51
433	枝杭	27.4×4.0×4.1	芯持 カシ	頭部山形に周縁からの面取り	56
434	木片	14.7×4.7×2.8	柾目 カヤ	角材からハツリしたものか	63
435	枝杭	21.6×3.2×2.4	芯持 オヒョウニレ	樹皮を残して先端のみに削り	60

三ツ寺I遺跡(木器編)

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
436	枝 杭	25.2× 3.2× 3.0	芯持 アカマツ?	樹皮を残して先端に削り	58
437	枝 杭	14.2× 4.2× 4.5	芯持 チドリノキ	先端に削りとツブネあり、焼け焦げあり	58
438	枝 杭	17.0× 4.9× 4.5	芯持 カシ	樹皮を残して先端に削り、ツブネあり	58
439	枝 杭	20.0× φ2.0×	芯持 クヌギ	樹皮を残して先端に削り	60
440	枝 杭	26.0× 3.5× 3.0	芯持 クヌギ	樹皮を残して先端に削り	60
441	枝 杭	20.1× φ2.7×	芯持	樹皮を残して先端に削り	60
442	枝 杭	25.1× φ3.6×	芯持 チドリノキ	枝広い痕あり	60
443	枝 杭	28.1× 4.9× 4.3	芯持 ツバキ	枝広い痕あり	60
444	枝 杭	40.8× 4.6× 3.7	芯持 カシ	焼け焦げあり	58
445	枝 杭	14.7× 0.9× 0.8	板目 カヤ	割木からの削り出し、断面方形、先端尖る	63
446	枝 杭	14.7× 0.8× 0.8	板目 モミ	割木からの削り出し、断面三角、先端尖る	63
447	角 材	12.9× 2.2× 1.9	板目	右側面に約3cm間隔の紐かけ痕3ヶ所あり	21
448	ク サ ビ 形	11.6× 3.7× 2.5	板目 クリ	下端鋭利に削りおとし	51
449	角 材	26.2× 3.5× 1.7	板目 モミ	両端部を欠損	47
450	枝 杭	19.8× 5.1× 4.6	芯持 ツバキ	先端に8面の削り	58
451	割 杭	94.1× 5.8× 2.6	2分割	芯より分割材の先端二方向から山形の削り	55
452	枝 杭	122.1× 4.1× 3.1	芯持 ヤナギ	樹皮を残し先端にのみ削り	53
453	枝 杭	63.1× 4.2× 4.4	芯持 チドリノキ	全面削り出し	55
454	丸 杭	138.9× 6.7× 5.7	芯持 クリ	全面に削り、上半分は半削、アタリ、紐痕が多く残る	52
455	扉	156.0× 19.5× 5.0	板目 ケヤキ	把手側の半分程を欠損するが、軸寄りを残す表面両面、丁寧な手押削りで平滑に仕上げられている。裏面には上端から45cm、下端から42cmの箇所幅4～5cmの帯状隆起がある。上下の軸は各6cm、5cmの長さで断面不整形円形	31
456	丸 杭	73.8× 108× 7.3	芯持 オニグルミ	略光、上端は一方方向から平滑に面取り、下端は両方向から削り、出杵状にしたものか	37
457	半 截 杭	103.5× 17.8× 10.0	2分割 シオジタモ	有芯分割材の表皮側にチョウナ削りを施す、両端を欠損するが表面に圧痕あり	36
458	枝 杭	19.9× 4.2× 2.2	芯持 カシ	先端から12cmまで木芯近くまで抉りこむ	58
459	枝 杭	21.8× 3.9× 2.7	2分割 カシ	有芯分割材の先端にのみ削り	61

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
460	クサビ形	14.0×5.9×1.1	柾目 クリ	略完、端部斜めに削る、ツブレあり	48
461	クサビ形	12.4×4.5×1.3	板目 ケンボナシ		44
462	クサビ形	14.9×3.9×3.1	板目 モミ	完存 両端平滑に面取り、断面変三角形	48
463	クサビ形	13.4×4.0×2.3	板目 クリ	略完、端部は面取りされ、ツブレあり	51
464	クサビ形	6.9×3.7×1.9	板目 エノキ?	完存、両端面取りされ、上端にツブレあり	51
466	クサビ形	4.3×8.6×1.6	柾目 クリ	完存、上端面取りされ、ツブレあり	50
466	クサビ形	9.8×4.2×2.3	柾目 クリ	上端部のみ残存	51
467	角材	12.6×3.3×2.6	板目 クリ	割木から断面方形に削り出し、下端から11.4cmの位置に、奥行2.4cmのL形の削りこみ	42
468	クサビ形	4.1×8.5×4.0	柾目 サイカチ	4分割材を断面蒲鉾形に削る、両端にツブレ	50
469	クサビ形	8.8×4.8×1.9	柾目 クリ	略完、表裏両端削り、両端にツブレ	43
470	クサビ形	5.9×3.9×2.1	柾目 ケヤキ	完存、表裏両端削り、外端面取り	50
471	クサビ形	9.0×5.4×2.8	柾目 ケヤキ	完存、上下両端面にツブレあり	50
472	クサビ形	9.9×4.1×2.1	板目 クリ	下半部を欠損、断面三角、上端にアタリ	51
473	クサビ形	21.3×6.4×5.3	柾目 ケンボナシ	割木を削り出す、先端三角状に削り	58
474	クサビ形	15.2×3.4×2.0	板目 ヒノキ?	完存、両端を三角に削りおとす	51
475	クサビ形	11.5×5.3×3.8	柾目 ミズキ	割木を横円形に削り出す、下端にツブレあり	49
476	クサビ形	3.5×5.1×1.6	柾目 クリ	略完、表裏両端削り、上端面ツブレ	51
477	加工材	4.2×5.3×1.7	板目 ケンボナシ	端部のみ残存、端部に段を持って削り出す	44
478	板材	13.6×8.9×1.9	柾目 ケヤキ	下半部のみ、下端にツブレ、側面に抉りあり	43
479	クサビ形	11.1×4.0×2.0	板目 クリ	下半部を欠損、上端部にツブレあり	51
480	割杭	17.8×5.9×2.8	2～3分割 クリ	分割面にアタリあり	44
481	クサビ形	19.5×3.5×2.7	板目 ケヤキ	略完 割木からの削り出し	48
482	クサビ形	7.3×4.2×2.4	板目 クリ	断面三角、下端面にツブレあり	50
483	厚板	118.0×14.8×3.7	板目 クリ	略完、2分割材から芯側を裏面として断面長方形に削り出す 上端には開口6cm、長さ11cmの突起が2個つく、同裏面には約2cmの段差を持つ切りこみあり、下端は方形、平坦な面を持ち、裏面に溝様のほぼ平行する刃渡あり	33
484	クサビ形	5.9×3.6×1.4	柾目 クリ	先端部斜めに削りおとし、ツブレあり	50

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
485	厚板	116.7×18.9×3.3	板目 サイカチ	略完、2分割材から芯側を裏面として断面長方形に削り出す。上端には長さ18cmの突起がやや内傾してつく。下端は隅丸形状に削り出す	32
486	厚板	78.3×11.9×3.1	板目 イタヤカエデ	略完、分割材の芯側を削り、断面凸状にする両端は斜めに削り出す。下端1.8cmと上端より薄くなる	34
487	有蓋クサビ形	13.8×3.0×2.8	径目 クリ	柄孔を持つ軸の断片。孔は1×3cm	28
488	割杭	16.2×2.3×2.0	板目 クリ	割材からの削り出し	60
489	クサビ形	9.4×5.0×3.7	板目 モミ	完存、上端面取りツブレ、下端斜めに削り	51
490	クサビ形	9.4×4.6×1.6	径目 クリ	下半部を欠損	51
491	クサビ形	15.1×4.5×1.9	ケヤキ	両端部を欠損	51
492	クサビ形	7.0×3.6×1.7	径目 ケヤキ	完存、両端面にツブレあり	51
493	クサビ形	8.5×5.3×0.8	径目 カヤ	完存、薄手、上下両端にツブレあり	50
494	クサビ形	10.2×2.7×1.6	径目 カヤ	完存、表裏両端削りおとし	51
495	クサビ形	10.7×4.1×2.3	板目 クリ	完存 断面三角、下端面にツブレあり	51
496	枝杭	29.8×φ1.3×	径目 モミ	細い割木を削り出す	63
497	割杭	9.7×4.5×1.4	3分割 ムクジロ	両端部を欠損	44
498	有蓋クサビ形	13.0×2.2×2.7	径目 クリ	頭部の半分と軸下半分を欠損、頭部と軸とは表裏両面に段差を持つ	27
499	枝杭	9.2×2.3×1.3	径目 クスギ	端部の残片、両側に削りあり	60
500	角材	4.7×5.5×1.7	板目 ケヤキ	頭部の断片	51
501	角杭	58.7×6.5×2.9	板目 モミ	頭部を欠損、割木から断面長方形に削り出す	62
502	厚板	53.4×16.6×4.8	板目 ウリハダカエデ	上端を欠損、4分割材から断面長方形に削り出す。下端から18.3cmの位置に1.2cmの段差あり。さしこみ式板	35
503	厚板	41.9×9.5×2.8	径目 ケヤキ	上端を欠損、中央部分くぼむ、下端部はL形に削りこまれる。組合せ材か	35
504	ナスビ形着柄杓	21.0×4.5×1.0	径目 カンバ属	身の右側縁のみ	14
505	厚板	39.7×16.0×5.2	径目 クリ	下半部を欠損、4分割材から断面長台形に削り出す。中央部わずかにくぼむ。上端部にはL形に削りこまれる。組合せ材か	34
506	横植	20.0×5.1×4.4	芯持 カシ	丸木からの削り出し、握り部表現あり、身の	18

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
506	(前頁に続く)			中程、表裏2面から敲打痕あり	18
507	板 材	61.3×7.5×2.1	柎目 クリ	完存 ミカン割り材から断面長方形に削り出す。両端は削りおとし	34
508	槌	38.0×10.0×6.6	芯持 ヤマボウシ	略完、握り部を欠損、丸木から削り出す。端部は山形に面取り、身は中程に軽い敲打痕あり	18
509	丸 枕	92.3×8.8×7.7	芯持 ツリハダカエデ	上半部を欠損、全体に細かな削りを施し、先端は出物状でツブネあり	37
510	丸 枕	112.8×5.4×4.8	芯持 クヌギ	頭部を欠損、樹皮を残して先端に削り	37
511	厚 板	57.7×12.6×5.5	割材 モミ	上端を欠損、4分割材を断面台形に削り出す。下端面は斜めに削りおとし、表裏に唇状の圧痕あり	34
512	割 枕	65.0×8.3×2.7	柎目 クリ	一部接合不可、割材から削り出す。下端面はやや厚く、斜めに削りおとされる	37
513	板 材	42.6×9.4×1.8	柎目 クリ	両端部を欠損、割材から削り出す。芯側は薄く、上端にむけて幅が狭くなる	35
514	板 材	122.5×8.2×2.5	板目 モミ	割材からの削り出し、側面に割れがあり、倍近い幅の板か、表裏に不規則な圧痕あり	40
515	角 材	90.2×3.7×2.2	2分割 ヤマグワ	完存、有芯の分割材から断面方形に削り出す。側面は緩い弧を描く、両端寄りには細身になり端部面取り	41
516	角 材	77.8×6.5×2.0	2分割 イタナカエデ	有芯分割材からの削り出し、断面長方形へ漏針状、中央部やや厚く、端部は薄くなる。上端寄り両側面にV形の刻みあり	41
517	有孔板材	37.6×5.8×0.8	板目 モミ	両端部を欠損、1列3～5個の小孔が約9cmの間隔で5段分残る	30
518	有孔板材	19.7×4.0×0.8	板目 モミ	孔間3cmの小孔が1段あり	30
519	有孔板材	39.3×3.5×0.7	板目 モミ	孔間3cmの小孔が約9cmの間隔で4段分残る	30
520	有孔板材	12.3×5.2×0.7	板目 モミ	孔間1.5～3.6cmの小孔が約9cmの間隔で2段分残る	30
521	有孔板材	22.4×2.3×0.7	板目 モミ	断片、角孔1つあり	30
522	クサビ形	27.3×18.4×8.7	2分割 クリ	完存、芯去り分割材を削る。上端は平坦に削られるが段を残し、強い敲打によるツブネあり、下端は主に2方向から斜めに削り出す。裏面中程に横方向で幅6cm、段差2cmの削りこみがある。太枕の転用か	39
523	割 枕	33.0×14.2×8.6	分割 シオジ	両端を欠損、割材から削り出される	36

番号	器種名称	長さ×幅×厚さ×径	木取り・樹種	遺存状態・加工、形状の特徴について	図版
524	丸 枕	29.7× 5.5× 4.5	榎目 カシ	略完、割材から丸く削り出す、上端面は平坦 下位やや太く榿棒状のものか	39
525	横 楯	34.6× 6.0× 4.6	板目 クリ	略完、握り部を欠損、身中央に最大幅を持つ 先端には焼け焦げ、身の先端寄りに打痕	17
526	角 材	20.7× 6.2× 3.3	板目 クリ	裏面剥落、上半部欠損、下端面から12cmで段差 を持って削られる	42
527	割 枕	39.1× 2.7× 2.2	芯持 エゴノキ	両端は削りおとし	55
528	板 材	13.0× 5.9× 1.5	榎目 サイカチ	両端を欠損、端部片減りか	44
529	厚 板	41.6× 15.3× 6.6	割材 ハリギリ	有芯分割材を削り出す、芯側は平坦、表皮側 は中央を朝抜かれ楯状に立ち上がり、その先端 に長さ6cmの出柄がつく	33
530	楯 棒	38.5× 4.9× 4.5	芯持 カシ	略完、丸木から削り出す、両端部を山形に削り おとし、身中央に表裏からの敲打痕あり	17
531	板 材	46.5× 12.5× 2.4	板目 モミ	下半部を欠損、表裏に粗い削り	35
532	角 材	101.5× 6.2× 1.7	板目 モミ	下半部を欠損、表裏に粗い削り、圧痕あり	40
533	クサビ形	13.1× 13.8× 4.3	榎目	略完、全面削り、上端面にツブレとこげあり	39
534	角 材	88.8× 3.0× 1.6	板目 モミ	両端を欠損、断面長方形に削り出す	41
535	厚 板	50.0× 10.2× 2.9	榎目 ショジ	両端欠損、片側に高さ3cmの立ち上がりあり	35
536	太 枕	53.8× 15.8× 10.5	芯持 カヤ	両端を欠損、表面風化する	36
537	厚 板	38.0× 7.5× 2.0	榎目 オニグルミ	両端を欠損、全体に削り	62
538	板 材	11.7× 5.0× 0.7	榎目 カヤ	上端を欠損	44
539	板 材	10.0× 2.9× 0.5	板目 カヤ	完存、先端山形に削り出す	44
540	板 材	12.2× 4.3× 0.8	板目 カヤ	略完、側面を欠損、先端山形に削り出す	44
541	厚 板	21.2× 8.7× 4.4	芯持 カシ	上半部を欠損、有芯分割材を両面から削り出 す、先端部は斜めに削り出される	38
542	厚 板	16.5× 8.1× 3.0	榎目 クリ	両端欠損、表裏削り、裏面に半円状の圧痕	63
543	厚 板	26.0× 8.8× 3.0	板目 ケヤキ	下半部を欠損、上端面取り、断面台形、4分 割材から削り出す、側面に圧痕あり	35
544	割 枕	26.0× 8.8× 3.0	割材 クリ	両端欠損、全面粗く削り出す	37
545	丸 枕	23.0× 6.6× 5.0	芯持 ヤマボウシ	面取りされた両部のみ	58
546	割 枕	23.0× 13.0× 9.0	2分割 クリ	両端欠損 有芯分割材を削り出す	37
547	角 材	22.1× 2.4× 0.9	榎目 モミ	下半部を欠損、先端丸く削り出す	46

7 自然遺物

1 概要

自然遺物は、木製品の出土状態の項でふれた様に、各濠から木製品に混じって、モモ、オニグルミ、クリ、ヒヨウタン等の果核、種子類が出土している。北濠や西濠で出土した獣骨も、これに準じようが、甲虫類等の昆虫の類も、調査中に目にふれている。

これらは、館内外での食料残滓の一部を含み、遺物組成の中で十分に検討すべきであるが、獣骨を除いて正式な鑑定はしておらず、本報告からは除外した。モモ、オニグルミについては、図版95、96に写真のみ掲載をした。今後正式鑑定の機会を得たい。

本項では、出土量が多いモモ、オニグルミ、ヒヨウタンについて出土状態と遺存状態を記載する。

自然遺物全体の出土量は、北濠、西濠、南濠の順に多く、調査面積を反映した結果でもあるが、北濠は河道を含むためか、後述する網代、葦状編物等まで出土し、濠毎に様相を異にする。北濠では、モモ、オニグルミ、ヒヨウタンが目立ち、クリ、牛、馬の獣骨が共伴する。年代上は、二ツ岳FAをはさんで幅を持っているが主体は館の存続期間に収まる。館の内部に直接面する西濠や南濠では、南濠の東でモモの出土が目立った位で、全体の出土量はむしろ少ない。しかし、各張出部の基部付近には、³吹きだまりの状態が見られ、特に二ツ岳FA直下では多量の木の葉が面的に広がり、昆虫類を共伴しており、FAの降下季節を示すものであろうか。

2 モモ (図版 95)

モモは、各濠合せて168点が出土している。図版95に示した様に遺存状態は良好だが、中には縫合面で半分に分れたもの20点、縫合部か腹部に穿孔された様な小動物の咬み痕を持つもの12点を含んでいる。ほかに磨耗の激しいもの等40点があり、総数200点を越している。出土量は、北、南、西濠の順で多く、調査面積に反比例している。

果核は、円形と長形の2形状を呈する。破損や咬耗痕のない136点の平均値では、長さ2.42cm、厚さ1.48cm、幅1.90cmである。最大長は3.68cm、最小1.86cmで、3cmを越すのは3例、2cm以下は6例である。咬み痕は、縫合部か腹部のいずれかにあき、腹部貫通例もある。穴のあき方は、一見すると規則的であるが、多方向の細い線条痕があつて動物のものである。また、黒くこげたものが2例だけあり、濠内に埋没するまでに時間的経過のあったことが推定される。

尚、樹種鑑定では、No307の分割材がモモとして同定されている。

3 オニグルミ (図版 96)

オニグルミは、各濠合せて50点以上が出土している。モモと同様な出土状態にあり、遺存状態も良好である。大きさは、長さ2.30~2.60cm、幅2.10~2.40cmを測る。

樹種鑑定では、No456の丸杭がオニグルミと同定されている。

4 ヒョウタン (図版 96)

ヒョウタンは、各濠から種子の入った状態で出土し、その個体数も多い。未鑑定のためにウリ科植物とした方が適切だが、この名を用いて主に出土状態を記す。

出土レベルは、木製品の一部よりも若干高く、単独で出土したものが殆どで浮遊後に埋没したと考えられる。破損例が少ないことからすると、食用が主で道具として加工されたものはない。

種子は、水につけていた状態で長さ1.2~1.3cm、幅0.7~0.75cm、厚さ約2.5mmを測る。

5 網代 (図版 4、10)

網代は、タケ科植物を幅3mm前後に裂いて格子模様編んだ、人工遺物だがこの項で報告をする。

各濠で出土したが、南濠の南辺石垣際 (図版4)、西濠の第1張出部前面 (図版10) では畳1~2枚程の広さのものが厚さ10cm程の間に3~4枚が重層しており、北濠は断片であるが、いずれも遺存状態が良好で、出土時は黄土色~黄緑色を呈し、編み目が肉眼でも十分に観察できる程であった。

南濠出土のものは、丸木弓2点と木の葉等を伴うだけで単独の状態に近いが、西濠のものは、長さ1mを越す丸杭や細杭を録取るかの様に共伴し、杭材を端部の固定材と見て“垣の一部”、間層に薄く土をはさむことから“壁材の一部”とも考えられる。しかし、西濠の例では、直径5~10cm前後の杭材が、ほぼ一定方向に並列し、一部が網代を抜けて打ちこんだ状態にあったことからすると、北濠との接続部での止水施設の可能性がある。

編み方について

編み方は、石膏型取りしたものを反転復元した。5cm角の中での観察では2つの方法がある。

- 1 「2本越え・2本潜り」 経9~11本、緯8~9本を押し並らべて直交させる。1コマの大きさは長さ5cm、幅3cm前後を測る。
- 2 「経2本送り 2本越え・2本潜り、緯1本送り 2本越え・1本潜り」 経7本前後を1単位とする2条、8~9本を単位とする緯1条を直交させる。1コマの大きさは長さ5.50cm、幅4cmの規則的な配列をするが緯4段目毎に経方向が一文字の帯になるのが特徴である。

6 籠 (図版 4)

籠は、南濠の西側道から口縁の一部が1点出土した。素材は、網代と同様にタケ科の茎を裂いたものを使用しているが、所謂「ザル目編み」で編み目が細く、繊細な印象を与える。

全体の形状は、経が上方にやや開くこと、緯方向が上方に弧を描くことからすると口径と底径に大差のない、口径30cm前後の隅丸方形のものに復元されようか。

編み方は、「1本越え・1本潜り」の所謂「ザル目編み」である。経は、幅1cm前後のものが約5mm間隔で並列、緯は幅3mm前後のものが緩い弧を描いて横断する。経は、4本単位で1本の幅と全体の間隔と異なり、作業上の単位と思われる。縁の一部が出土しているが、幅3mm前後のものを2本摺り合せて芯とした上に、さらに2本を別方向から巻きつけて全体にふくらみを与えている。

類例は、北濠、西濠でも細片化したものがいくつか見られた。しかし、本例の様に単独に近い状態

で出土しており、濠内への廃棄品であろう。

7 蕈状編物（図版 4）

蕈状編物は、ヨシかアシの茎をひと握り単位の細い束とし、紐絞りして草壁様にしたものである。

細い束は、6～8条、約20cmで1単位をなしてかがられ、連続して面を構成するが、経方向も約30cmの間隔で大きくかがられている。紐絞り痕からすると、表裏を持つ2層構造をなし、畳1枚程の面積で厚みがある。

出土例は、北濠からの2点だけである。南側のものには、Na86の丸杭、87の角材、91の有孔板材、92の切込みのある厚板等が重複して共存している（第8図）。この中で、丸杭、角材は蕈状の縁近くで平行乃至直交の位置にあり、86には紐絞り痕がある。有孔板材の孔間隔は、蕈状の紐絞り痕の間隔と近似している。これら木製品は、加工痕や紐絞り痕からすると蕈状編物と組合せて使用されたものか。その状態としては、杭材、角材は周縁の固定枠材、有孔板材は孔間隔の近似からすると表面を葺いたもの、とともれ、用途は厚みのある賣状か、網代と同様な垣状のものが推定される。しかし、網代と異なり、厚みが強調されている。

8 三ツ寺I遺跡出土水浸埋没木材のポリエチレングリコール(PEG)含浸処理について

北 爪 健 二

(保存処理室)

1 はじめに

三ツ寺I遺跡より出土した、水浸埋没木材のPEG樹脂含浸処理法による本格的処理作業は、昭和58年度に大型PEG樹脂含浸装置を購入し、翌年昭和59年より開始した。それまでは小型恒温水槽を用いて、小規模に処理作業を実施していた。

PEG樹脂含浸処理法は、幾つかの水浸埋没木材の保存処理方法の中で作業の扱い易さなどから広く普及している処理方法である。水浸埋没木材のPEG樹脂含浸処理法の歴史は古く、デンマークやスウェーデンで行ったバイキング船の保存は、その代表的なものである。

PEG樹脂はポリエチレングリコール(Poly ethylene Glycol)の略称で、その一般的化学式は、 $\text{HO}(\text{CH}_2\text{CH}_2\text{O})_n\text{CH}_2\text{CH}_2\text{OH}$ で、その化学特性は水や種々の薬剤に対して高い相溶性を示し、水溶液中では安定化した合成樹脂である。水浸埋没木材をこの低濃度のPEG樹脂の水溶液に漬け、長期間に亘り加熱しPEG樹脂濃度を上げ水浸埋没木材に含まれる水分と、PEG樹脂を置換硬化させることにより水浸埋没木材の恒久的保存を行う処理法である。

この水浸埋没木材に対するPEG樹脂含浸処理法も、他の幾つかの保存処理法と同様に、処理方法の違いにより、それぞれの処理法に応じた特異的な難点を包蔵している。

PEG樹脂含浸処理法の難点として、三つの代表的な課題が上げられる。(一) PEG水溶液の長期加熱による物理化学的劣化 (二) 木材表面、水溶液中でのバクテリアの繁殖 (三) 木材処理前後の寸法安定化と黒化現象などである。

2 PEG樹脂含浸処理作業経過

昭和59年より小型板材100点の含浸処理を開始し、翌年昭和60年に650点の中型材と併せ処理を開始した。木材750点中針葉樹と広葉樹の比率は約2:8の割合である。

前処理作業：前処理として木材の脱色処理を実施した。処理に際して木材をナイロン製の網袋に詰めて実施した。EDTA 0.1%を溶液に添加し液温35°C前後で実施、処理開始後約6時間で溶液が黄褐色を呈し始め、木材の木目が明瞭となり始め、12時間後には更に木材の質感が観察された。処理前の木材の色調は暗褐色を帯びていた。48時間後の観察では溶液は暗黄茶褐色を示し、木材の表面もやや茶褐色の状態を示し始めた。10日後の溶液及び木材の状態は表一で示す通りである。

PEG樹脂含浸：前処理(脱色処理)後木材を洗浄し、PEG 10%水溶液で含浸処理を開始した。処理状況は表一 参。PEG 20%まではナイロン製網袋に詰めて実施した。

PEG 30%の段階で、木材の保護材として不織布の袋を作成し、木材を詰めて処理を継続した。尚この段階で前回濃度域でバクテリアの繁殖による溶液の濁りと悪臭を発生始めたので、後で述べる多機能液状吸着剤を溶液に0.2%添加し、バクテリアの死滅と溶液の浄化を計った。

PEG 60%段階で、溶液の色調変化と木材表面の黒化現象が著しく進行したため、EDTAを0.2%溶

表-1 PEG含浸処理工程

PEG樹脂濃度 (%)	含浸条件 (液温℃)	含浸期間 (日)	含 浸 処 理 状 況
前処理 (脱色)	液温 35℃±3	10日後 洗浄5日	EDTAは0.1%添加し脱色処理実施、木材表面の黒ずみは消失し、木材の質感が表われる。溶液は黒ずみ始めた。
PEG 10%	〃 〃	30日	木材表面がやや黒ずみ始め、溶液も濁り始めた。
〃 20%	〃 40℃±3	40日	木材表面に乳白色の半膜状のバクテリアが繁殖し始め、溶液も茶褐色を呈し始めた、悪臭発生。
〃 30%	〃 〃	50日	多機能液状吸着剤0.2%添加、添加、沈殿口過処理後、処理継続、溶液は透明度を増し、悪臭が除去された。
〃 40%	〃 〃	65日	沈殿、口過処理後、処理継続、悪臭なし、木材表面黒化が進み始め、溶液は黄褐色を呈し始める。
〃 50%	〃 50℃±3	〃	沈殿、口過処理後、処理継続、悪臭なし、木材表面に、更に黒化が進み、溶液も茶褐色を呈し始める。
〃 60%	〃 55℃±3	50日	沈殿、口過処理後、EDTA0.2%添加、溶液は透明度を増し、黒褐色から黄褐色を呈し、木材も黒化が除去され、質感が得られた。
〃 70%	〃 65~70℃±3	〃	PEG溶液を新しく調製し、EDTA0.2%添加、更に木材の質感が明確に表われ、溶液も薄い黄褐色を呈し始めた。
〃 80%	〃 〃	40日	含浸槽より大型木材と小型木材とに分け、小型木材については特殊パックに入れ、80%PEG溶液を調整し含浸継続。
〃 90%	〃 〃	30日	濃縮作業(蒸発)実施、一部のものについては黒化が除去されないのであるが総合的に良好な質感で含浸された。
〃 100%	〃 〃	〃	終了後、表面洗浄、自然乾燥、尚100%についてはPEGを加え蒸発させて100%とした。

液に添加し、溶液と木材の脱色処理を実施した。それによって、ある程度良好な結果となったのは表-1の示す通りである。PEG 60%域まで濃度を上げ使用してきたが、70%でPEG溶液を新しく調製し、EDTAをやはり、0.2%添加して実施した。

3 多機能液状吸着剤を用いた PEG 樹脂溶液の浄化と劣化抑制効果について

昭和58年に大型 PEG 含浸装置を導入し、大量の水浸埋没木材の PEG 樹脂含浸処理実施に伴い、PEG 樹脂溶液の劣化抑制と浄化につき、基礎実験を開始した。それまでに使用済みとなっていた劣化変質した、大量の PEG 溶液の再利用が当初の目標であった。その間さまざまな薬品を用いて試験を実施した結果、多機能液状吸着剤(商品名 アニコ^{註17)}が劣化変質した PEG 溶液に対して、高い浄化効果が有ることが確認された。

アニコは通産省工業技術院化学技術研究所開発品で、硫化第一鉄 $\text{FeSO}_4 \cdot 7\text{H}_2\text{O}$ と L-アスコルビン酸 $\text{C}_6\text{H}_8\text{O}_6$ (ビタミンC) からなる化合物で、化学構造は図-1に示す通りである。化学特性として有機的な悪臭成分を化学的に脱臭する作用があり、またこの化学成分である硫化第一鉄と L-アスコルビン酸は、厚生省指定の食品添加物として、使用量制限のないものであり毒性が少なく繊維などの担体に浸透し、性能が劣化しにくく、また最大の利点として水処理効果があげられる。ポリ塩化アルミニウム、硫酸バンドと比較して、フロックの生成が速く、かつ重いの

沈殿生成に優れている。沈殿物は微生物との親和力が強く、水中浮遊物との親和力がある。水中浮遊物コロイド状の有機物、嫌気性微生物などの除去に効果的で特に重金属類などの除去効果が高い。

表一は、含浸処理後の劣化変質の著しい PEG 10%溶液と35%溶液に、多機能液状吸着剤を加えた結果である。

表一 PEG 溶液濃度測定表

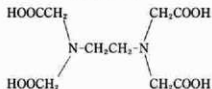
PEG溶液	濃度(前)	濃度(後)	条件及び操作
蒸留水	0.00ppm	0.00ppm	濃度：蒸留水をゼロとした場合の透過散乱比光度法 ^{註1)} (ppm)による測定値
10%PEG溶液	0.04ppm 濃い茶褐色を帯びている。	0.01ppm やや薄く黄色味を帯びているが透明。	劣化変質したPEG10%溶液に数%多機能液状吸着剤を添加し、3日間室温で放置後濾過を行った。
35%PEG溶液	0.35ppm 透明度なし。 茶褐色を帯びている。	0.04ppm やや黄色味を帯びているが透明である。	劣化変質したPEG35%溶液に数%多機能液状吸着剤を添加し、3日間室温で放置後濾過を行った。

4 EDTA による PEG 樹脂溶液と木材脱色効果について

先に述べた通り PEG 樹脂含浸溶液60%まで、液交換はせず処理作業を行った段階で、溶液の黒ずみと、木材の黒化が進み処理を行っていく上で懸念される課題であった。

ここで黒ずみがあった PEG 樹脂溶液に、EDTA 水溶液0.1%を偶然加えたところ、溶液が黄褐色に変化し、次にこの溶液中に黒化した試験木材を加えたところ、12時間後に黒化が消失し木材も黄褐色に色調が変化した。

EDTA (ethylene diaminetetra acetic acide)^{註5)} $(\text{HOOCCH}_2)_2 \text{NCH}_2\text{CH}_2\text{N}(\text{CH}_2\text{COOH})_2$ は、アルカリ土類や希土類、遷移金属などの多くの金属と極めて安定な水溶性の錯塩を形成する。定量的に金属とのモル比1:1で錯イオンを生ずることにより、その触媒としての作用を阻害する。



また医薬品(重金属中毒患者への投与、低



カルシウム血症病)として、更に工業用として広く利用されている。

水浸埋没木材の中に含まれ黒化現象の主な要因として、主に二価のマンガンや鉄、その他二価の金属イオンなど、その要因としてあげられる。この二価の種々の金属イオンと、簡単に錯イオン生成して、六座配位子となり配位結合部の助色団と発色団の化学的反応により黒化状態から、黄褐色へと色調を変えようとする。

水浸埋没木材の PEG 樹脂含浸処理法に於ける、最も重要な難点である、黒化現象の抑制に現在 n-BuOH 法やトリクロールエチレン法が広く普及している。

今回、EDTA を用いた処理法により、ある程度均一に PEG 溶液と、木材表面両面に渡り黒化現象の除去が可能となった。また木材の質感は、およそ出土直後の色調を取りもどすことができ、n-BuOH 法やトリクロールエチレン法と比較して、EDTA を含浸溶液に添加することにより、含浸処理を進行させながら脱色でき、含浸処理後、特別の表面処理を施さずに済むという利点も合せ持つといえる。更に特殊ポリエチレンバッグ(商品名 リードフリーザーバッグ U.S.A 国内販売 ライオンKK)に小型木材を入れ木材重量の3~4倍量の PEG 水溶液を、含浸濃度に合せ調製し EDTA、0.1%を添加し恒温水槽中で簡易的に処理を実施した。水を熱媒体として用いるため管理が容易に出来、使用する PEG 樹脂量も比較的少量で済み、また特に埋没中に汚染の激しい木材と、比較的そうでない木材を従来までは、同一槽中で取り扱って来たがこの特殊バッグを用いた場合、汚染の激しい木材から含浸中に溶出される、先に述べた黒化の緒要因となっている種々の金属イオンなどが、汚染度の少ない木材への悪影響が抑えられる、といった効果がある。

おわりに

昭和59年に大型 PEG 含浸装置を導入し、それまでと比較して大量の処理能力を持つこととなったが、処理能力が向上したことにより、それに付随した緒々の課題も、決して見逃すことの出来ない事柄である。今回の処理に際して、処理後の木材の時経変化や寸法安定性などについても、注意深く管理保存を行って行きたいと考える。

註 文献及び参考文献

- 1) PEG 4000 三洋化成工業株式会社製
- 2) PEG 含浸装置 PA-101 三洋化成工業株式会社製
- 3) アルコール・エーテル樹脂法、合成樹脂硬化法、その他
- 4) B. Bronson Christensen: The Conservation of Waterlogged Wood, National Museum of Denmark (1970)
- 5) クレフット-N 帝国化学
- 6) OL-150 日本バイリン製
- 7) アニコ KM1013 ダイセル化学工業
- 8) クリーンフィルター CP60E 東洋科学産業社製
- 9) 北爪健二 「多機能液状吸着剤を用いた PEG 含浸処理法に於ける水浸出土木材の PEG 溶液の劣化抑制と浄化効果の研究」
【研究紀要】4 朝鮮馬淵埋蔵文化財調査事業団 (1987)
- 10) フロック 化学沈殿物
- 11) 増沢文武 松田隆剛 「保存科学研究室紀要」2~6 勸元興寺文化財研究所
- 12) 岡村圭造 岡本 一 谷口 謙 「木製遺物の保存の基礎としての劣化現象の研究」【古文化財の自然科学的研究】
原田 治 藤田 稔 同朋社 (1984)
- 13) E. DEWitte, A. Tertve, J. Vysocki: The consolidation of the Waterlogged Wood from the Gallo-Roman Boats of Pommerol. Studies in Conservation 29 PP. 77~83 (1984)

圖 版



1 南濠（1区東）木器出土状態（北より）



2 南濠（1区西）（北より）



1 南濠（1区西）外縁部木器出土状態（北西より）



2 南濠（1区西）中央より出土した鋤（北東より）

- 1 南辺推定第3張出
部付近の南濠（1区
東）から出土した鋤
（北より）



- 2 南濠（1区東）中
央より出土した鉄
（北より）



- 3 南辺石垣基部より
出土した鉄（南より）

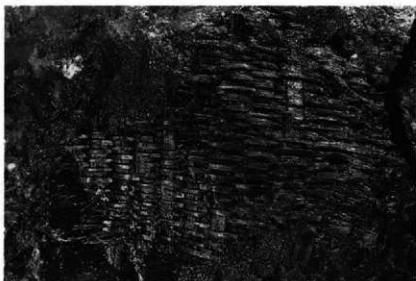




1 南辺推定第2張出
部東辺基部より出土
した弓（北東より）



2 南辺推定第2張出
部東辺基部より出土
した網代（東より）



3 南濠（1区西）
外縁部付近より出土
した龍（北より）



1 西辺第2張出部北辺基部付近の木器出土状態（北西より）



2 西辺第1張出部南辺基部付近の木器出土状態（西より）



1 西濠（2区西）木器出土状態（南より）



2 西辺橋梁遺構付近より出土した礎と柱材（北より）



1 西濠（2区西）外縁部付近の木器出土状態（北より）



2 西辺第2張出部南辺基部付近の木器出土状態（北より）



1 西辺橋梁遺構付近の木器出土状態（北東より）



2 西辺橋梁遺構付近より出土した樋と柱材はFAに直接覆われていた(南東より)



3 樋と柱材の出土状態（北東より）

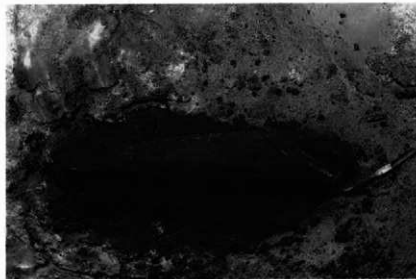
1 西濠（2区西）外
縁部付近の木器出土
状態（北より）



2 西濠（2区西）外
縁部付近の木器出土
状態（南東より）



3 西辺第1張出部先
端の西濠より出土し
た桶（北より）





1 南濠より(2区西)
外縁部付近より出土
した鉄(北より)



2 西濠(2区西)外
縁部付近より出土し
た鉄(南より)



3 西辺第1張出部先
端付近より出土した
網代下部は槌(南よ
り)



1 北濠（3区東）と北辺堤状遺構（手前は館北辺、南より）



2 北辺橋梁遺構（南東より）



1 北辺橋梁遺構木器出土状態（北より）



2 北辺橋梁遺構木器出土状態（西辺第1張出部北寄り）（北より）



1 北辺橋梁遺構木器出土状態（南東より）



2 北辺橋梁遺構木器出土状態（北西より）



1 北濠取水部（3区西）木器出土状態（北西より）



2 北濠取水部より出土した菰状編物（北より）



2 (表)



2 (裏)



3 (表)



3 (裏)



60 (表)



60 (裏)



213 (表)



213 (裏)



104 (表)



104 (裏)





33 (表)



33 (裏)



141 (表)



141 (裏)



398 (表)



398 (裏)



267 (表)



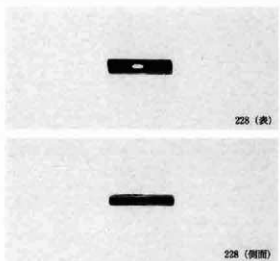
267 (裏)



316 (表)



316 (裏)



228 (表)

228 (側面)

又歌・長柄歌・着柄歌・把手 紡織具



314 (表)



314 (側面)



367 ((表))



367 (裏)



7



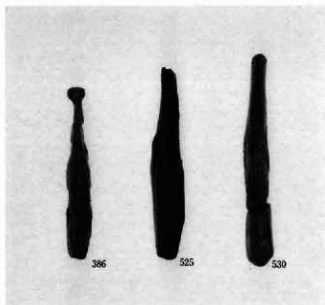
28

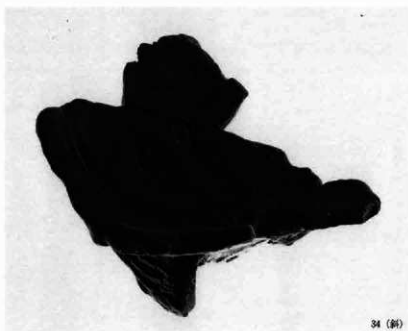


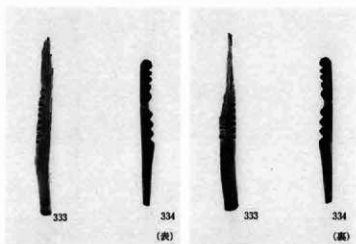
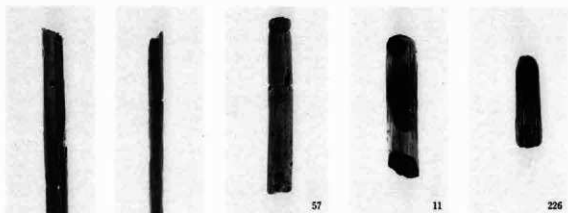
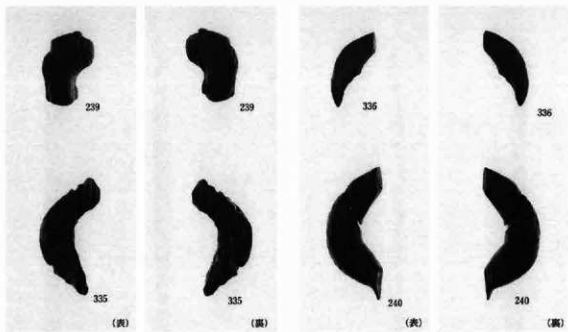
414 (表)



414 (裏)









23 (表)



23 (侧面)



23 (裏)



8 (表)



8 (裏)



6 (表)



6 (裏)



35 (表)



35 (側面)



35 (裏)





丸木弓・平弓





4 (表)



4 (裏)



318 (表)



318 (裏)



100 (表)

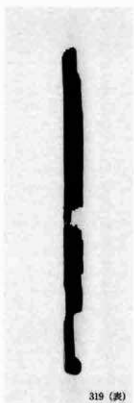
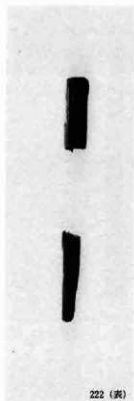


100 (側面)



100 (裏)

木刀形





225 (表)



225 (裏)



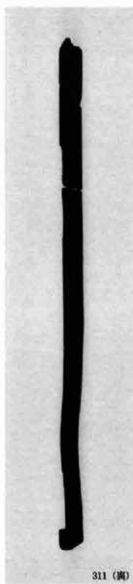
257 (表)



257 (裏)



311 (表)



311 (裏)

木刀形



320 (表)



320 (裏)



312 (表)



312 (裏)



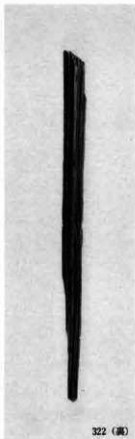
321 (表)



321 (裏)



322 (表)



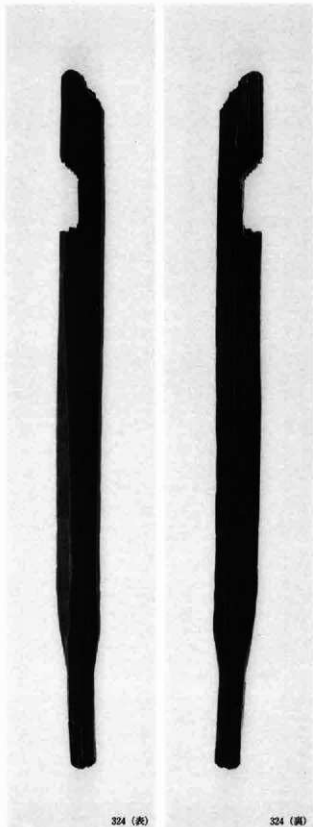
322 (裏)



323 (表)



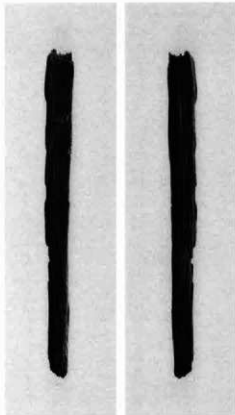
323 (裏)



324 (表)

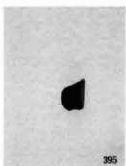
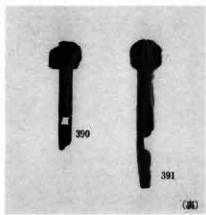
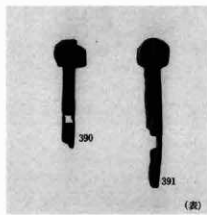
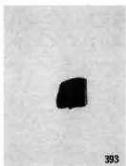
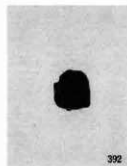
324 (裏)

木刀形

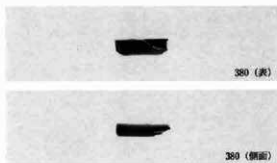
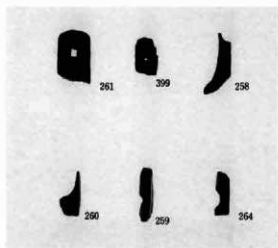
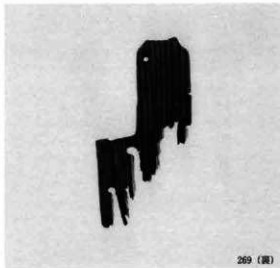
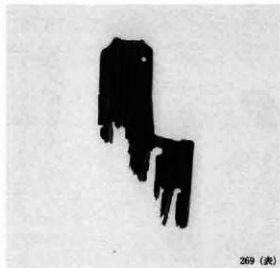


429 (表)

429 (裏)



有頭クサビ形



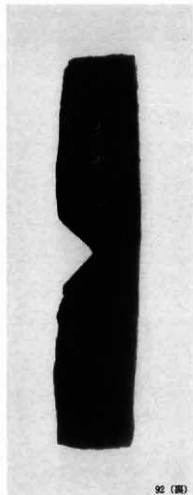
用途不明・刀子の柄



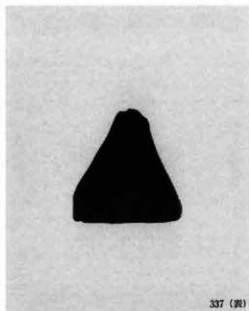
92 (表)



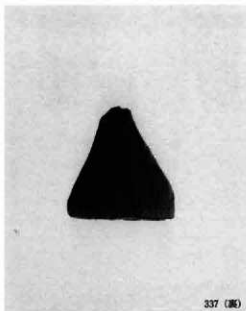
92 (側面)



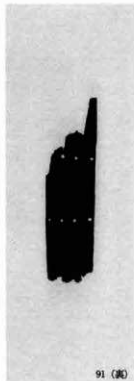
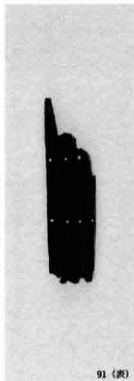
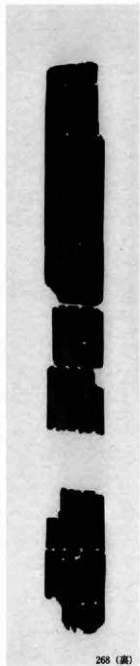
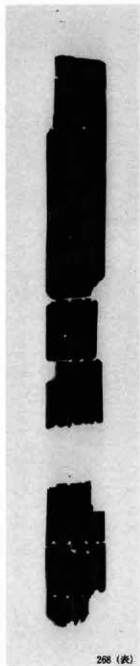
92 (裏)

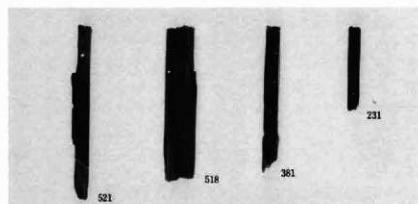
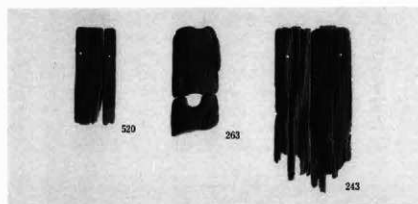
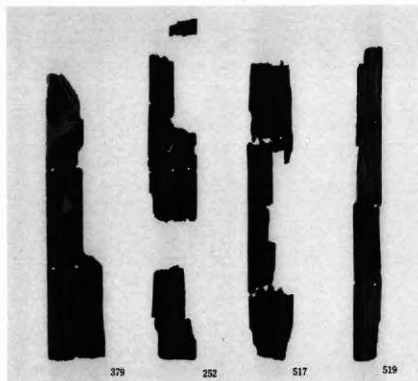


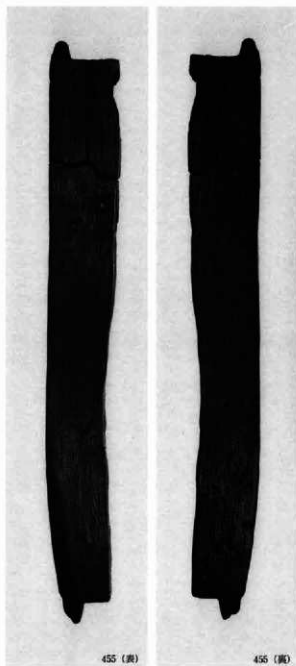
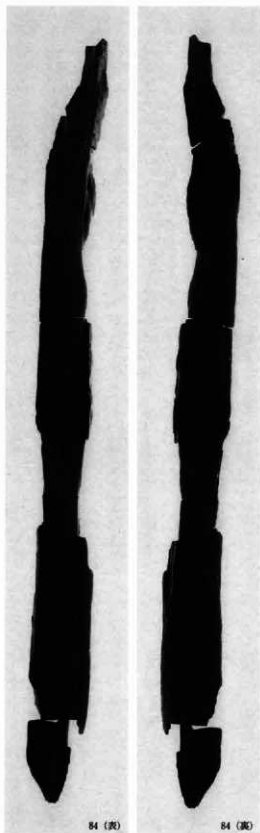
337 (表)



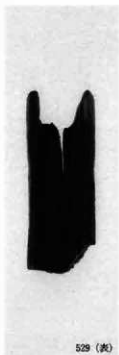
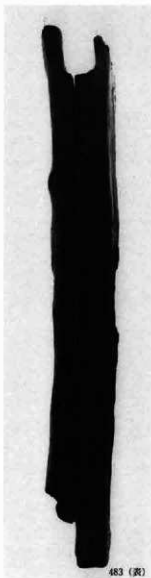
337 (裏)













505 (表)



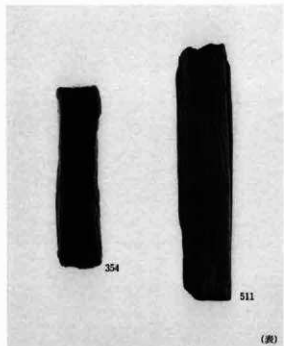
505 (裏)



486



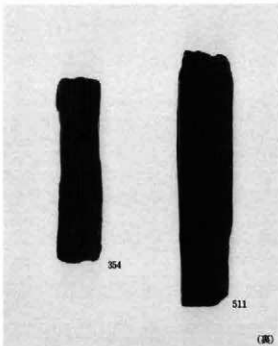
507



354

511

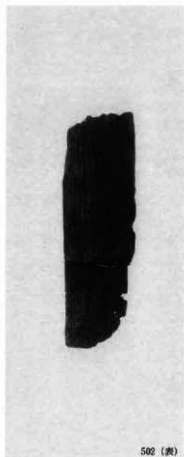
(裏)



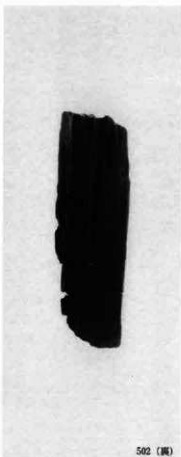
354

511

(表)



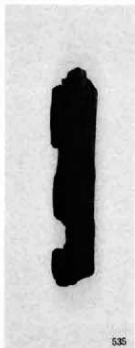
502 (表)



502 (裏)



502 (挿字)



535



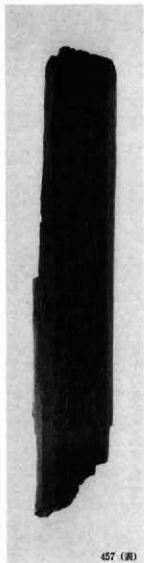
217



531 (表)



531 (裏)



457 (裏)



457 (裏)

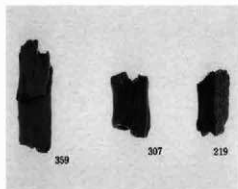
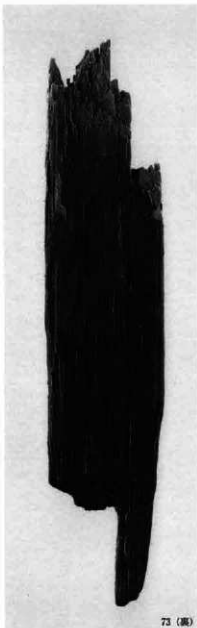
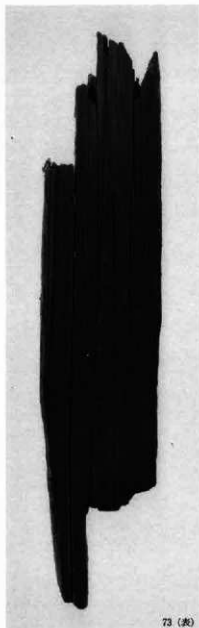


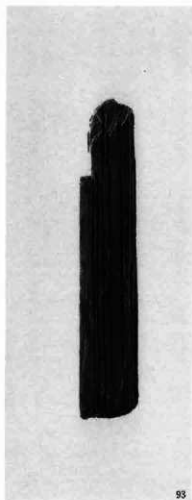
356 (表)



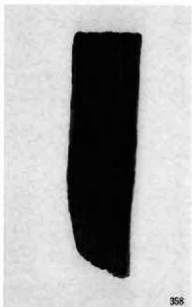
355 (裏)



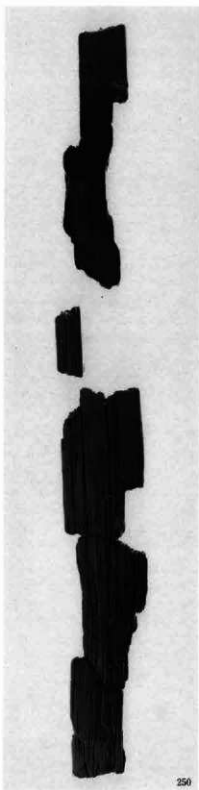




93



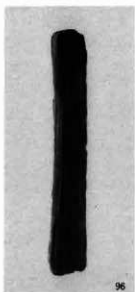
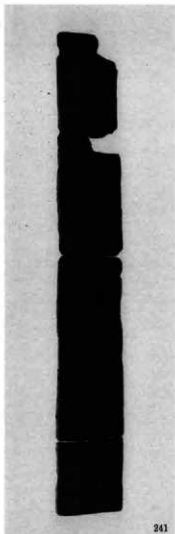
358



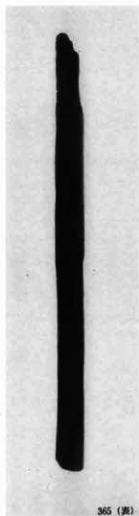
250



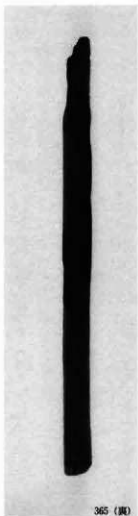
290



板材・角材・クサビ形



365 (表)



365 (裏)

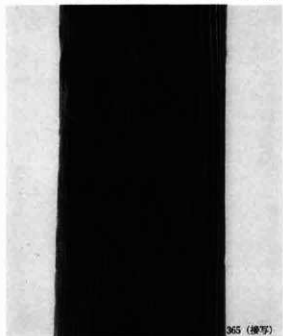


514 (表)



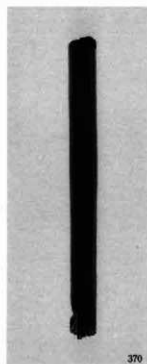
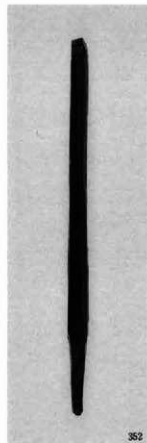
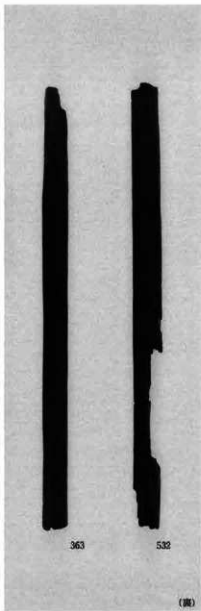
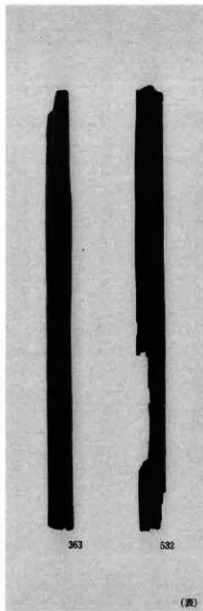
514 (裏)

365 布疋痕を示す。

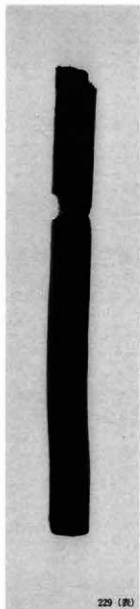


365 (縮写)

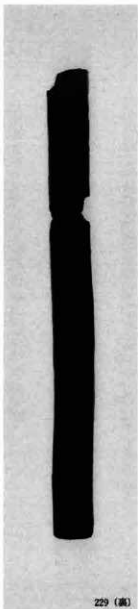
角材







229 (表)



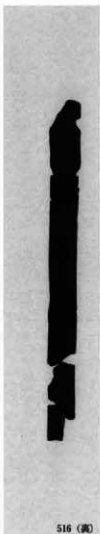
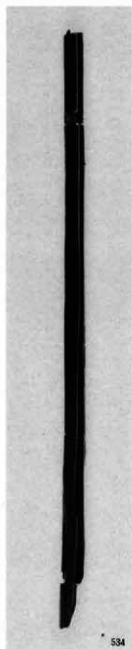
229 (裏)

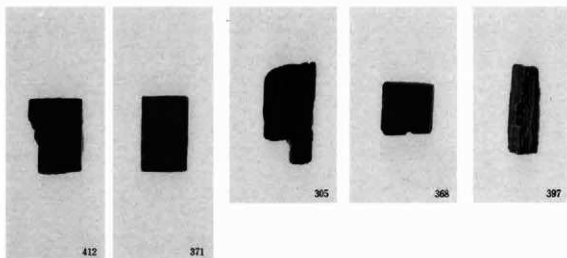
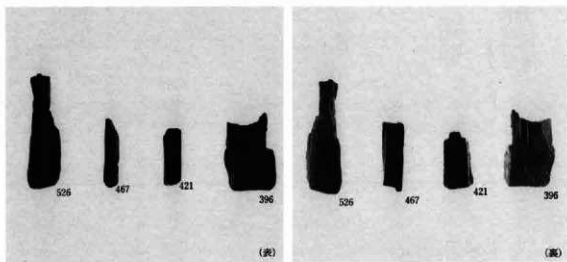
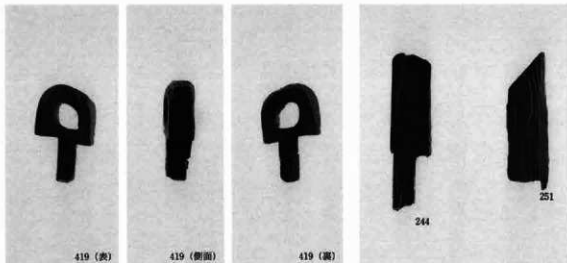


230 (表)

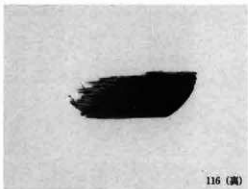
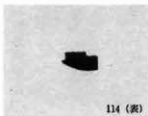
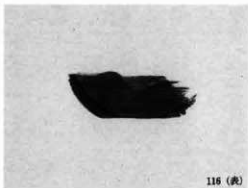
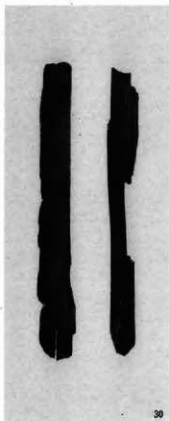


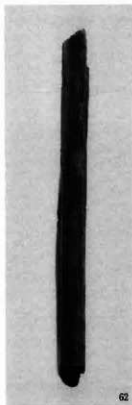
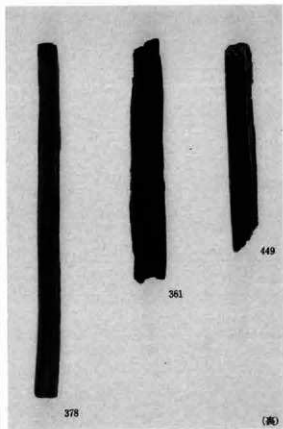
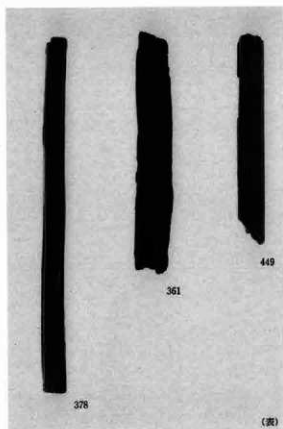
230 (裏)

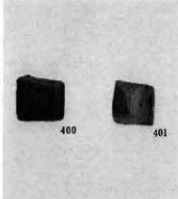
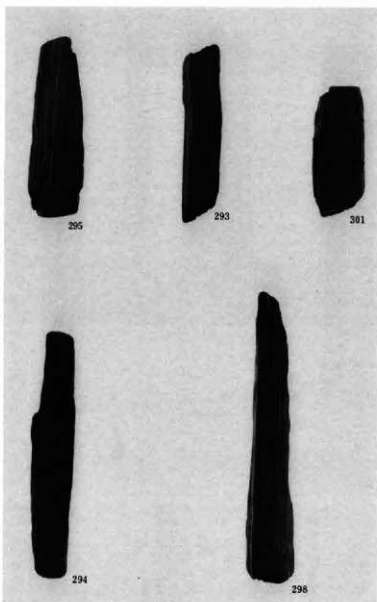




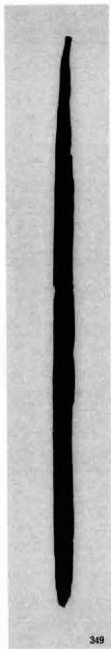
把手・加工板



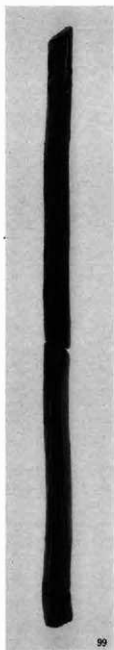




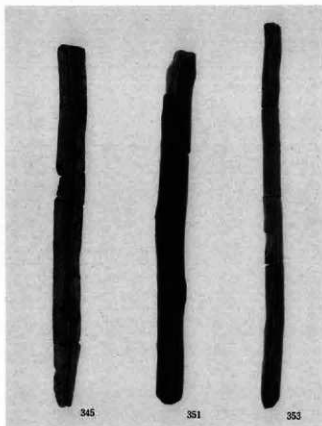
角材・クサビ形







99



345

351

353



340



124



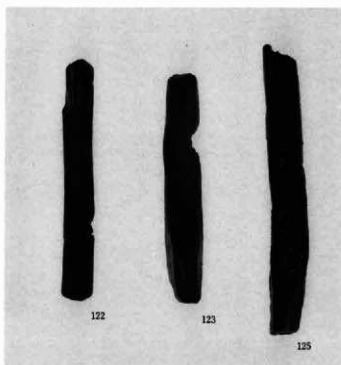
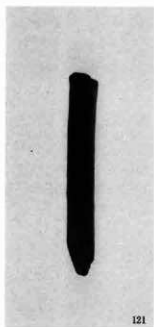
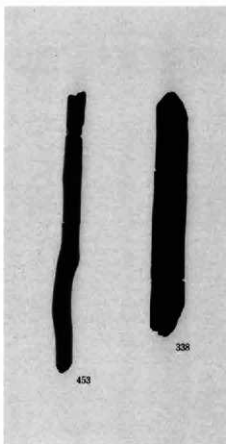
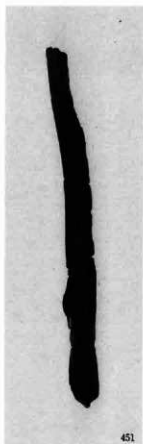
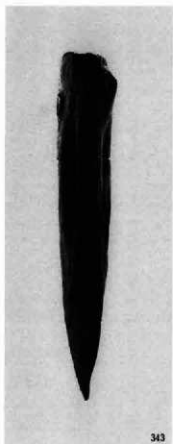
284

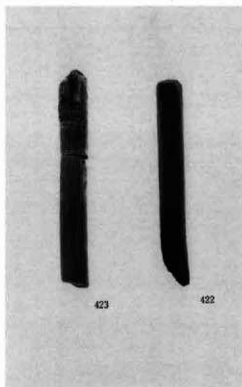
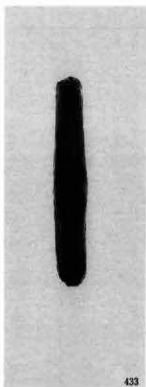
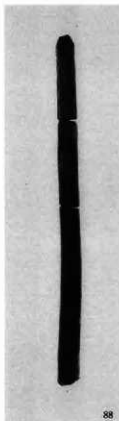
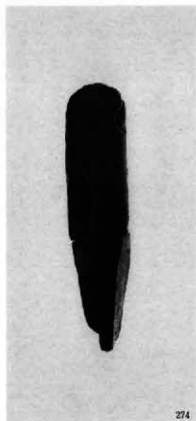


81

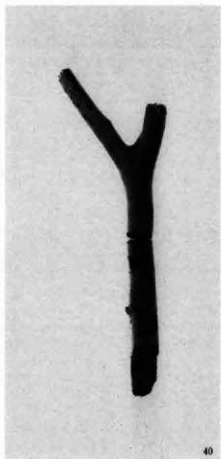
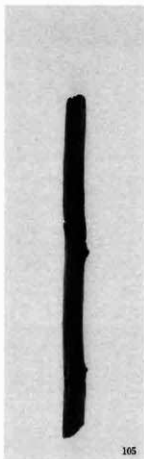
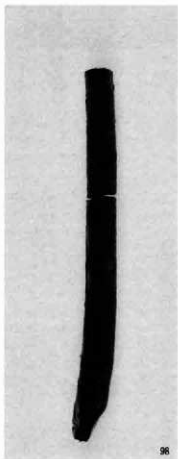


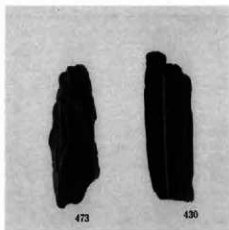
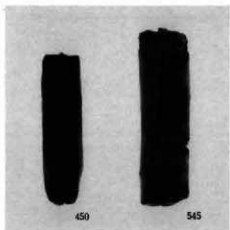
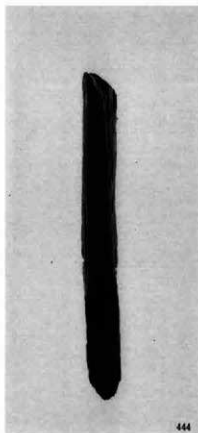
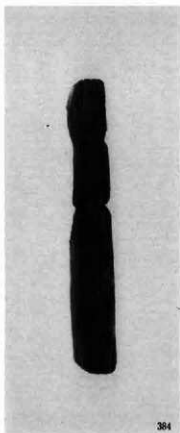
285

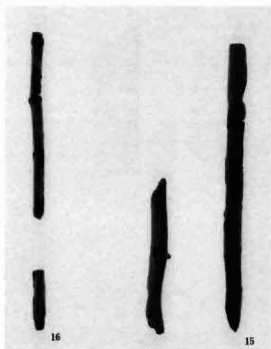
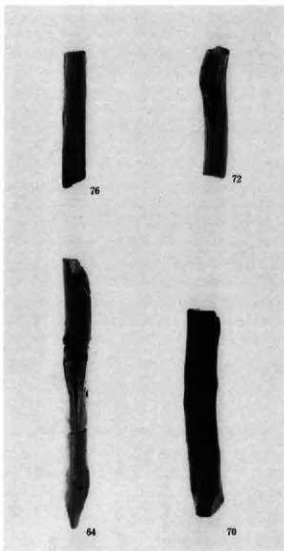
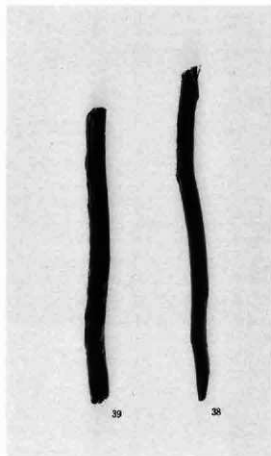


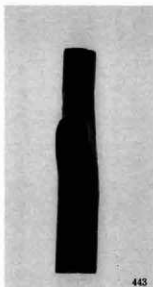
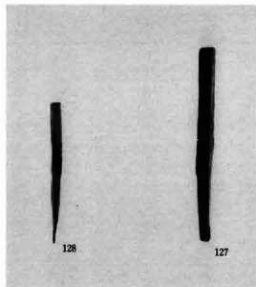


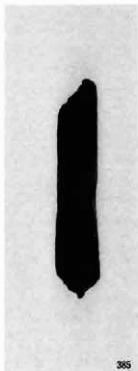
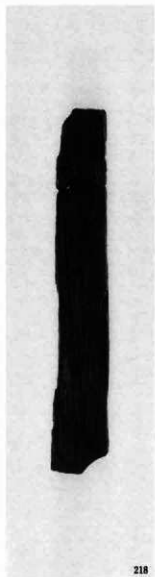
枝 杭













82 (裏)



82 (側面)



220



348



46



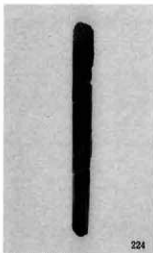
47



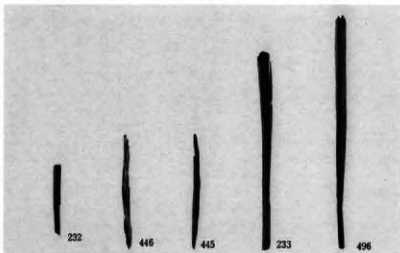
434



144



224



232

446

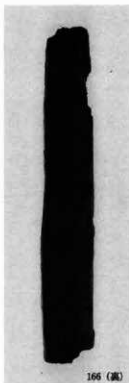
445

233

496



166 (表)



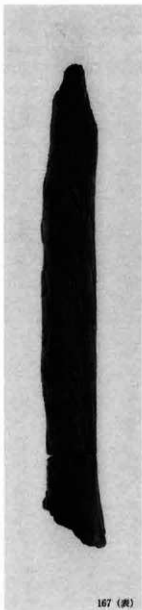
166 (裏)



169 (表)



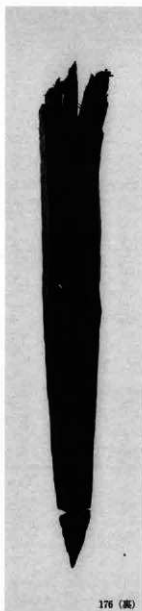
169 (裏)



167 (表)



167 (裏)





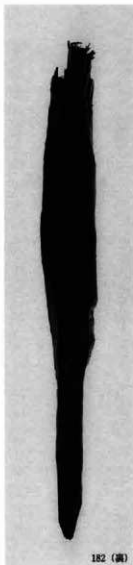
181 (表)



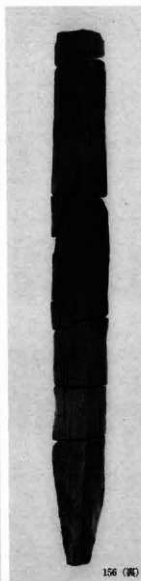
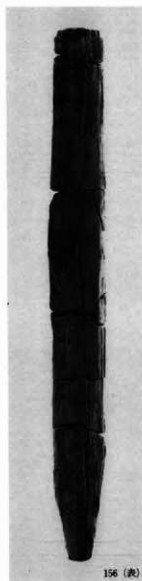
181 (裏)

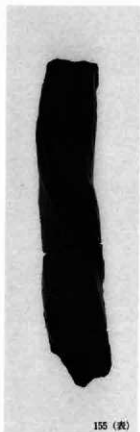


182 (表)



182 (裏)





155 (表)



155 (裏)



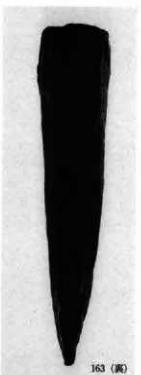
165 (表)



165 (裏)



163 (表)



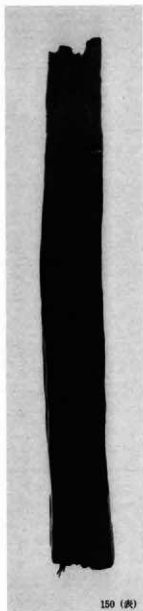
163 (裏)

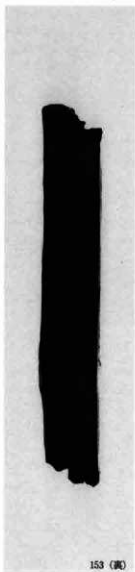
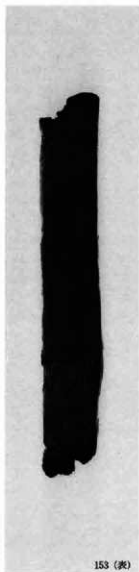


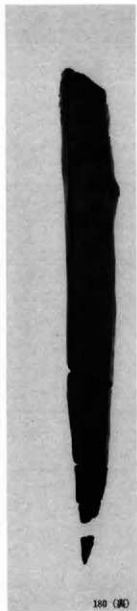
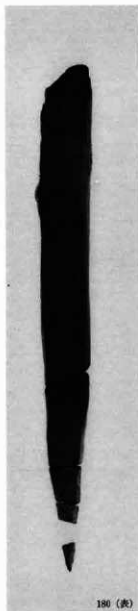
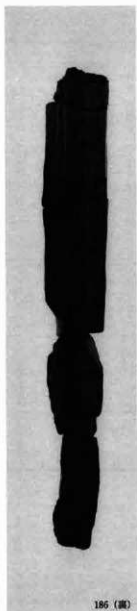
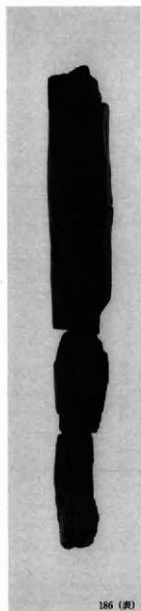
164 (表)

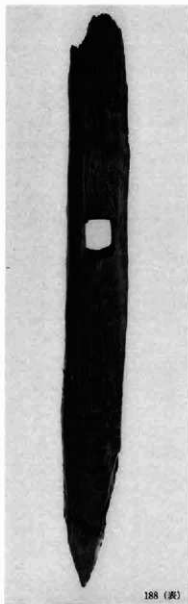


164 (裏)

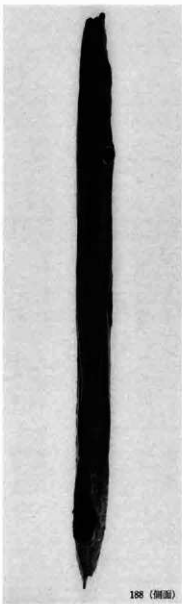




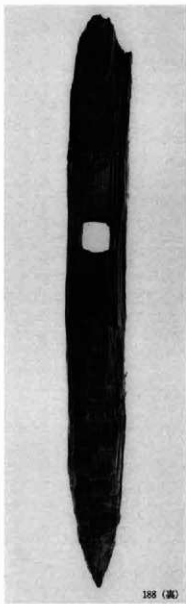




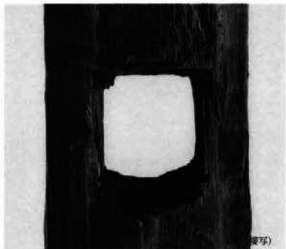
188 (表)



188 (侧面)

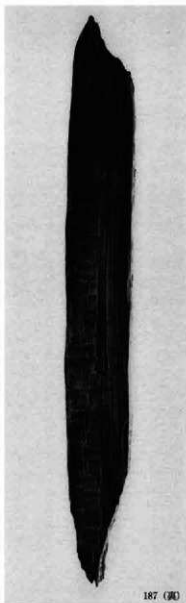
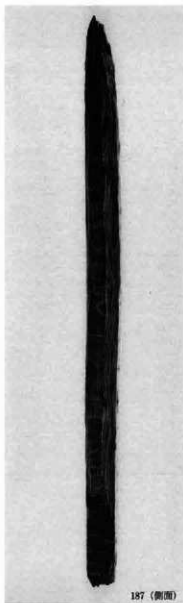
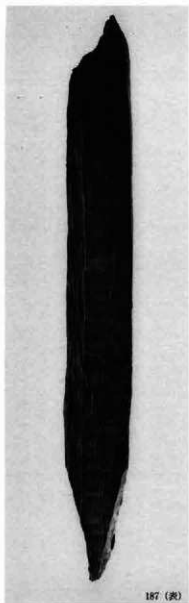


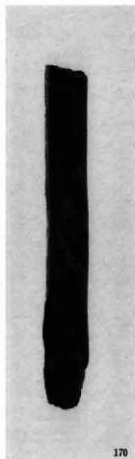
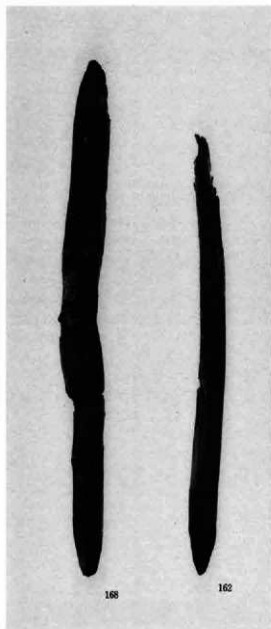
188 (裏)



(放大)

角 杭







203



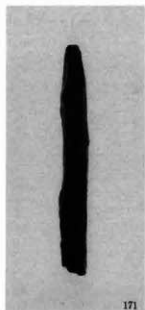
190



160



194



171



201



197

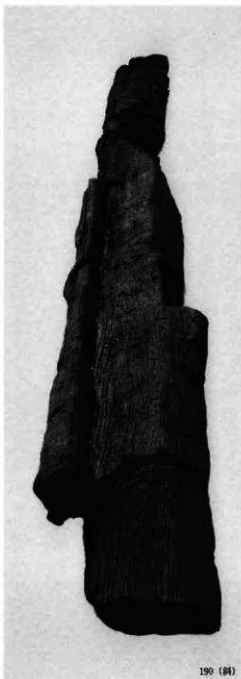




174 (裏)



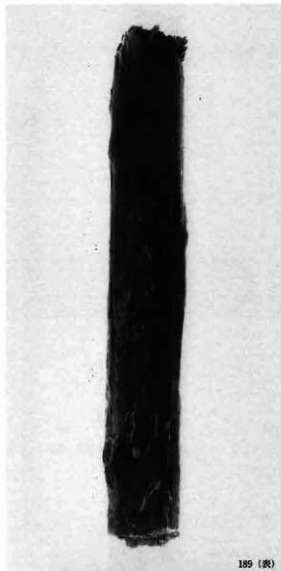
174 (表)



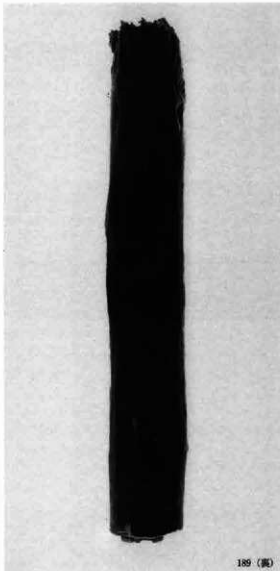
190 (裏)



190 (表)



189 (表)



189 (裏)

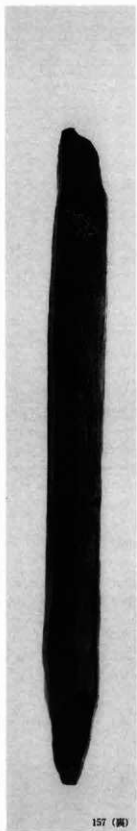


189 (縮写)

太 杭



157 (表)



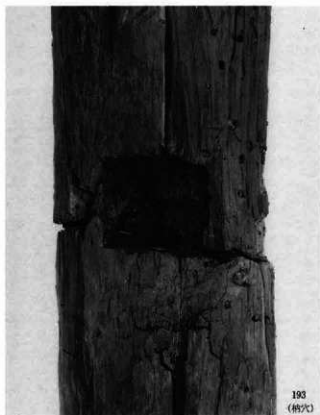
157 (裏)



173 (表)



173 (裏)



193
(納穴)



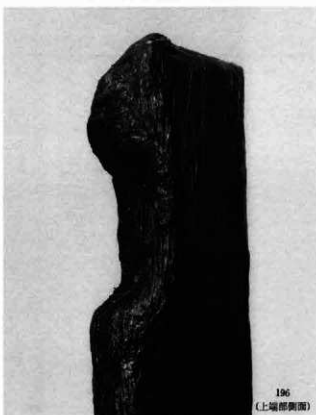
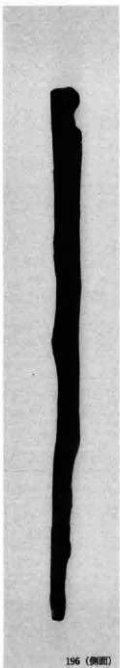
198
(納穴)

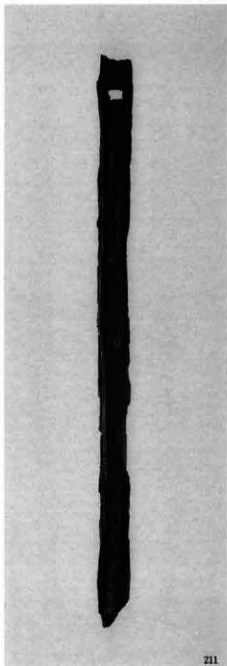
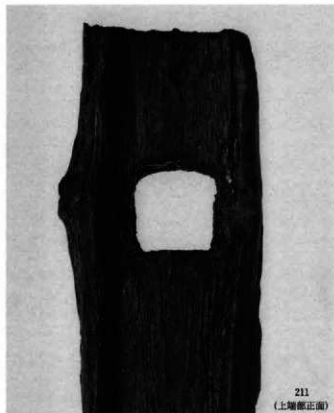


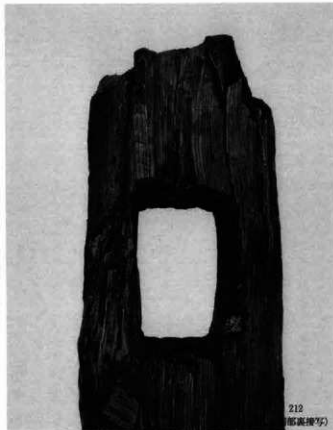
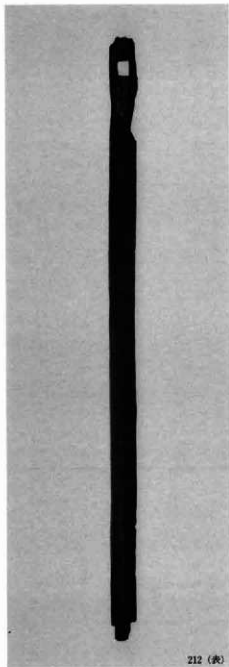
193 (表)



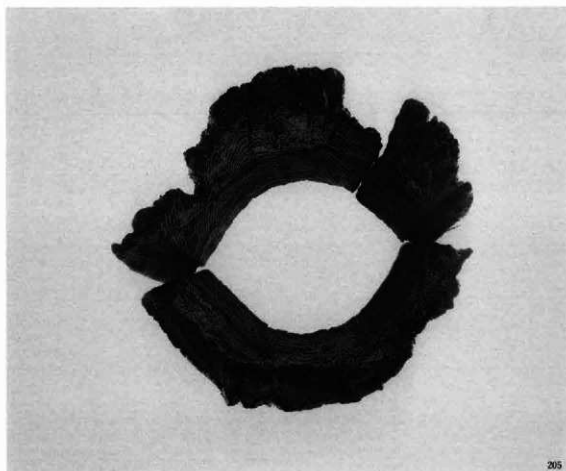
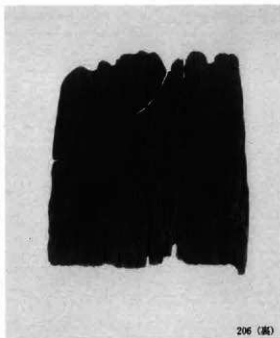
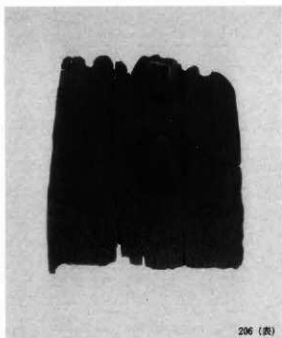
193 (側面)



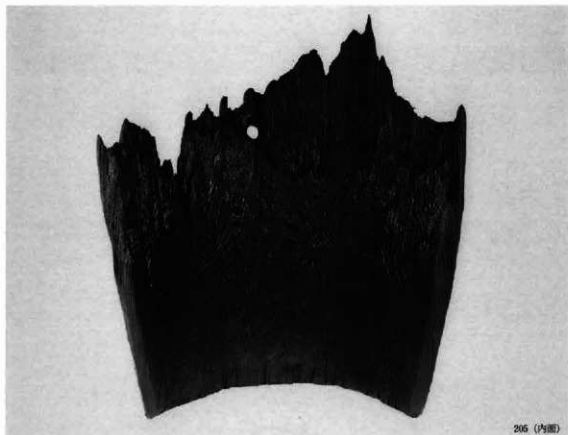




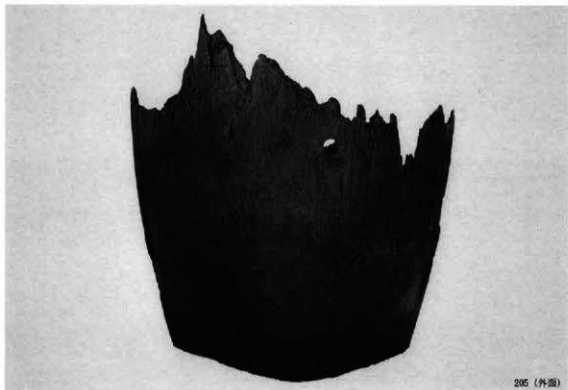




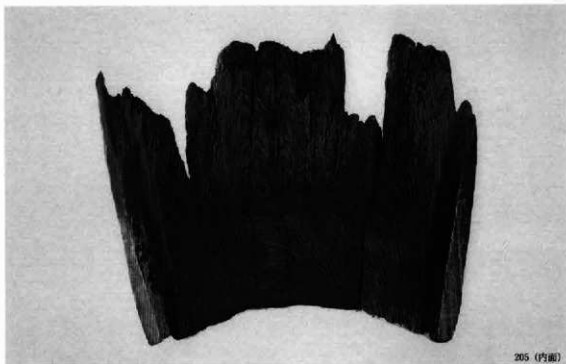
把手付板・井戸枠



205 (内面)



205 (外面)



205 (内面)

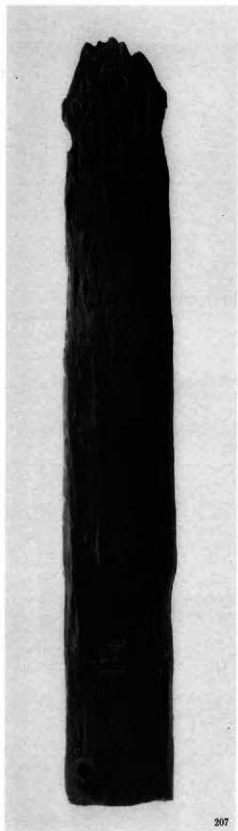


205 (内面接写)



205 (内面接写)

井戸杵



207

柄 脚



207 (接写)



206 (表)



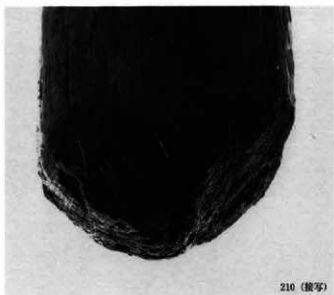
206 (裏)



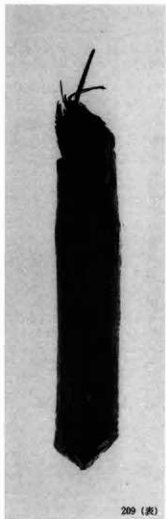
210 (表)



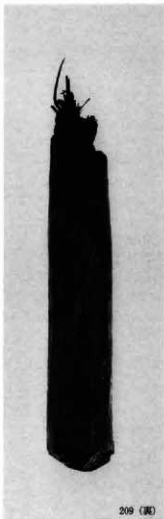
210 (裏)



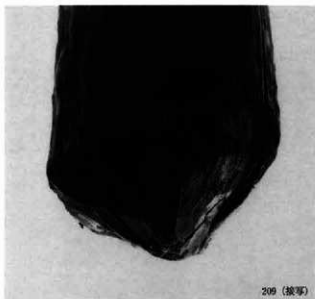
210 (接写)



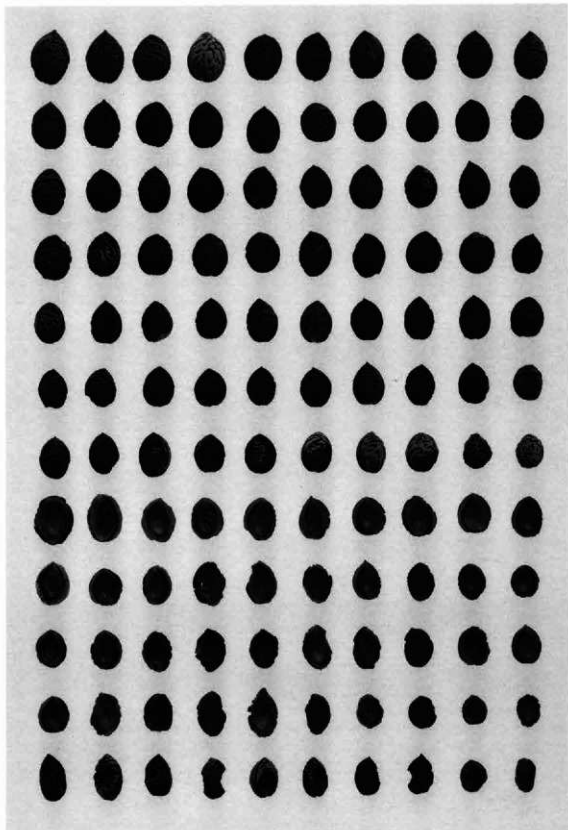
209 (表)



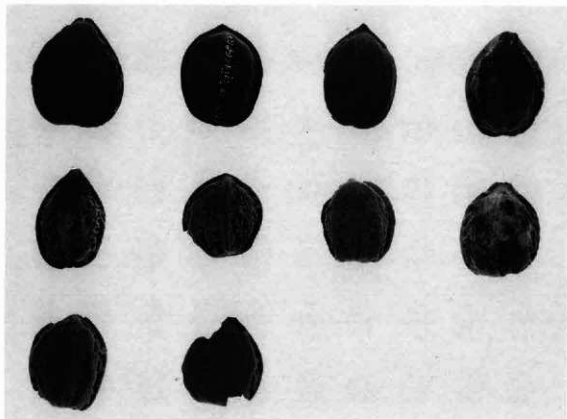
209 (裏)



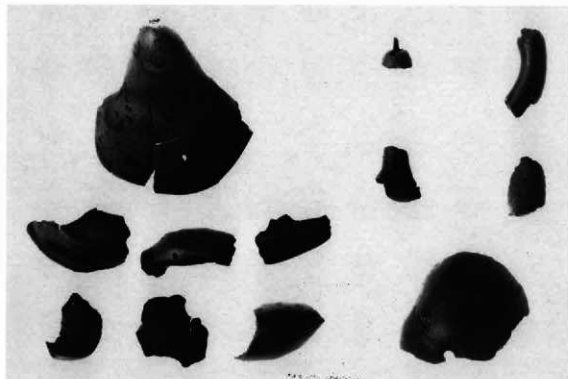
209 (接写)



深出土のモモ



1 濠出土のオニグルミ



2 濠出土のヒョウタン

三ツ寺I遺跡(木器編) 一上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第8集一

印刷 昭和63年3月25日

発行 昭和63年3月30日

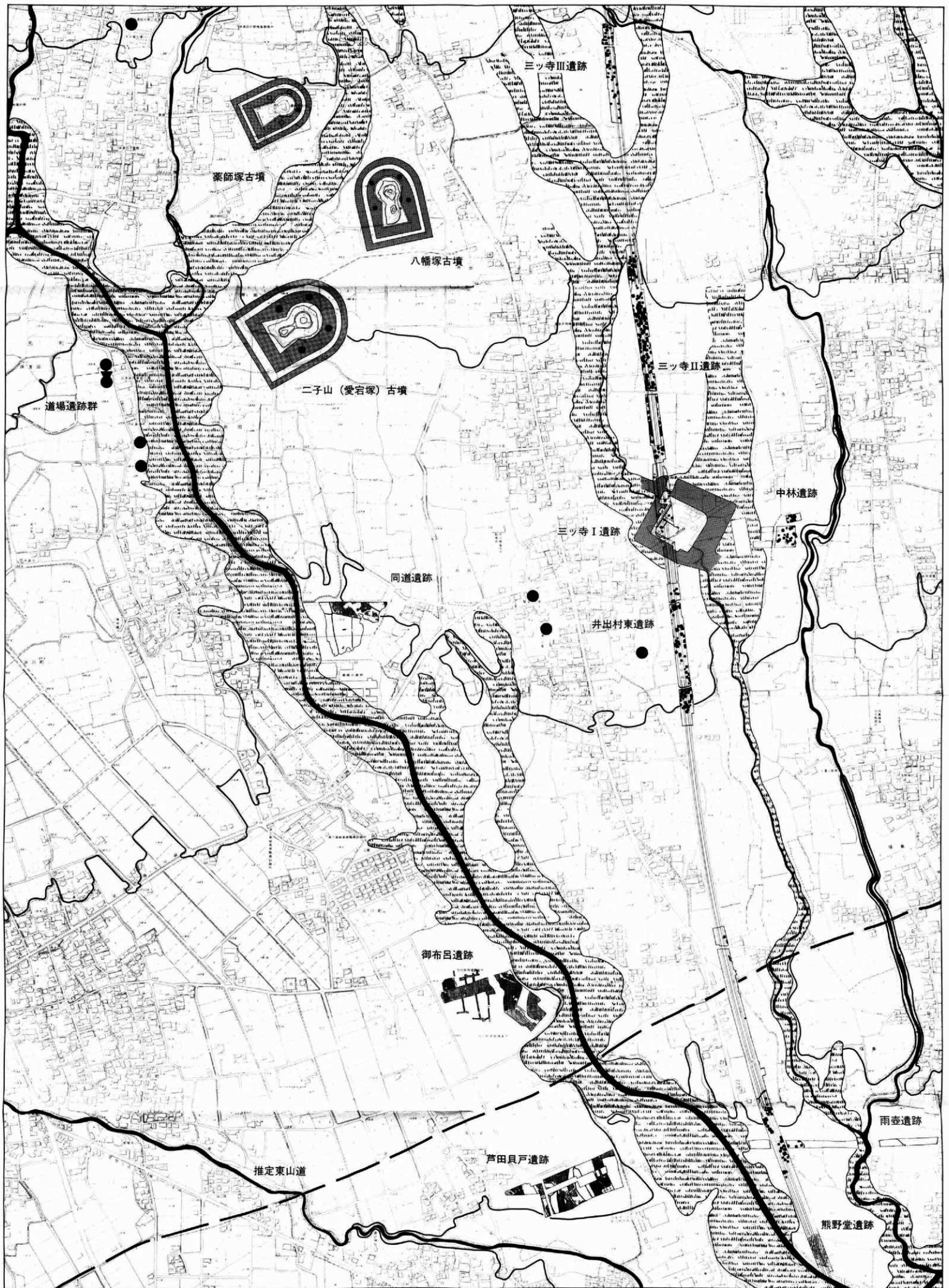


編集・発行

群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北碓村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511 (代表)

印刷

朝日印刷工業株式会社



三ッ寺I遺跡中心から二子山(愛宕塚)古墳後円部までの
距離と方位角

座標位置(座標系第Ⅳ系)	
館中心	X=+41551.05 Y=-75134.35
二子山古墳 後円部	X=+41986.40 Y=-75935.04
距離	L=911.39m
真北方位角	291°52'
磁北方位角	298°32'

群埋文
10
7

付図1 三ッ寺I遺跡の周辺地形と遺跡(1:5,000)

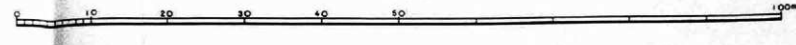


付図2 三ツ寺I遺跡全体図 (1:500)

基準点座標位置(座標系第IX系)
 基準点I X=+41674.983
 Y=-75157.009
 基準点II X=+41528.939
 Y=-75140.267
 基準点III X=+41520.056
 Y=-75217.760

91-910
 16
 (7)
 群埋文

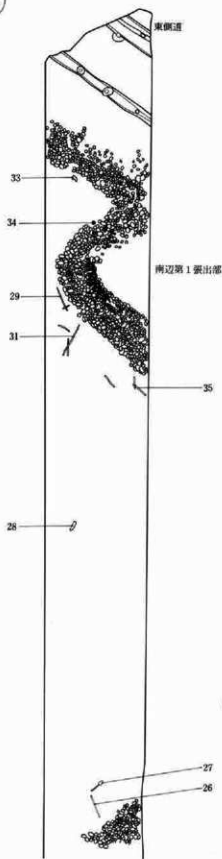
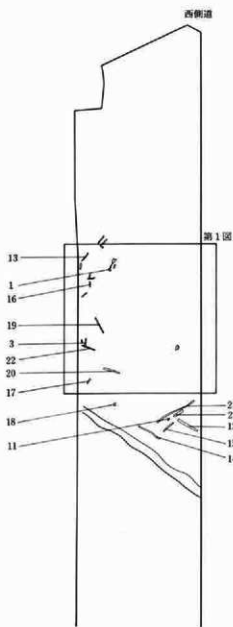
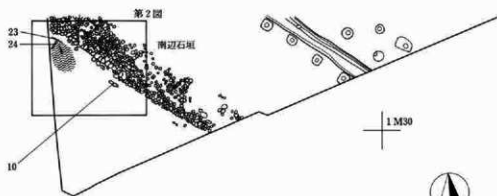
1:500



	土師器	須恵器
築造前		
I-1期		
I-2期		
II期		
III-1期		
III-2期		
IV期		
6世紀後半		
7世紀前半		

01-310
16
群埋文

付図4 三ツ寺I遺跡土器変遷図



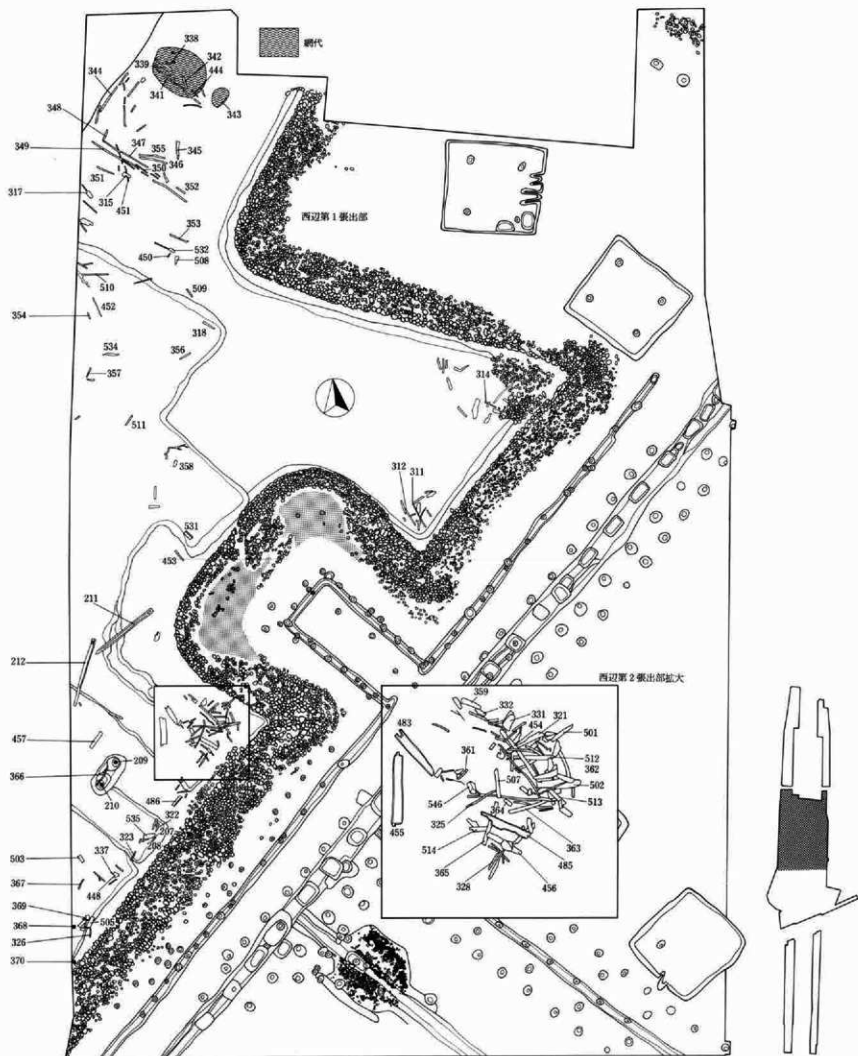
出土地点不明
4~9 25 30 32 36~54



01-310
1b
(V)
群埋文

0 1 : 200 10m

付図5 南瀬(1区)出土状態



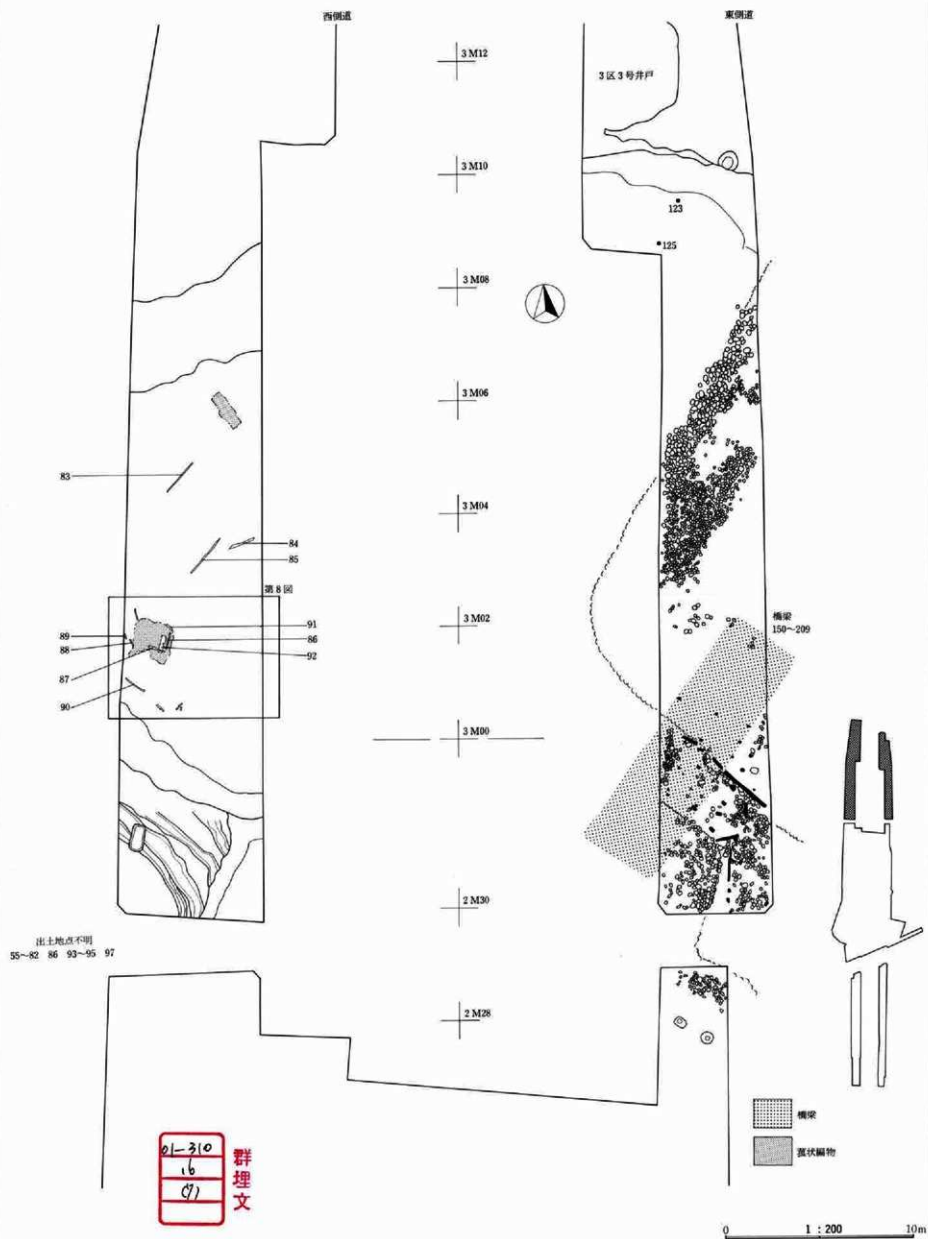
出土地点不明
 213~269 271~314 316 319 320 324
 327 329 330 333~336 340 360 371~443
 445~447 449 452 458~482 484 487~500
 504 506 515~530 533 536~545 547

01-310
 16
 (7)

群埋文

付图6 西濠(2区)出土状态

0 1:200 10m



付圖7 北濠（3区）出土狀態